

# 射水市内遺跡発掘調査報告 I

—赤田 I 遺跡本発掘調査・串田地区試掘調査—

2008年

富山県射水市教育委員会

巻首図版 1



上 赤田 I 遺跡遠景 下 赤田 I 遺跡 3 地区 1 号溝出土 草仮名墨書き土器（平安時代）

卷首図版 2



赤田 I 遺跡18地区 1号溝出土遺物（奈良～平安時代）



串田地区遠景

卷首図版 4



串田西前田遺跡出土遺物（弥生時代）

# 射水市内遺跡発掘調査報告 I

—赤田 I 遺跡本発掘調査・串田地区試掘調査—

2008年

富山県射水市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、富山県射水市内において射水市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 試掘調査・本発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、国庫補助金・県費補助金を受けて実施した。
- 3 対象となった埋蔵文化財、並びに調査に関する位置・原因・面積・期間・担当者等は第2章・第3章の調査の経緯や経過に記した。
- 4 本書の執筆・編集は、射水市教育委員会文化課主任 田中 明・主任 金三津英則が担当した。  
また、第2章第5節第4項では草仮名墨書土器について富山大学教授 鈴木景二氏より玉稿を頂いた。  
深く感謝の意を表したい。
- 5 年輪年代測定は、奈良文化財研究所年代学研究室長 光谷拓実氏に依頼し、ご教示を頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。
- 6 遺物図版掲載写真は、西大寺フォト（杉本和樹氏）に撮影委託した成果品を使用した。
- 7 発掘調査及び遺物整理の従事者は次のとおりである。（五十音順）  
【現地調査】 石黒久仁子・木沢義明・酒井 稔・田畠美智子・寺腰正夫・寺島笑子・道谷茂雄  
長谷一雄・二橋庄次郎・松林敦子・松本美智子・三上正夫・山崎祝三  
(以上射水市シルバー人材センター)  
久野静枝・酒井義雄・土田ユキ子・坪田和子・山口チズ子
- 【整理作業】 金瀬ますみ・吉島正喜・高瀬直子・開 一美・堀埜実津子・吉沢泰子
- 8 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて射水市教育委員会で一括保管している。

## 凡 例

- 1 本書に掲載の遺構図の方位は真北、水平基準は海拔高である。
- 2 遺構の分類記号は次の呼称を踏襲した。  
S D : 溝 S K : 土坑 S P : 柱穴及び柱穴状土坑 S E : 井戸 S X : 不明遺構
- 3 遺構実測図の縮尺は各々のスケールとともにその縮尺を表記した。遺物実測図の縮尺は土器の1/4を基本とするが、縮尺の異なるものはスケールとともにその縮尺を表記した。
- 4 出土遺物の番号は、遺物実測図・遺物観察表・写真図版の遺物番号にそれぞれ対応している。
- 5 本書で用いた土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に準拠している。
- 6 赤田I遺跡本発掘調査区の座標（世界測地系第VII系）は次のとおりである。  
14地区 : X 4 Y 4 = X79080 Y-7130      15地区 : X 3 Y 5 = X79080 Y-7100  
16地区 : X 6 Y 5 = X79100 Y-7140      17地区 : X 4 Y 5 = X79110 Y-7070  
18地区 : X 6 Y 6 = X79140 Y-7070      19地区 : X 4 Y 3 = X79150 Y-7060  
20地区 : X 4 Y 2 = X79088 Y-7112      21地区 : X 2 Y 2 = X79092 Y-7128  
22地区 : X 6 Y 12 = X79112 Y-7076
- 7 遺物実測図中の土器断面の表現は次のとおりとした。  
■ : 須恵器・珠洲 ■ : 黒色処理 ■ : 赤彩処理 □ : 煤・炭化物

# 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境.....	1
第2章 赤田I遺跡本発掘調査.....	3
第1節 調査に至る経緯.....	3
第2節 調査の概要.....	3
第3節 遺構と遺物.....	5
第1項 本発掘調査14地区.....	5
第2項 本発掘調査15地区.....	5
第3項 本発掘調査16地区.....	5
第4項 本発掘調査17地区.....	5
第5項 本発掘調査18地区.....	8
第6項 本発掘調査19地区.....	8
第7項 本発掘調査20地区.....	12
第8項 本発掘調査21地区.....	12
第9項 本発掘調査22地区.....	12
第4節 自然科学分析.....	33
第5節 総 括.....	35
第1項 土器.....	35
第2項 文字資料.....	36
第3項 木製品.....	36
第4項 草仮名墨書き土器.....	40
第5項 まとめ.....	46
第3章 串田地区試掘調査.....	55
第1節 調査に至る経緯.....	55
第2節 分布調査 .....	56
第1項 調査の経過.....	56
第2項 調査の方法.....	56
第3項 調査の概要.....	57
第3節 試掘調査 .....	59
第1項 調査の経過.....	59
第2項 調査の方法.....	59
第3項 調査の概要.....	59
1 布目沢II遺跡.....	59
2 串田東前田遺跡.....	60
3 串田村中遺跡.....	61
4 串田西前田遺跡.....	61
5 遺跡範囲外出土遺物.....	62
第4節 工事立会調査.....	68
第1項 調査の経過.....	68
第2項 調査の方法.....	68
第3項 調査の概要.....	68
第5節 総 括.....	69
第1項 調査対象地の地形及び遺跡の変遷.....	69
第2項 歴史的環境と調査のまとめ.....	72

# 卷首図版目次

- 卷首図版 1 赤田 I 遺跡遠景 赤田 I 遺跡 3 地区 1 号溝出土 草仮名墨書き土器（平安時代）  
卷首図版 2 赤田 I 遺跡18地区 1号溝出土遺物（奈良～平安時代）  
卷首図版 3 串田地区遠景  
卷首図版 4 串田西前田遺跡出土遺物（弥生時代）

# 挿図目次

第1図	射水市の位置	1
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第3図	発掘区位置図	4
第4図	遺構実測図 [14・15地区]	6
第5図	遺構実測図 [16・17地区]	7
第6図	遺構実測図 [18地区]	9
第7図	遺構実測図 [18地区] S D01	10
第8図	遺構実測図 [19地区]	11
第9図	遺構実測図 [19地区] S D01	12
第10図	遺構実測図 [20地区]	13
第11図	遺構実測図 [21・22地区]	14
第12図	遺物実測図 [14地区] S K06 [15地区] 包含層 [16地区] S D03 [17地区] 包含層	15
第13図	遺物実測図 [17地区] 包含層 [18地区] S D01	16
第14図	遺物実測図 [18地区] S D01 S D06 S K11 包含層	17
第15図	遺物実測図 [18地区] S D01	18
第16図	遺物実測図 [18地区] S D01	19
第17図	遺物実測図 [18地区] S D01	20
第18図	遺物実測図 [18地区] S D01	21
第19図	遺物実測図 [18地区] S D01	22
第20図	遺物実測図 [18地区] S D01	23
第21図	遺物実測図 [18地区] S D01	24
第22図	遺物実測図 [18地区] S D01 [19地区] S D01	25
第23図	遺物実測図 [19地区] S D01	26
第24図	遺物実測図 [19地区] S D01	27
第25図	遺物実測図 [20地区] S D01	28
第26図	遺物実測図 [20地区] S D01	29
第27図	遺物実測図 [20地区] S D01	30
第28図	遺物実測図 [20地区] S D01	31
第29図	遺物実測図 [20地区] S D01 [22地区] S D02 S D03 S K01	32
第30図	緑釉陶器実測図 [3地区] S D01	35
第31図	祭祀溝遺構実測図	36
第32図	祭祀溝出土遺物実測図	37
第33図	草仮名墨書き詳細図	45
第34図	調査対象地及び周辺の遺跡	55
第35図	分布調査の結果	58
第36図	試掘トレンド配置図(1)	63
第37図	試掘トレンド配置図(2)	64
第38図	試掘トレンド配置図(3)	66
第39図	調査結果総括図	70
第40図	遺物実測図 [串田地区試掘調査(1)]	76
第41図	遺物実測図 [串田地区試掘調査(2)]	77
第42図	遺物実測図 [串田地区試掘調査(3)]	78
第43図	遺物実測図 [串田西前田遺跡工事立会調査(1)]	79
第44図	遺物実測図 [串田西前田遺跡工事立会調査(2)]	80

## 表 目 次

第1表	赤田土地区画整理事業地内調査一覧	3
第2表	木製品樹種同定表	33
第3表	祭祀関連遺物出土表	36
第4表	年輪年代測定結果	37
第5表	保存処理完了遺物表	38
第6表	仮名字体表	44
第7表	古代赤田I遺跡年表	46
第8表	出土遺物観察表（1～53）	47
第9表	出土遺物観察表（54～104）	48
第10表	出土遺物観察表（105～158）	49
第11表	出土遺物観察表（159～211）	50
第12表	出土遺物観察表（212～262）	51
第13表	出土遺物観察表（263～315）	52
第14表	出土遺物観察表（316～369）	53
第15表	出土遺物観察表（370～393）	54
第16表	分布・試掘調査年次表	56
第17表	工事立会調査実施一覧	68
第18表	遺跡総括結果表	72
第19表	試掘トレンチ一覧表（1～56）	73
第20表	試掘トレンチ一覧表（57～112）	74
第21表	試掘トレンチ一覧表（113～168）	75
第22表	出土遺物観察表（1～52）	81
第23表	出土遺物観察表（53～104）	82

## 図版目次

図版1	遺構全景・土坑	[14地区]	S K02	S K05	S K06
図版2	遺構全景	[15・16地区]			
図版3	遺構全景・溝	[17地区]	S D01	S D02	S D03
図版4	遺構全景	[18地区]			
図版5	溝・土坑・遺物出土状況	[18地区]	S D01	S D07	S D10 S K05
図版6	遺構全景・溝・遺物出土状況	[19地区]	S D01		
図版7	遺構全景・溝・遺物出土状況	[20地区]	S D01		
図版8	遺構全景	[21・22地区]			
図版9	出土遺物 木製品・土器・石製品	[14地区]	S K06	包含層 [15・17地区]	包含層
図版10	出土遺物 土器・石製品	[18地区]	S D01	S D06 S K11	包含層 [19地区] S D01
図版11	出土遺物 土器・木製品	[18地区]	S D01	[19地区]	S D01
図版12	出土遺物 木製品	[18地区]	S D01		
図版13	出土遺物 木製品	[18地区]	S D01	[19地区]	S D01
図版14	出土遺物 木製品	[18地区]	S D01	[19地区]	S D01
図版15	出土遺物 木製品	[18地区]	S D01	[19地区]	S D01
図版16	出土遺物 木製品	[18地区]	S D01		
図版17	出土遺物 木製品	[18地区]	S D01	[19地区]	S D01
図版18	出土遺物 土器	[20地区]	S D01		
図版19	遺跡遠景・遺物出土状況	[布目沢II遺跡]			
図版20	遺跡遠景・遺構検出状況	[串田東前田遺跡]			
図版21	遺構検出状況	[串田東前田遺跡]			
図版22	遺跡遠景・遺構検出状況	[串田村中遺跡]			
図版23	遺跡遠景・遺物出土状況	[串田西前田遺跡]			
図版24	作業風景等				
図版25	工事立会調査				
図版26	試掘・工事立会調査出土遺物（1）				
図版27	試掘・工事立会調査出土遺物（2）				
図版28	試掘調査出土遺物（1）				
図版29	試掘調査出土遺物（2）				
図版30	工事立会調査出土遺物				

# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

射水市は富山県のほぼ中央に位置し、市域は東西約11km、南北約15kmで総面積109.18kmである。北部に富山湾、中央に射水平野、南部に射水丘陵を配し、標高0～140mを測る。富山市・高岡市と隣接し、交通の便に恵まれていることから、住宅団地造成が頻繁に行われ、ベットタウン化が進んでいる。現在の人口は約9万5千人余りである。

射水平野は、東の神通川と西の庄川に挟まれた東西約11km、南北約7kmの範囲の低湿地帯である。およそ1万～8千年前に形成された複合扇状地性三角州沖積平野で、河川によって運ばれた土砂や粘土・礫が堆積している。この沖積層が堆積した時代は海岸線が沖へ後退して平野部は現在より広かったとみられ、その後は縄文海進とよばれる気候変化と海面上昇により、海岸線が陸へ進行して平野部が狭まり、現地形で標高約5m以下は海面下に没することになる。やがて気候の寒冷化による海面後退、河川の土砂が堆積することでかつての海は小さく放生津潟(現：富山新港)としてのみ形を残し、周辺に湿原が現れる。この湿原は放生津潟の水面と標高差が殆どないため、河川の流れが濁み沼沢地を形成、湿原の植物が枯れて泥炭が堆積し、平野部が開けていくことになる。また、射水丘陵は新生代第三紀の青井谷泥岩層を基盤とし、上層に礫と砂泥からなる日ノ宮互層と太閤山火碎岩層が堆積している。鍛冶川・下条川・和田川やその支流によって河岸段丘や樹枝状の谷間が形成されている。このような自然環境で先人達は集落を形成していたと考えられる。現在、市内には460箇所の遺跡が密集し、平野部に集落遺跡、丘陵部に生産遺跡の立地が多く確認されている。

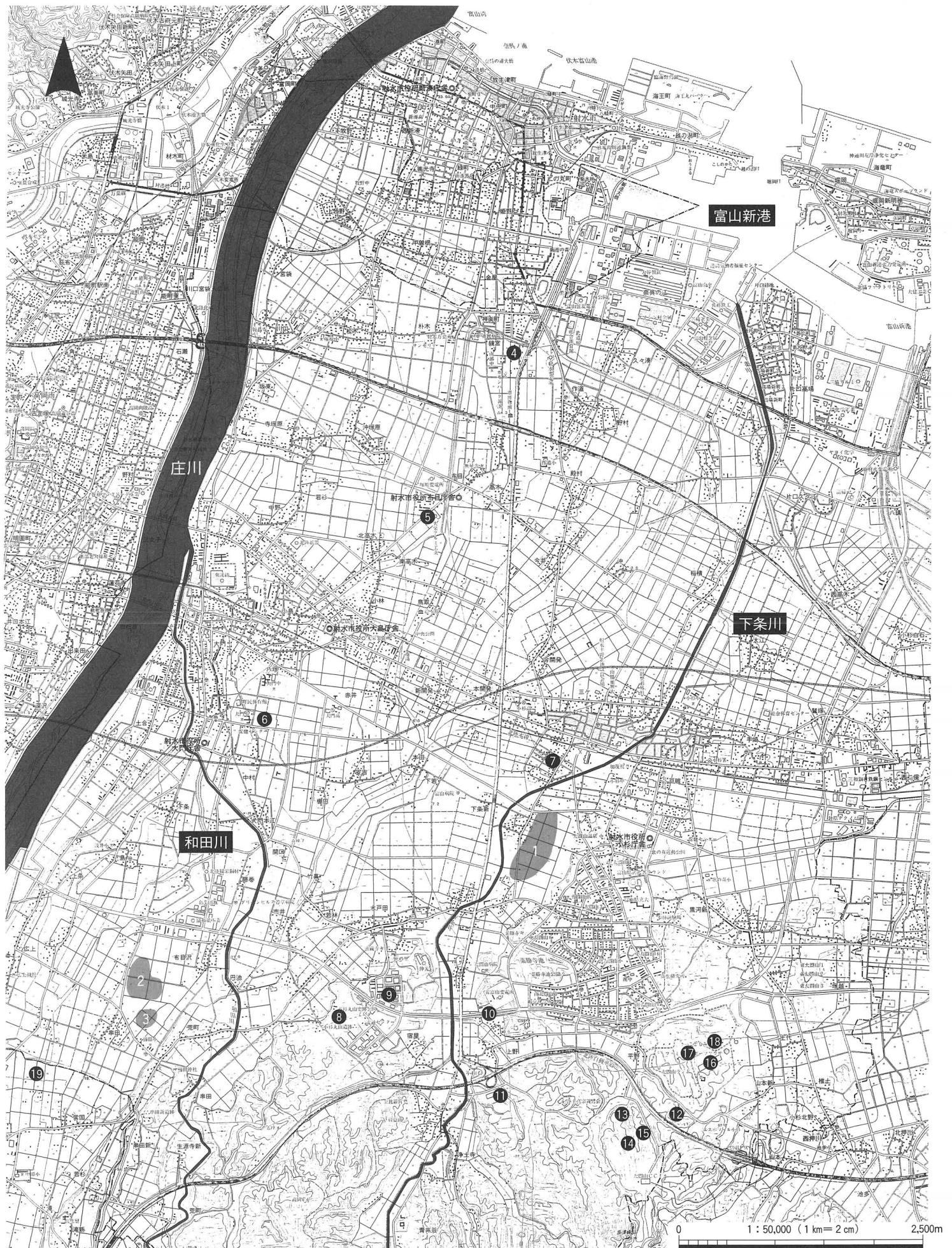
丘陵部では国指定史跡の小杉丸山遺跡、小杉流通業務団地内遺跡、上野南遺跡、赤坂A～D遺跡など生産遺跡が集中している。これらの遺跡は須恵器窯跡約39遺跡、製鉄遺跡約147遺跡を数えており県内最大規模を有する。須恵器生産窯跡や鉄生産製鉄炉と炭窯、工人の住居や作業場が見つかり、窯や炉を築くのに適した地形、粘土や薪・水の供給源が豊富にあることが好条件であったと考えられている。平野部では河川に近い地域に高島A遺跡、北高木遺跡、二口油免遺跡、小杉伊勢領遺跡などの集落遺跡が分布し、堅穴住居や掘立柱建物、溝や井戸などが確認されている。生産地である丘陵部と消費地である平野部を河川が結んで、交通路として機能していたために集落が営われてきたと考えられている。

赤田I遺跡は、射水平野を流れる下条川右岸の自然堤防東側縁辺部(標高約5m)に位置し、弥生時代後期～古墳時代前期、奈良・平安時代の2時期を中心とする複合遺跡である。平成14年度から継続してきた発掘調査より、平安時代の祭祀(祓えの儀式)を行った溝が検出され、斎串・人形・馬形などの木製祭祀具の他、墨書や赤彩処理を施した土師器類が複数折り重なった状態で大量出土している。当時の都での祭祀行為が、この集落においても伝播し行われていたことが確認されている。

串田地区は、庄川と和田川に挟まれた標高約12～17mの扇状地上に立地している。地区の東方約500mには延喜式内社の櫛田神社が鎮座しており、その背後に位置する標高約46mの独立丘陵上には、縄文時代中期後葉の標識遺跡として知られる国指定史跡串田新遺跡が所在する。地区内では北東の布目沢地内から広がる布目沢II遺跡と本村遺跡の存在が知られている。布目沢II遺跡では過去に23,000枚を超える埋納錢が出土し、平成9年に行われた試掘調査では中世の集落跡が確認されている。また地区の南に隣接する高岡市常国地内には常国北遺跡が所在する。



第1図 射水市の位置



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

- ①赤田 I 遺跡
- ②布目沢 II 遺跡
- ③本村遺跡
- ④高島 A 遺跡
- ⑤北高木遺跡
- ⑥二口油免遺跡
- ⑦小杉伊勢領遺跡
- ⑧小杉丸山遺跡
- ⑨小杉流通業務団地内遺跡
- ⑩南太閤山 I 遺跡
- ⑪上野南遺跡
- ⑫～⑯赤坂 A～D 遺跡
- ⑯～⑰石太郎 G～J 遺跡
- ⑲常国北遺跡

## 第2章 赤田Ⅰ遺跡本発掘調査

### 第1節 調査の経過

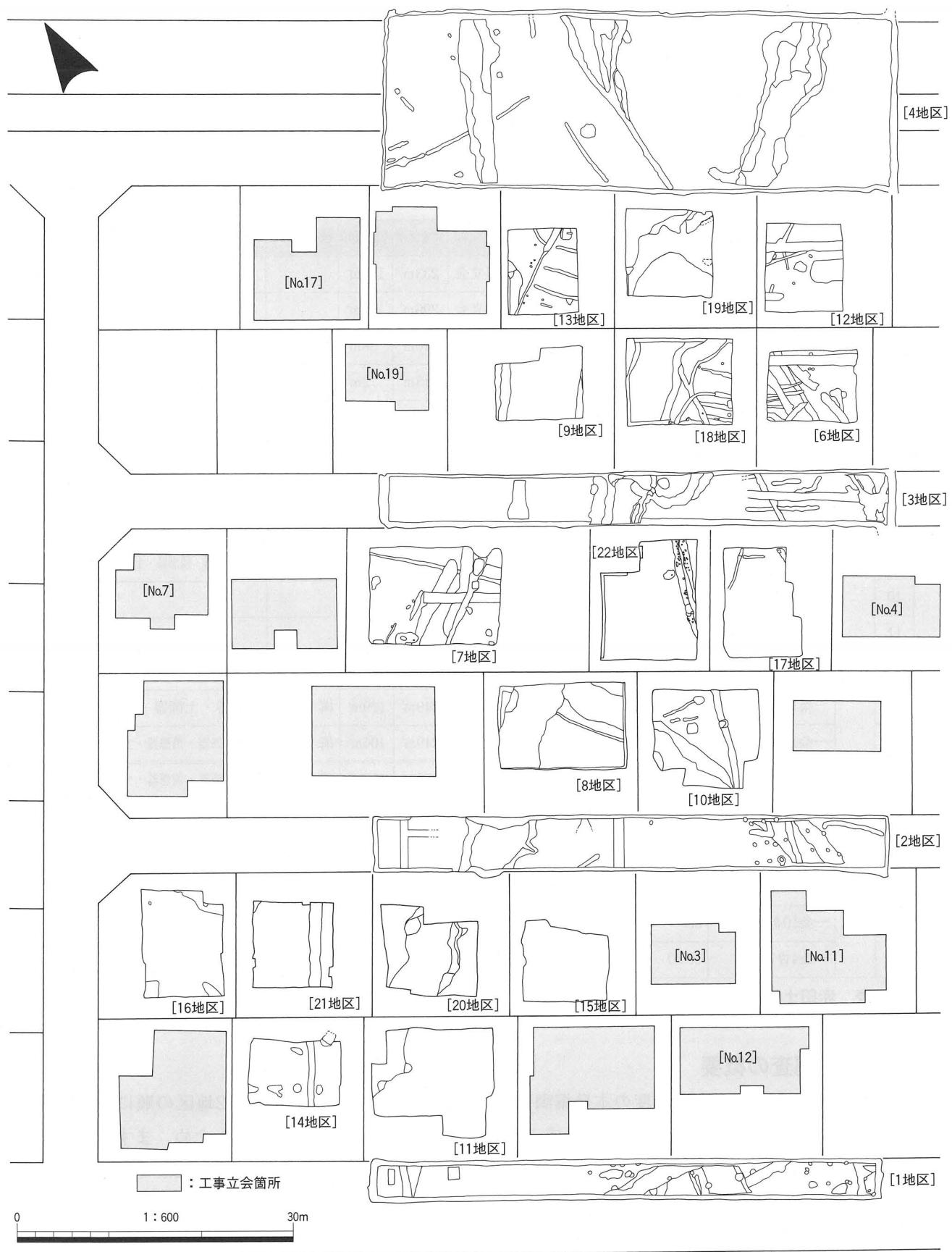
平成14年度試掘調査の結果を受け、赤田地区画整理事業地内の宅地部分において平成18年度6箇所、平成19年度3箇所の合計9箇所で本発掘調査を実施した。各調査区での概要は第3節に記した。工事立会調査は2箇年で11箇所実施したが、遺構や遺物は検出されなかった。今年度、地区画整理事業地内における遺跡の盛土保存区域は、対象区画全てにおいて現状保存や記録保存を伴う本発掘調査が実施されたことに至った。工事立会区域の残り11箇所においては平成20年度以降の対応となった。

No.	年度	所在地	調査区	調査期間	調査担当者	調査種類	対象面積	発掘面積	検出遺構	出土遺物
1	18	一条4番1				工事立会	233m <sup>2</sup>	116m <sup>2</sup>		
2		一条12番12		4.13	原田	工事立会	299m <sup>2</sup>	105m <sup>2</sup>		
3		一条12番5		5.19	原田	工事立会	220m <sup>2</sup>	58m <sup>2</sup>		
4		一条11番7		6.15・6.19	金三津	工事立会	213m <sup>2</sup>	72m <sup>2</sup>		
5		一条12番16	14	7.4~8.1	原田・田中	本発掘	230m <sup>2</sup>	113m <sup>2</sup>	土坑	須恵器・木製品・古錢
6		一条12番4	15	7.5~8.8	原田・田中	本発掘	220m <sup>2</sup>	106m <sup>2</sup>		須恵器・土師器・綠釉陶器
7		一条11番1		8.4	原田	工事立会	215m <sup>2</sup>	74m <sup>2</sup>		
8		一条12番1	16	8.8~8.29	原田・金三津	本発掘	233m <sup>2</sup>	128m <sup>2</sup>	溝・土坑	木製品
9		一条11番6	17	8.29~9.15	原田・金三津	本発掘	213m <sup>2</sup>	104m <sup>2</sup>	溝	古墳土師器・須恵器・土師器・近世陶磁器
10		一条4番10		8.29・9.4	金三津	工事立会	208m <sup>2</sup>	72m <sup>2</sup>		
11		一条12番6		9.1~9.5	原田・金三津	工事立会	268m <sup>2</sup>	120m <sup>2</sup>		
12		一条12番13		9.5・9.6	原田・金三津	工事立会	265m <sup>2</sup>	100m <sup>2</sup>		
13		一条10番14	18	9.15~10.6	原田・金三津	本発掘	249m <sup>2</sup>	129m <sup>2</sup>	溝・土坑	須恵器・土師器・珠洲・木製品
14		一条10番5	19	11.9~12.7	原田・金三津	本発掘	249m <sup>2</sup>	106m <sup>2</sup>	溝	古墳土師器・須恵器・土師器・木製品
15	19	一条12番3	20	5.17~6.12	田中・金三津	本発掘	236m <sup>2</sup>	113m <sup>2</sup>	溝	古墳土師器・須恵器・土師器・木製品
16		一条12番2	21	5.17~6.12	田中・金三津	本発掘	238m <sup>2</sup>	107m <sup>2</sup>	土坑	土師器
17		一条10番2		5.28	尾野寺	工事立会	226m <sup>2</sup>	109m <sup>2</sup>		
18		一条11番5	22	7.12~7.25	田中・金三津	本発掘	212m <sup>2</sup>	146m <sup>2</sup>	溝・土坑	古墳土師器・近世陶磁器
19		一条10番16		8.4	田中	工事立会	199m <sup>2</sup>	56m <sup>2</sup>		
20		一条4番7		10.30	尾野寺	工事立会	231m <sup>2</sup>	106m <sup>2</sup>		

第1表 赤田地区画整理事業地内調査一覧

### 第2節 調査の概要

調査区は平成14・16・17年度の本発掘調査に引続いて設定され、14地区～22地区の順に隨時調査を行った。過年度同様いずれの地区も造成工事により山砂の盛土がなされていたため、まず重機で盛土と旧水田耕作土を除去し、その後作業員を投入して包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。作業の進捗状況に応じて写真撮影や遺構平面図作成などの記録・図化作業を順次実施した。調査終了後は全ての地区で埋め戻しを行って現況復帰を図っている。その際に住宅基礎工事の改良掘削深度より深い遺構が検出された地区では、不動沈下防止のために新たな山砂を充填し重機で踏み固めている。遺構より排出された泥は公共残土として搬出され処理した。



第3図 発掘区位置図 (1/600)

### 第3節 遺構と遺物

#### 第1項 本発掘調査14地区

##### 2号土坑 (SK02、第4図、図版1)

14地区の中央やや南側に位置する円形土坑である。規模は直径90cm、深さ10cmで、断面は皿状を呈する。覆土は褐灰色粘質シルトが堆積する。遺物の出土はない。

##### 6号土坑 (SK06、第4・12図、図版1・9)

14地区の北東隅に位置する不整形土坑である。規模は長軸168cm、短軸118cm、深さ50cmで、断面は逆台形を呈する。覆土は上層に褐灰色粘質シルト、下層に黄灰色粘質シルトが堆積する。遺物は木製品が出土。第12図1～14は上端を圭頭状、下端を剣先状に作りだす祭祀具の斎串である。長さ8.8cm～12.5cmを測り、樹種は全てスギを使用している。時期は8世紀後半のものである。

#### 第2項 本発掘調査15地区

##### 包含層出土遺物 (第12図、図版2・9)

15地区より遺構は検出されなかったが包含層からは須恵器・土師器・綠釉陶器が出土している。第12図22は櫛描波状文が施された須恵器甕の口頸部破片である。29は淡緑色の釉薬が施された京都洛北産の綠釉陶器塊である。

#### 第3項 本発掘調査16地区

##### 3号溝 (SD03、第5・12図、図版2)

16地区の南東隅に位置する溝である。全長約2mを検出し、南端は発掘区外へ伸びる。断面は皿状を呈し、覆土は黒褐色粘質シルトが堆積、炭化物が混在する。遺物は木製品が出土している。

##### 4号柱穴状土坑 (SP04、第5図、図版2)

16地区の北西隅に位置する楕円形柱穴状土坑である。規模は長軸34cm、短軸28cm、深さは最深で33cmを測る。断面は不整形を呈し、北側底面は一段テラス状に高くなる。覆土は黒褐色粘質シルトが堆積し、炭化物が混在する。遺物の出土はない。

#### 第4項 本発掘調査17地区

##### 1号溝 (SD01、第5図、図版3)

17地区の北側に位置する幅26cm～42cmの溝である。北東～南西方向に直線的に伸び、全長約4.6mを検出。断面は逆台形を呈し、覆土は炭化物を含む黒色粘質シルトが堆積する。遺物の出土はない。

##### 2号溝 (SD02、第5図、図版3)

17地区の北側に位置する幅約30cm、全長2.4m、深さ8cmの溝である。断面は逆台形を呈し、覆土は炭化物を含む黒色粘質シルトが堆積する。遺物の出土はない。

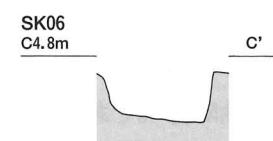
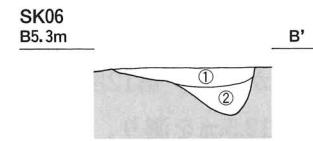
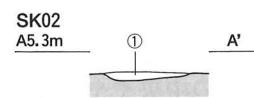
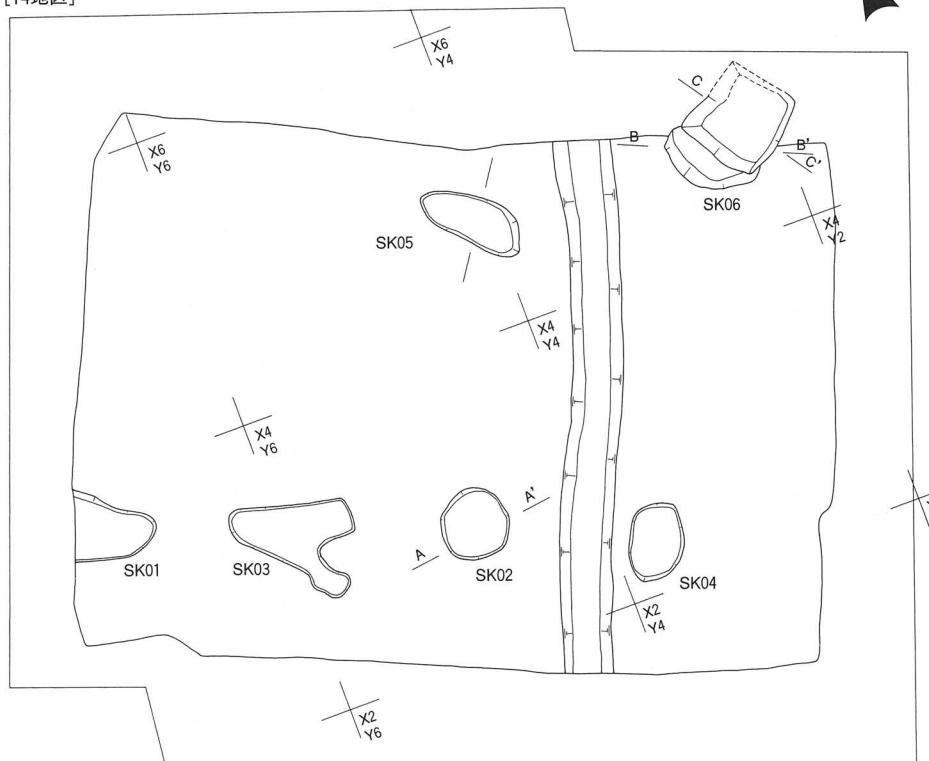
##### 3号溝 (SD03、第5図、図版3)

17地区の北東隅に位置する南北溝である。幅約60cm、全長1.3mを検出し、南端は発掘区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、覆土は炭化物を含む黒色粘質シルトが堆積する。遺物の出土はない。

##### 包含層出土遺物 (第12・13図、図版9)

包含層からは古墳土師器・須恵器・土師器・近世陶磁器・砥石・鉄石英剥片が出土している。第12図32は玉作り荒割工程の鉄石英剥片5gである。35は底径5.3cmの古墳土師器甕。39・40は砥石、41・42は碁石である。第13図43はボタン状のつまみをもつ須恵器壺蓋。

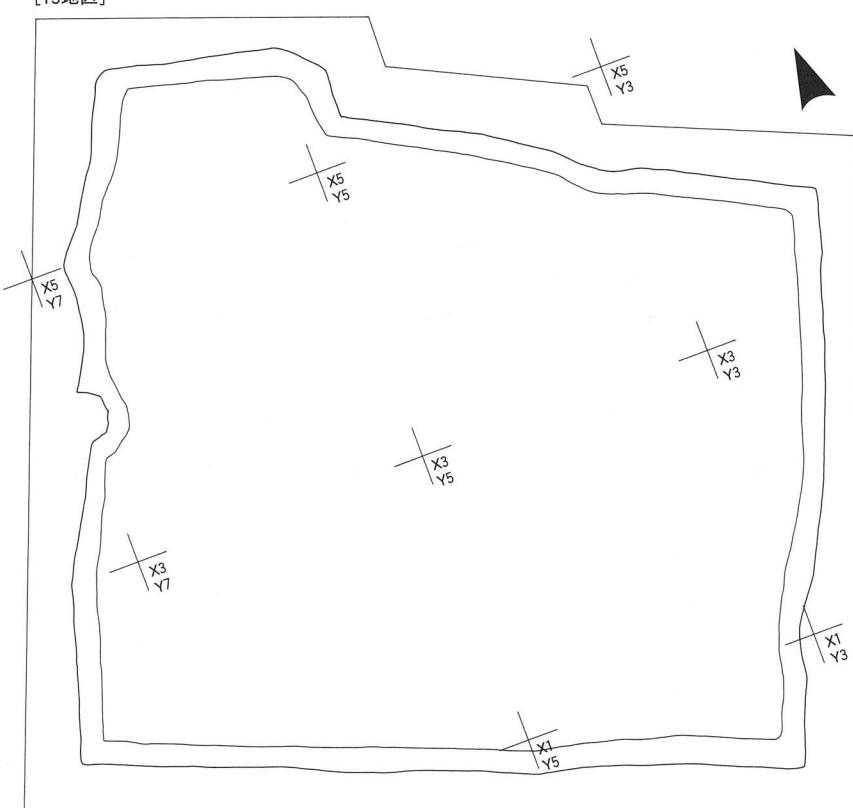
[14地区]



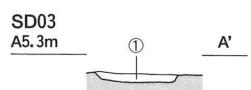
0 1 : 80 4 m

0 1 : 100 5 m

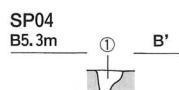
[15地区]



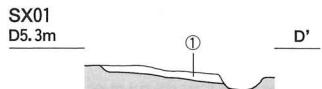
第4図 遺構実測図 [14・15地区] (1/100, 断面図1/80)



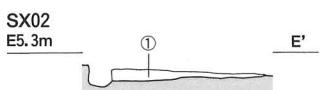
① 黒褐色(10YR2/2)土  
しまりやや強、粘性強  
炭化物ごくわずかに混在



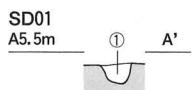
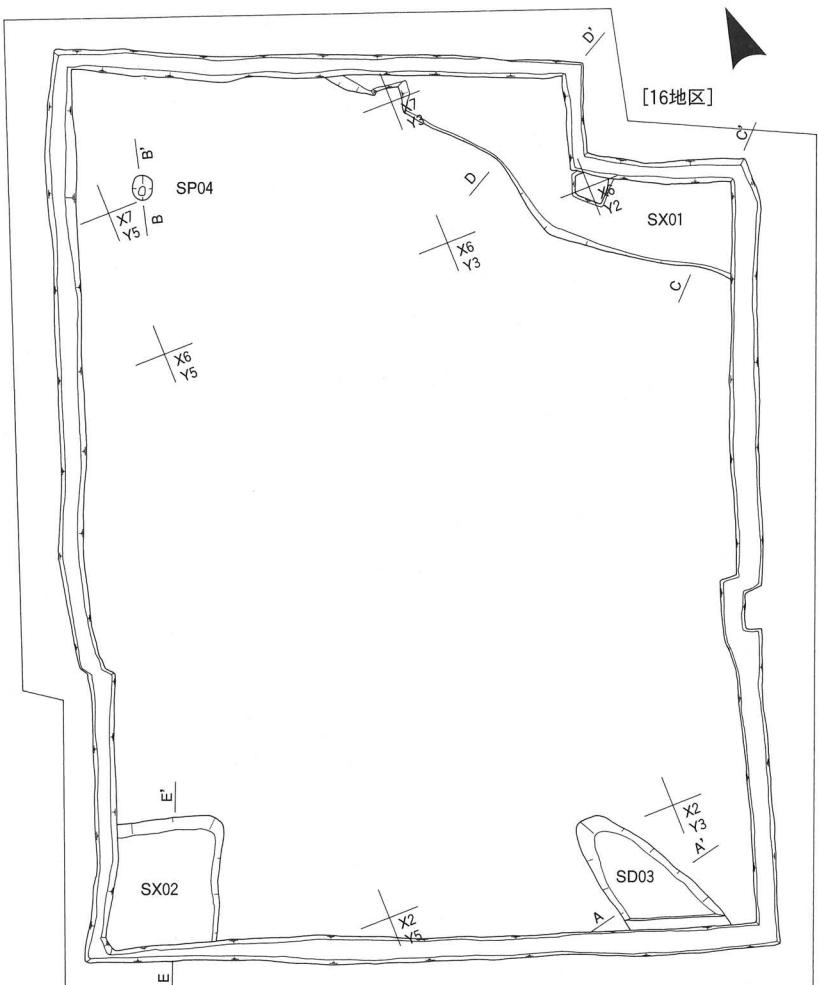
① 黒褐色(2.5Y3/1)土  
しまりやや強、粘性強  
炭化物やや多く混在



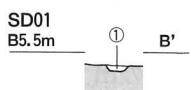
① 黒褐色(2.5Y3/1)土  
しまり弱、粘性強、炭化物わずかに混在



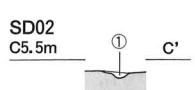
① 黒褐色(2.5Y3/1)土  
しまり弱、粘性強、炭化物ごくわずかに混在



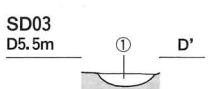
① 黒色(10YR2/1)土  
しまりやや強、粘性弱



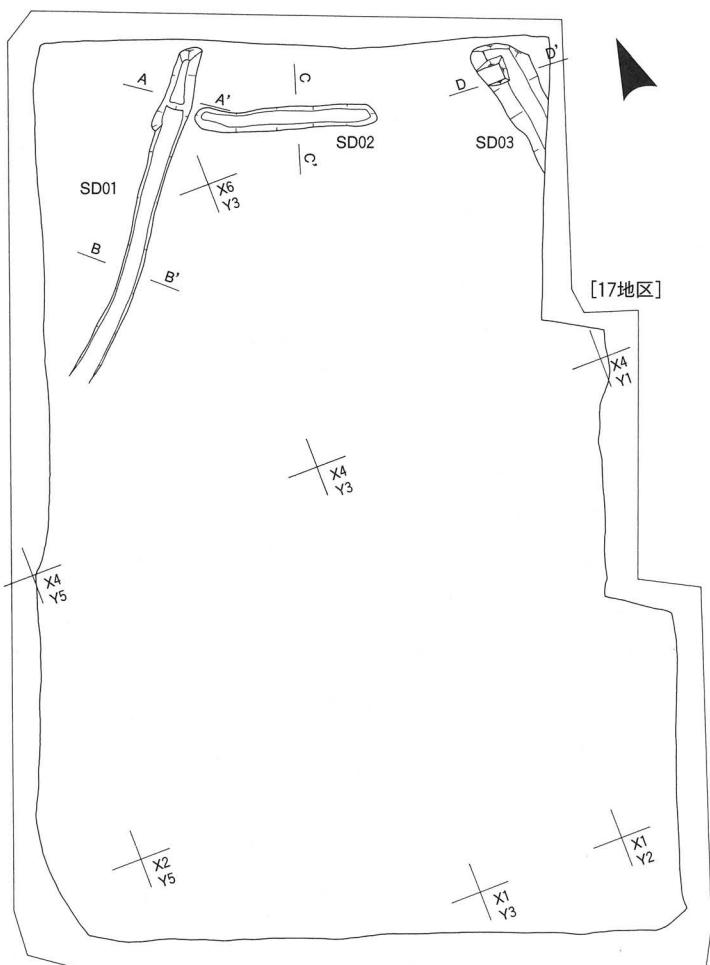
① 黒色(10YR2/1)土  
しまりやや強、粘性弱  
炭化物細片わずかに混在



① 黒色(10YR2/1)土  
しまりやや強、粘性弱  
炭化物細片わずかに混在



① 黒色(10YR2/1)土  
しまりやや強、粘性弱  
炭化物細片わずかに混在



第5図 遺構実測図 [16・17地区] (1/100, 断面図1/80)

## 第5項 本発掘調査18地区

### 1号溝 (S D01、第6・7・13~22図、図版4・5・10~17)

18地区の西側に位置し、北東一南西方向にやや蛇行しながら伸びる溝である。幅522cm~580cm、全長約8.5mを検出。北端は19地区、南端は3地区へと繋がる祭祀溝の続きと考える。断面は逆台形を呈し、左岸に比べて右岸は溝底から溝肩への傾斜が緩くなっている。覆土は上層に黒色・黒褐色粘質シルト、下層にオリーブ黒色粘質シルトが堆積する。土層は6層に細分され、なかでも4層は腐植物遺体や木製品を多く含んでいる。深さは最深で1.5mを測る。遺物は須恵器・土師器・近世陶磁器・木製品が出土している。第13図61は内外面に赤彩を施した土師器塊Aである。67は須恵器の長頸壺。時期は9世紀後半のもの。第14図84~89は編み台・糸巻(糸掛け・腕木)などの紡織具、樹種はスギである。91は右足用の連歯下駄。第15図92は椀、93は黒漆塗り大皿でともに挽物、樹種はケヤキである。第17図112~128は曲物底板。125は年輪年代法により残存最外年輪の年代が西暦617年と確定したヒノキのもの。第18図130~134は律令祭祀具の斎串、時期は8世紀後半のものである。

### 6号溝 (S D06、第6・14図、図版4・10)

18地区の東側に位置する溝である。全長3.3m検出し、南端は発掘区外へ伸びる。断面は逆台形を呈し、覆土は黒褐色粘質シルトが堆積する。遺物は土師器・珠洲が出土している。第14図79は1.4cm幅に卸目6条の珠洲片口鉢である。

### 7号溝 (S D07、第6図、図版4・5)

18地区の南東側に位置し、弧状に曲がる溝である。全長8m検出し、両端とも発掘区外へ伸びる。新旧関係は交差する10号溝より新しい。覆土は黒褐色粘質シルトが堆積する。遺物の出土はない。

### 10号溝 (S D10、第6図、図版4・5)

18地区の南側に位置する南北溝である。幅53cm~74cm、全長約6mを検出。南端は発掘区外へ伸びるが、北端は1号溝を切っているため、時期はより新しい。遺物の出土はない。

### 5号土坑 (S K05、第6図、図版4・5)

18地区の東側に位置する円形土坑である。規模は直径28cm、深さは18cm。断面は逆台形を呈し、覆土は黒褐色粘質シルトが堆積する。遺物の出土はない。

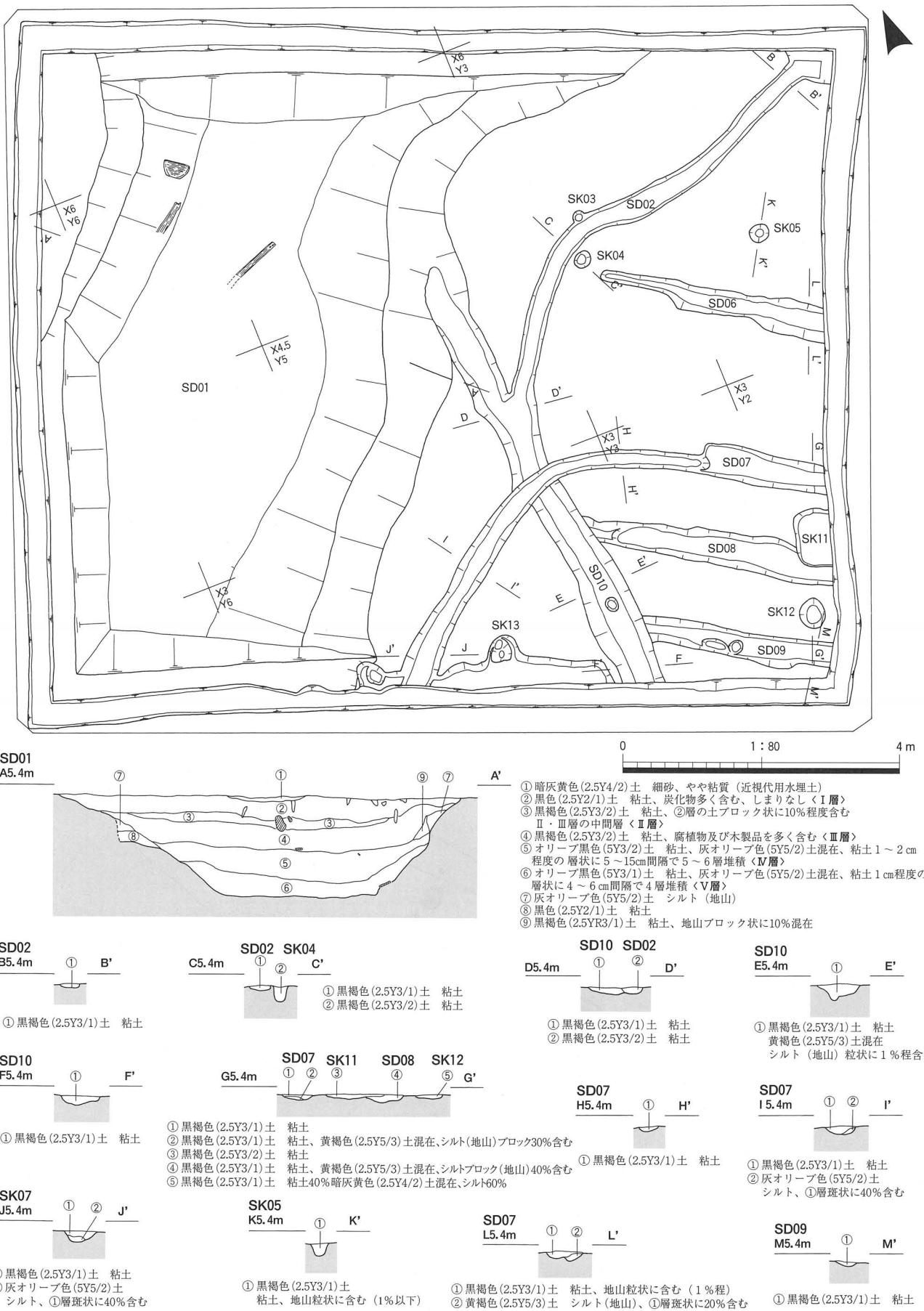
### 11号土坑 (S K11、第6・14図、図版4・10)

18地区の南東隅に位置する土坑である。発掘区外へ伸びるため、正確な外形不明。覆土は黒褐色粘質シルトが堆積する。遺物は土師器・近世陶磁器が出土。第14図80は唐津のすり鉢破片である。

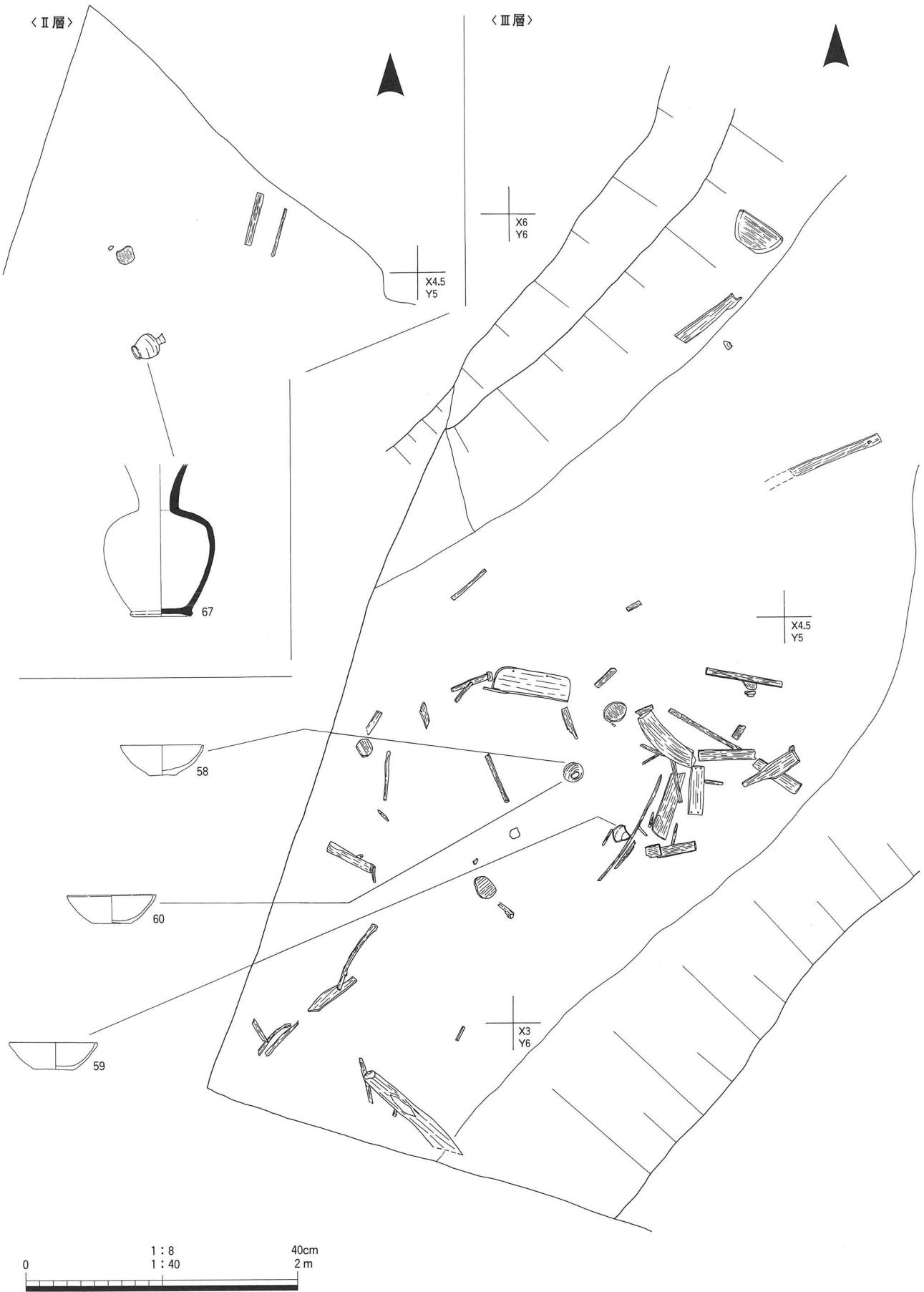
## 第6項 本発掘調査19地区

### 1号溝 (S D01、第8・9・22~24図、図版6・10・11・13~15・17)

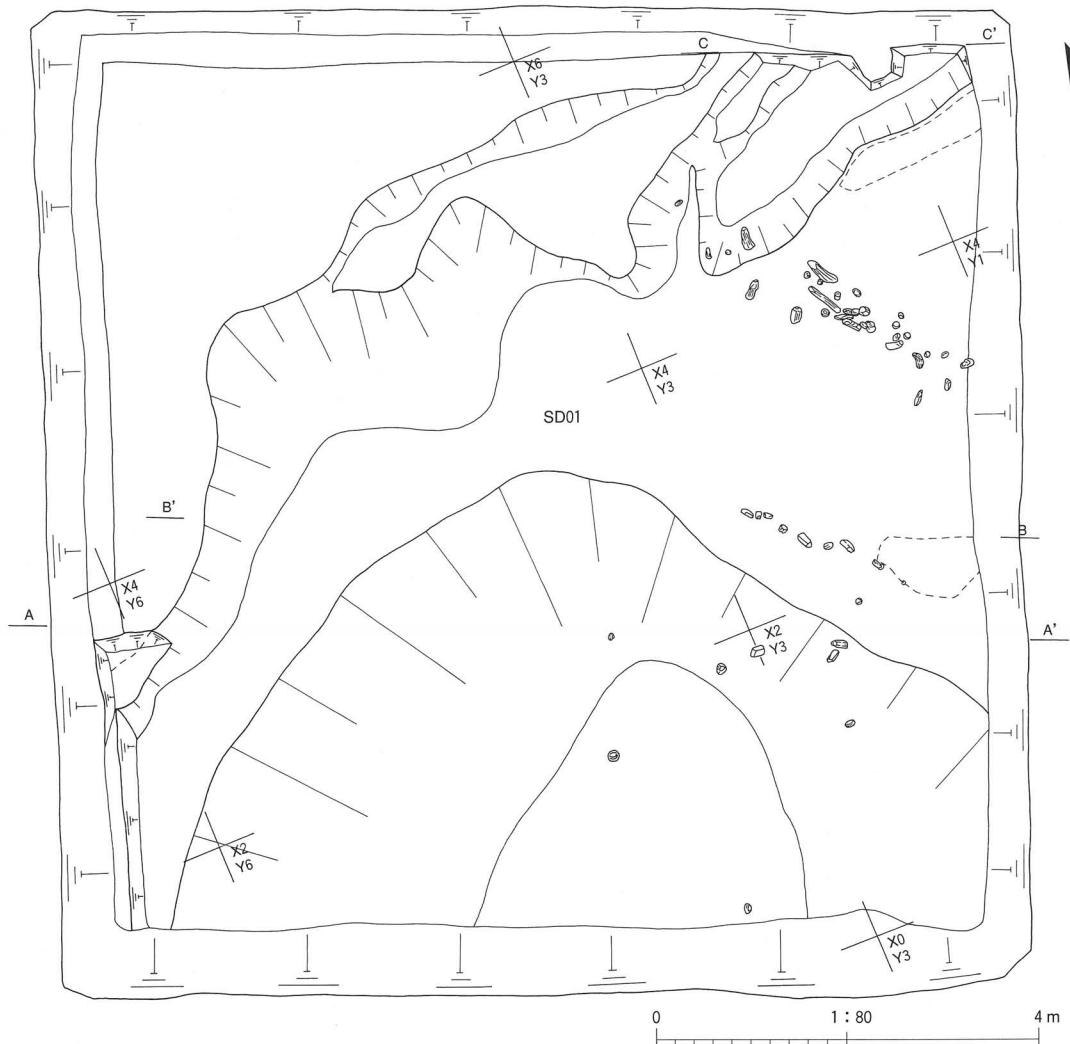
19地区の7割強を占め、北端は4地区、南端は18地区へと繋がる祭祀溝である。右岸の溝肩は調査区外へ伸びるため溝幅が2倍余に増すものと考えられる。溝中に流れと直交するような木杭列を2列検出、間隔は約2.3mを測る。桁木・床材がないことや最も溝幅が増す場所などの理由から橋ではなく堰状遺構と考える。覆土は黒褐色粘質シルトが堆積し、炭化物や腐植物遺体が混在している。深さは最深で1.2mを測る。遺物は古墳土師器・須恵器・土師器・木製品・石製品・鉄滓が出土している。第22図197~207は有段ないし「く」の字口縁の甕である。時期は古墳時代前中期。第23図217~232は土師器塊Aで半数以上に赤彩処理が施されている。第24図251~255は上部の両側縁に削りかけを施さないタイプの斎串、時期は9世紀中葉以降のものである。樹種はスギ。258は墨書で魚の目・ヒレを表現するが、形状は舟形を思わせるスギ材製品である。261は瓢箪を利用した柄杓である。



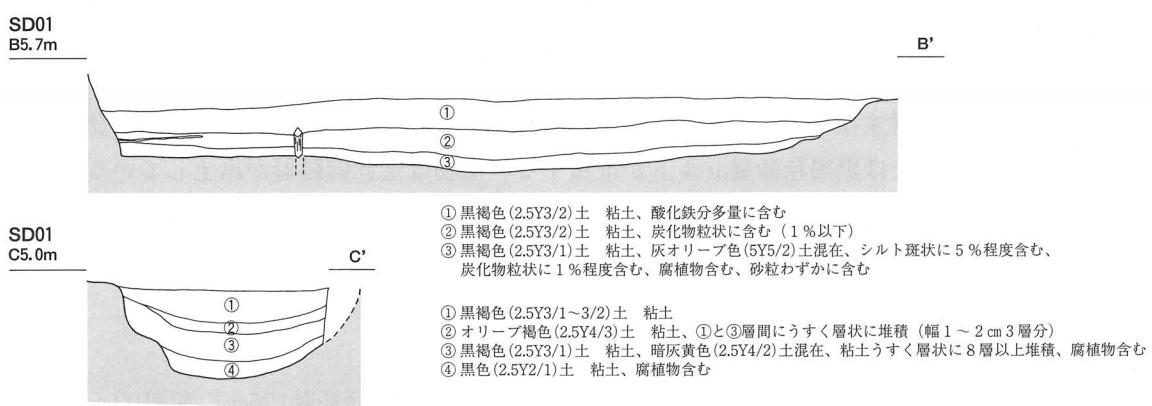
第6図 遺構実測図 [18地区] (1/80)



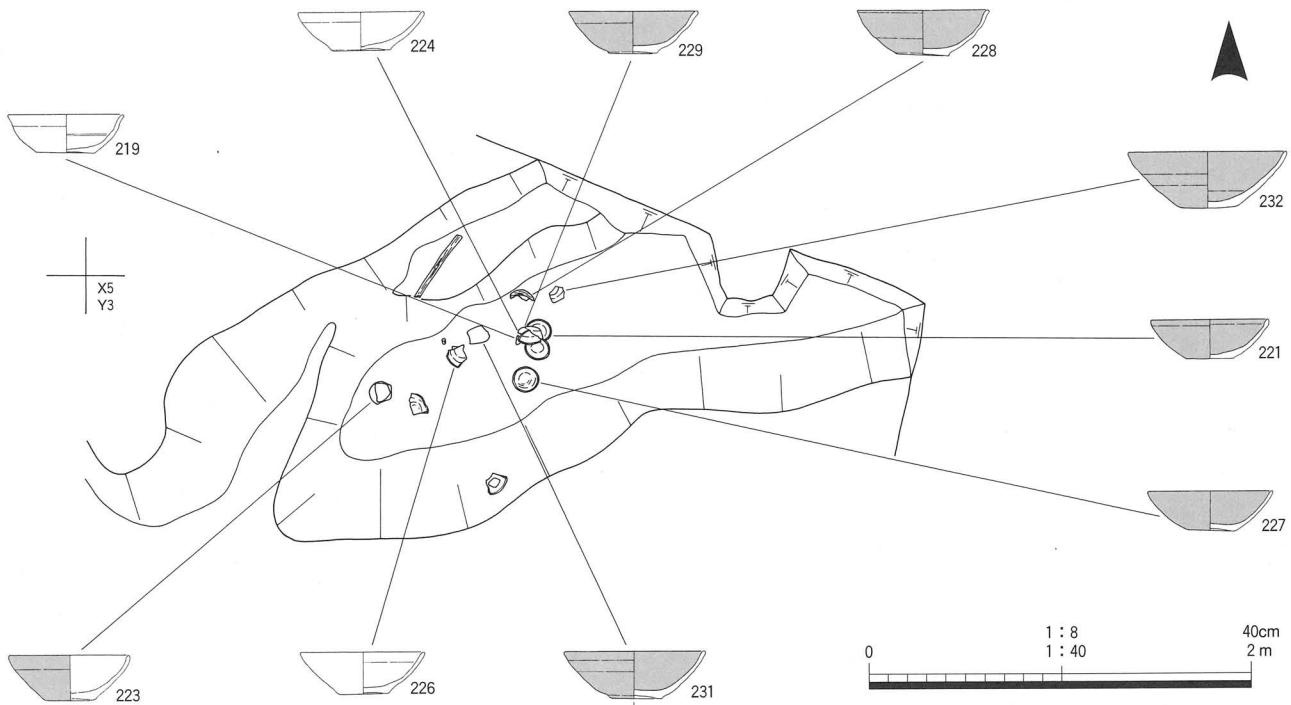
第7図 遺構実測図 [18地区] SD01 (1/40, 遺物実測図1/8)



- ① 黒褐色(2.5Y3/2)土 粘土、酸化鉄分多量に含む  
 ② 黒褐色(2.5Y3/2)土 粘土、炭化物粒状に含む(1%以下)  
 ③ 黒褐色(2.5Y3/1)土 粘土、灰オリーブ色(5Y5/2)土混在、シルト斑状に5%程度含む、炭化物粒状に1%程度含む、腐植物含む、砂粒わずかに含む



第8図 遺構実測図 [19地区] (1/80)



第9図 遺構実測図 [19地区] SD01 (1/40, 遺物実測図1/8)

## 第7項 本発掘調査20地区

### 1号溝 (SD01、第10・25~29図、図版7・18)

20地区の中央部に位置し、北東-南西方向にやや蛇行しながら伸びる溝である。幅450cm~600cm、全長約8mを検出。北端は2地区、南端は11地区へと繋がる祭祀溝の続きと考える。断面は弧状を呈し、覆土は黒褐色粘質シルトが厚く堆積し、深さは最深で1mを測る。遺物は古墳土師器・須恵器・土師器・木製品が出土。第25図274~第27図353は糸切り未調整の無高台壇A、354は無高台の皿A、355是有高台の皿Bである。第28図359は口縁端部に炭化物が付着し、灯火具として使用された須恵器壇A。368・370・372の壇B、374~376の壇蓋には墨痕があり硯として使用されている。第29図380は頬がこけた撫で肩タイプの人形である。墨書による表現が無く、8世紀後半のもの。樹種はスギ。

## 第8項 本発掘調査21地区

### 包含層

21地区の遺構からは遺物の出土が無く、包含層から土師器片1点が出土しているのみである。

## 第9項 本発掘調査22地区

### 2号溝 (SD02、第11・29図、図版8)

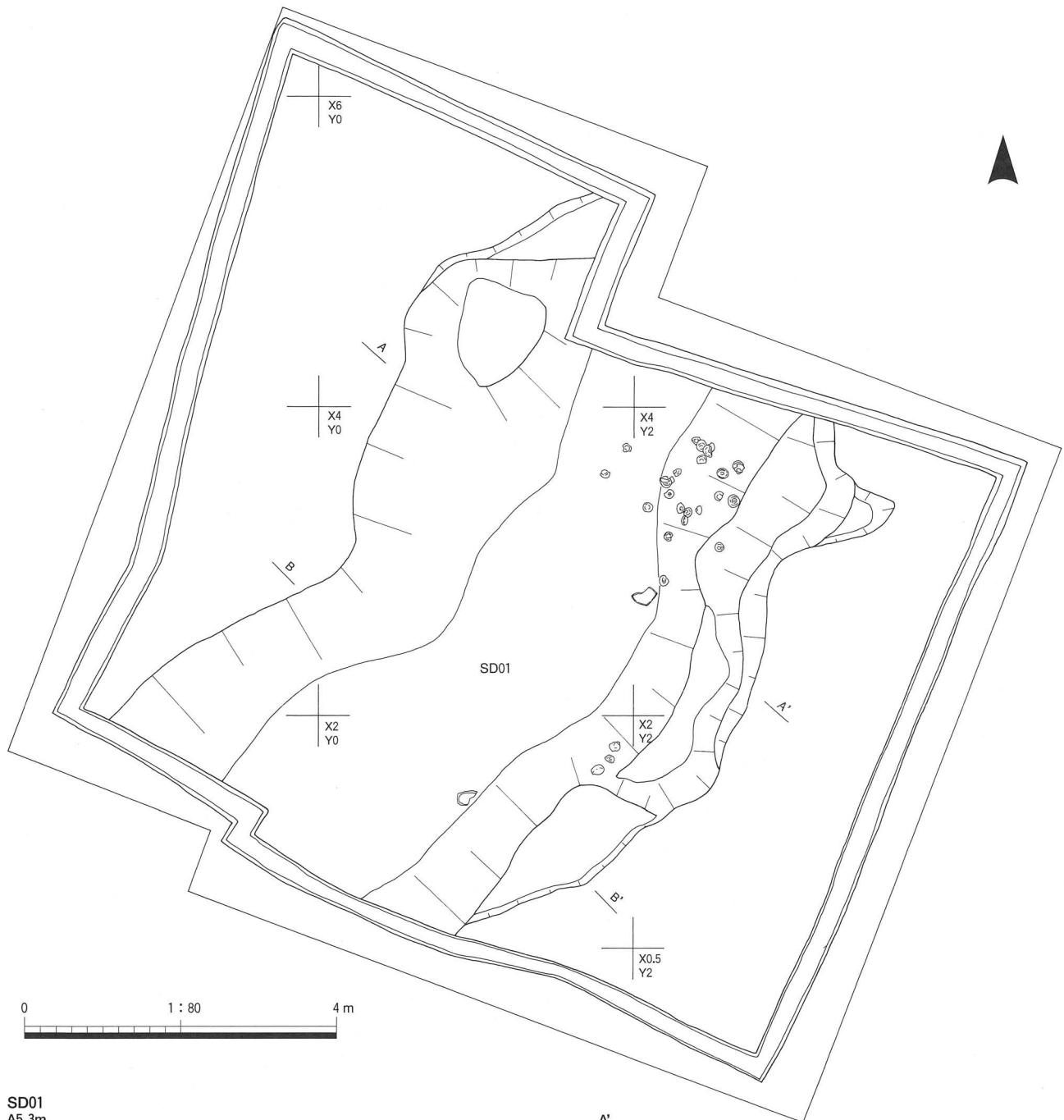
22地区の東側に位置する南北溝である。全長10.5mを検出し、3号溝とほぼ平行に伸び両端とも発掘区外へ伸びる。覆土は黒褐色砂質シルトが堆積する。遺物は近世陶磁器が出土している。

### 3号溝 (SD03、第11・29図、図版8)

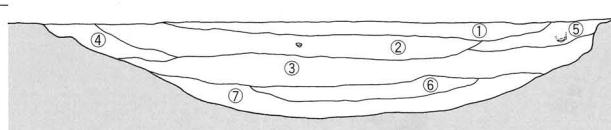
22地区の東側に2号溝とほぼ平行に伸びる全長6.5mの溝である。2号溝と同時期の流れと考えられる。覆土は黒褐色砂質シルトが堆積する。遺物は近世陶磁器が出土している。

### 1号土坑 (SK01、第11・29図、図版8)

22地区の中央やや北東側に位置する不整形な土坑である。規模は長軸126cm、短軸92cm、深さ20cmで、断面は弧状を呈する。覆土は黒褐色粘質シルトが堆積し、炭化物が混在する。遺物は土師器が出土している。第29図388は古墳時代前期末の「く」の字甕の口縁部である。

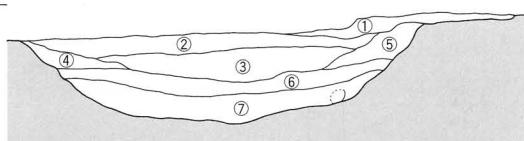


SD01  
A5.3m



- ① 黒色(2.5Y2/1)土 粘質土、酸化鉄分含む
- ② 黒褐色(2.5Y3/1)土 粘土、酸化鉄分含む、にぶい黄色(2.5Y6/3)土粘土粒状に10%含む
- ③ 黒褐色(2.5Y3/2)土 粘土、黄褐色(2.5Y5/3)土粘土薄層(1~2cm)2条層中に堆積
- ④ 黒褐色(2.5Y3/1)土 粘土
- ⑤ ④とほぼ同じ
- ⑥ 黄灰色(2.5Y4/1)土 粘土、黄褐色(2.5Y5/3)土粘土薄層(1cm)3条層中に堆積
- ⑦ 黑褐色(2.5Y3/1)土 粘土、黄褐色(2.5Y5/3)土粘土粒状に5%含む

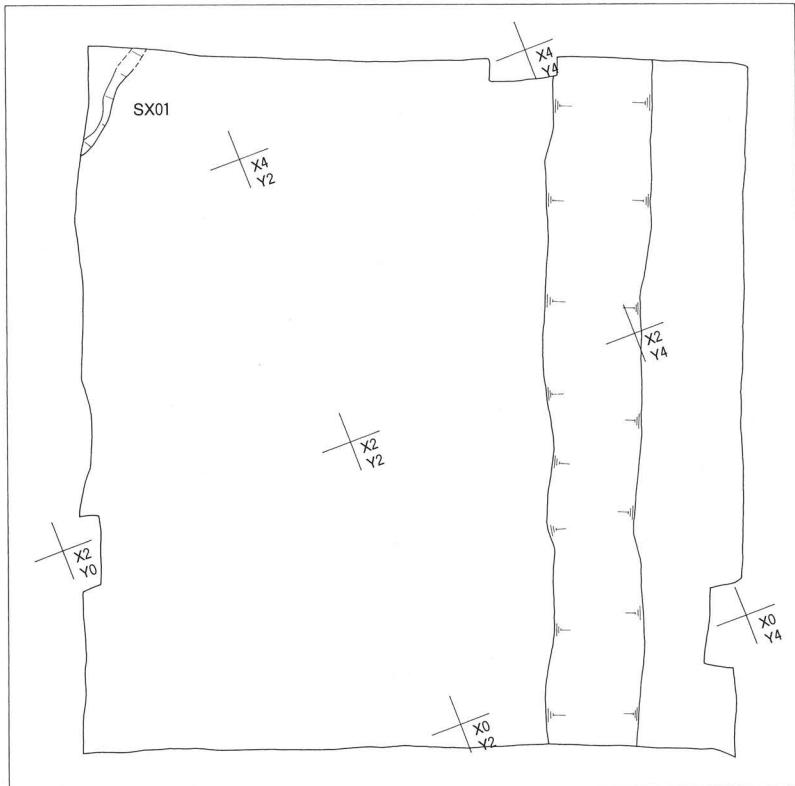
SD01  
B5.3m



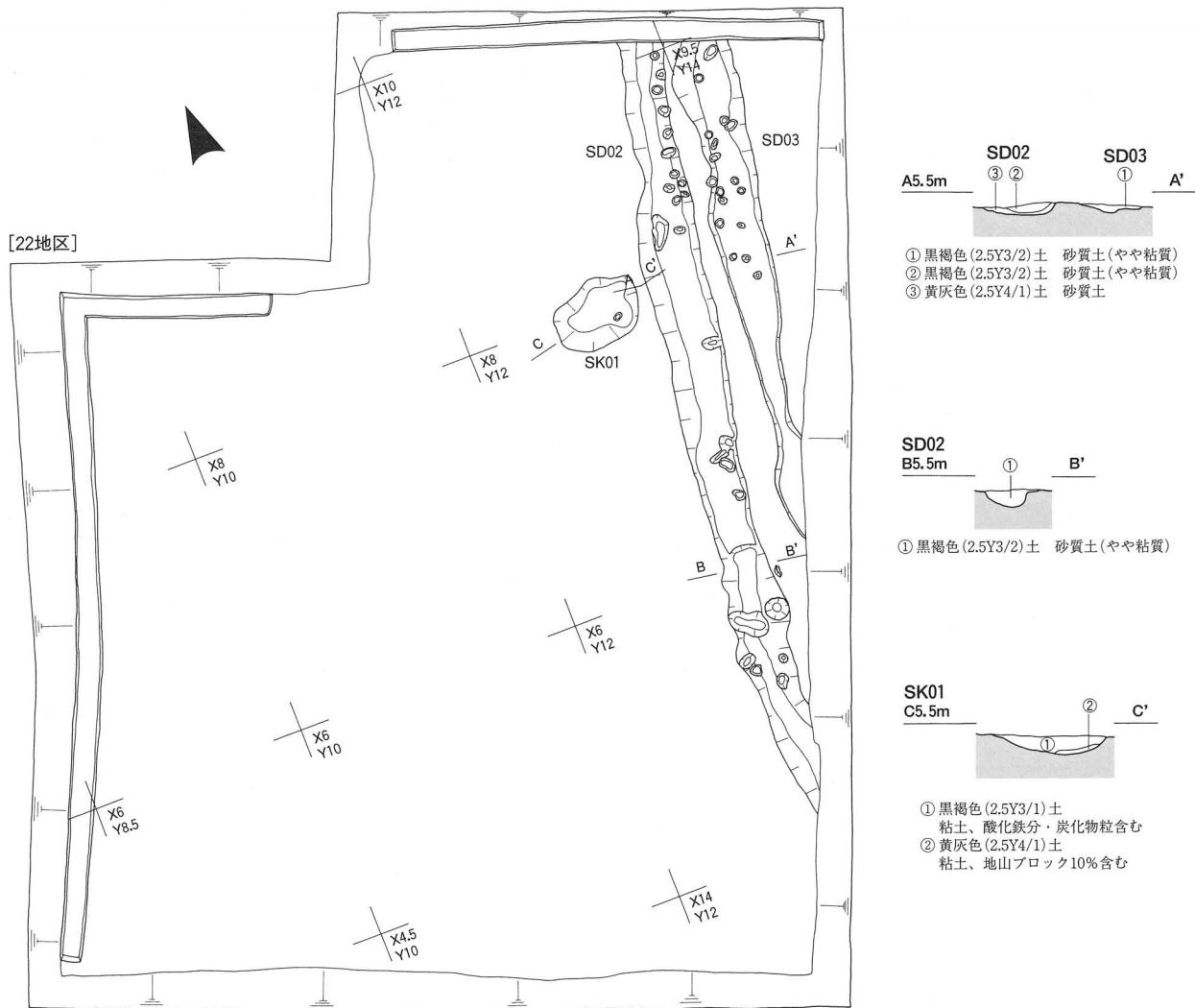
- ① 黒色(2.5Y2/1)土 粘質土、酸化鉄分含む
- ② 黒褐色(2.5Y3/1)土 粘土、酸化鉄分含む、にぶい黄色(2.5Y6/3)土粘土粒状に10%含む
- ③ 黒褐色(2.5Y3/2)土 粘土、黄褐色(2.5Y5/3)土粘土薄層(1~2cm)2条層中に堆積
- ④ 黑褐色(2.5Y3/1)土 粘土
- ⑤ ④とほぼ同じ
- ⑥ 黄灰色(2.5Y4/1)土 粘土、黄褐色(2.5Y5/3)土粘土薄層(1cm)3条層中に堆積
- ⑦ 黑褐色(2.5Y3/1)土 粘土、黄褐色(2.5Y5/3)土粘土粒状に5%含む

第10図 遺構実測図 [20地区] (1/80)

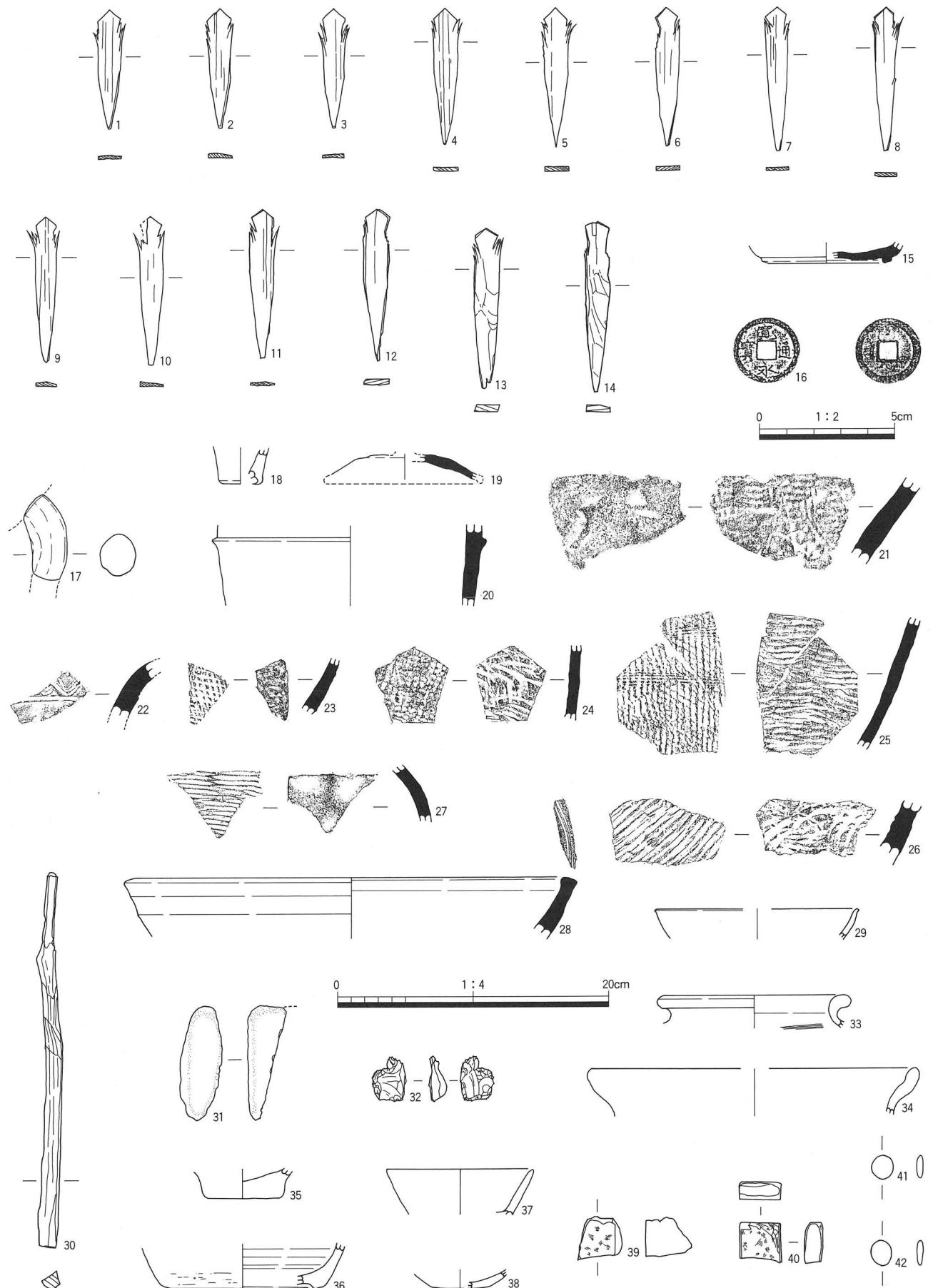
[21地区]



[22地区]

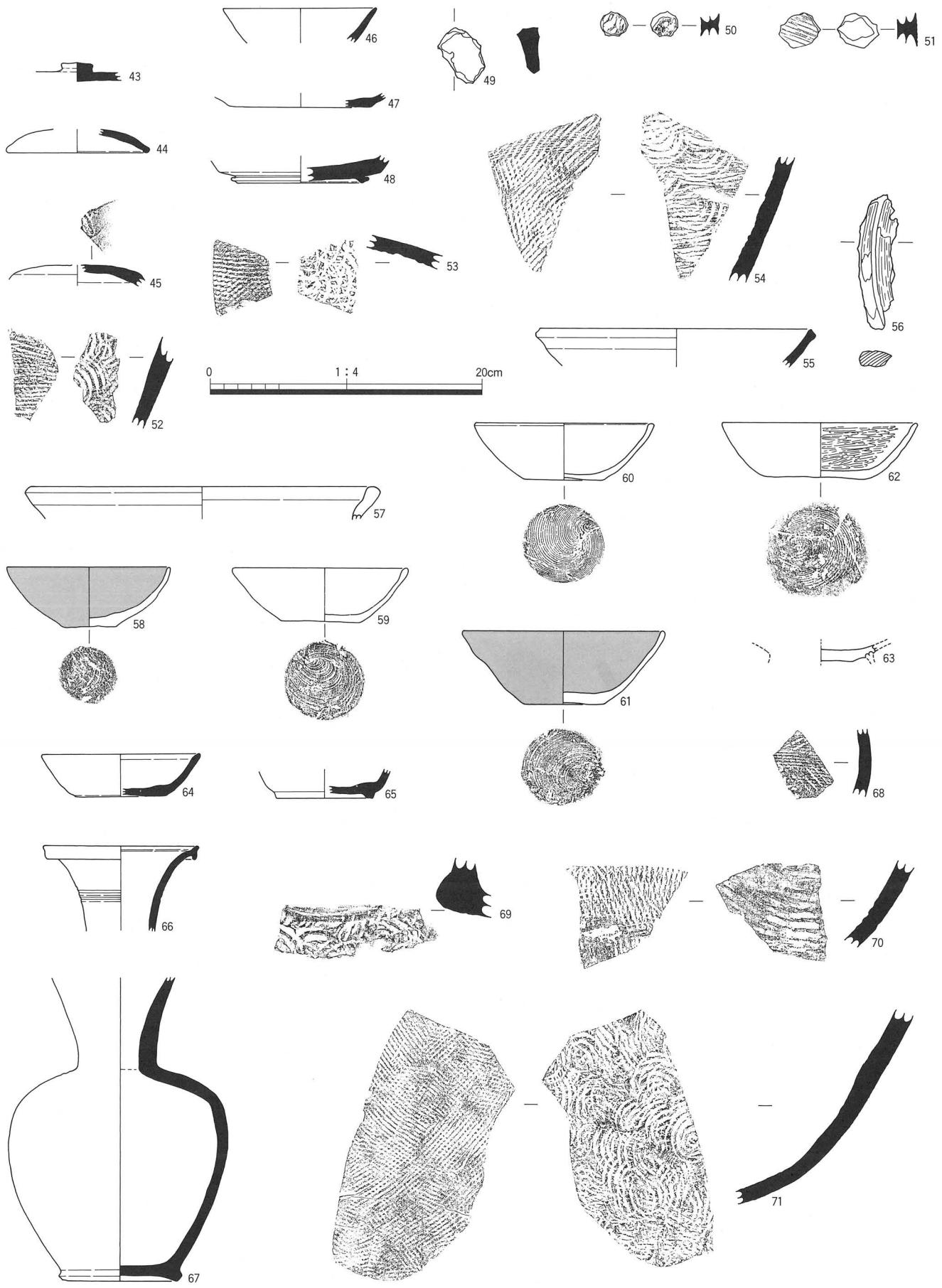


第11図 遺構実測図 [21・22地区] (1/100, 断面図1/80)



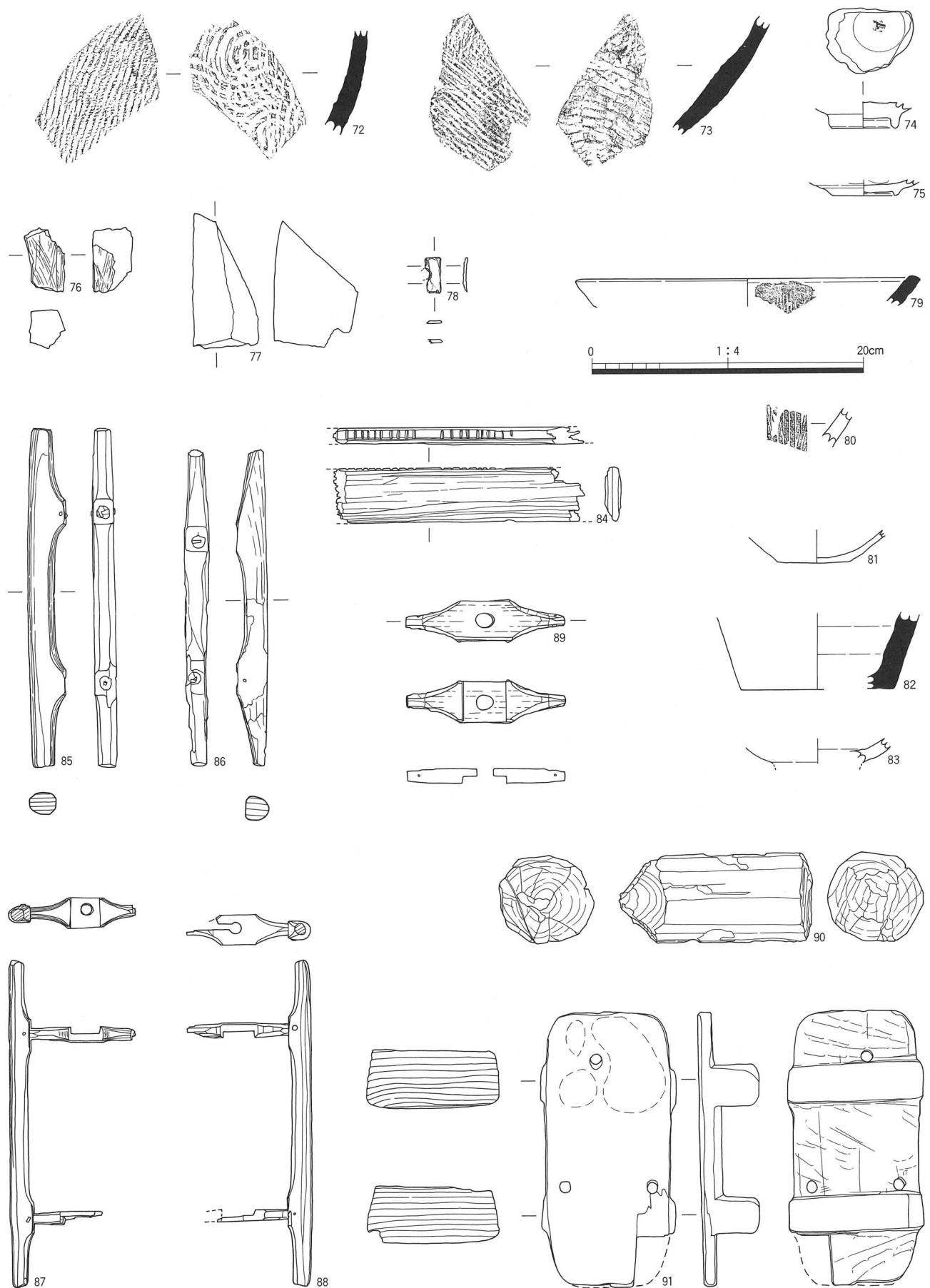
第12図 遺物実測図 [14~17地区] (1/4, 16:1/2)

14地区:SK06(1~14) 包含層(15・16) 15地区:包含層(17~29) 16地区:SD03(30) 17地区:包含層(31~42)



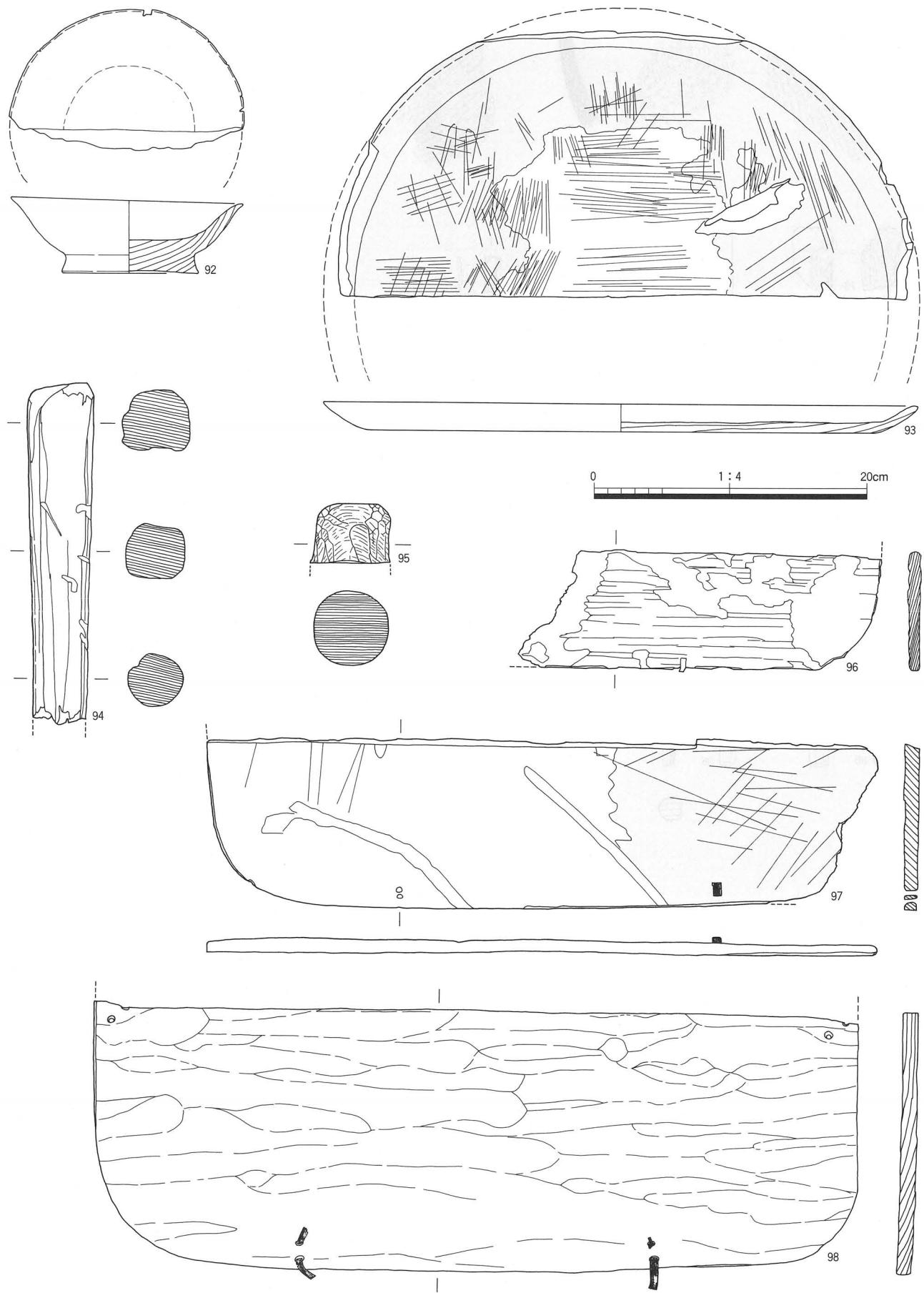
第13図 遺物実測図 [17・18地区] (1/4)

17地区：包含層(43~56) 18地区：SD01(57~71)



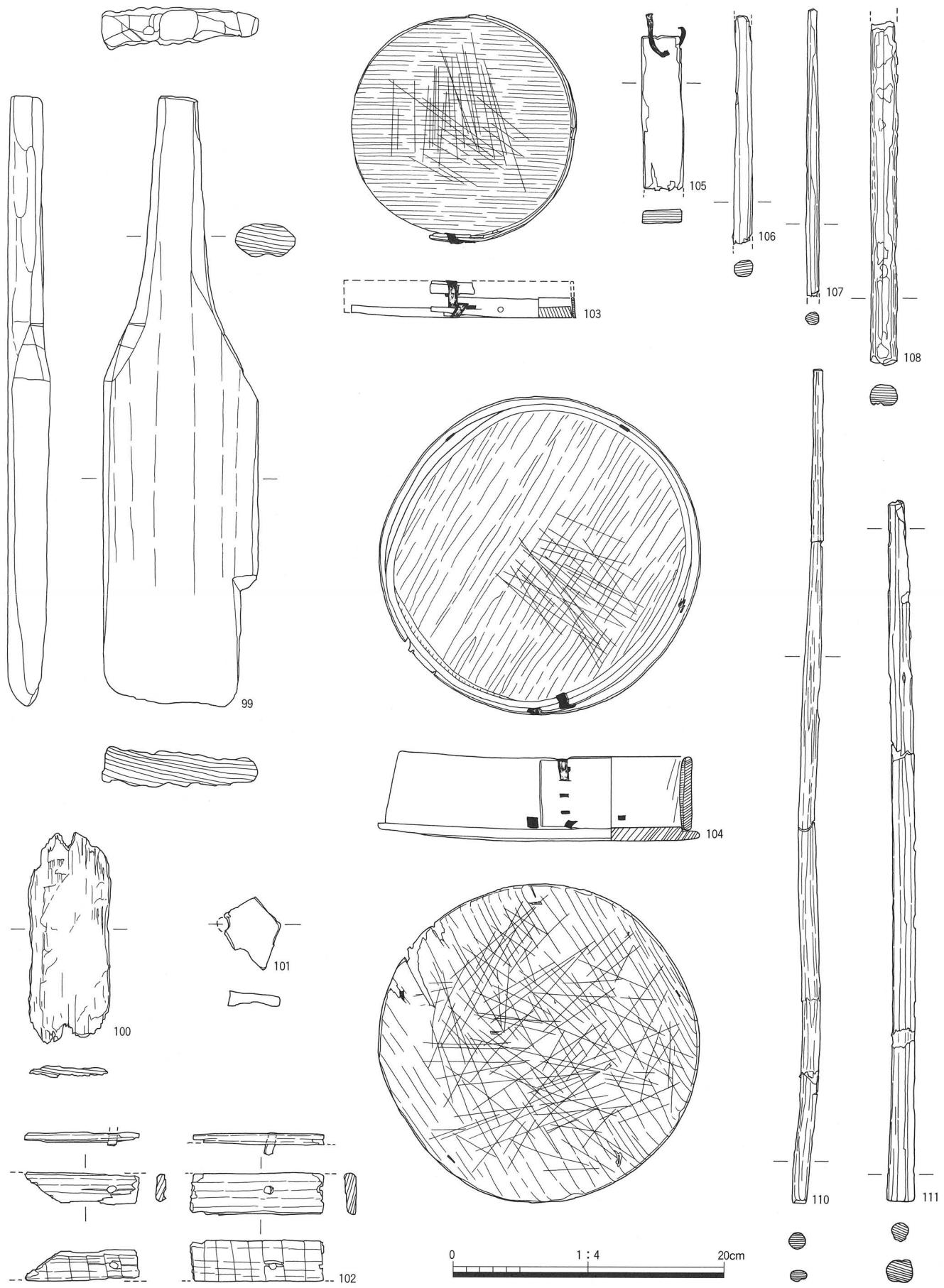
第14図 遺物実測図 [18地区] (1/4)

18地区: SD01(72~78・84~91) SD06(79) SK11(80) 包含層(81~83)



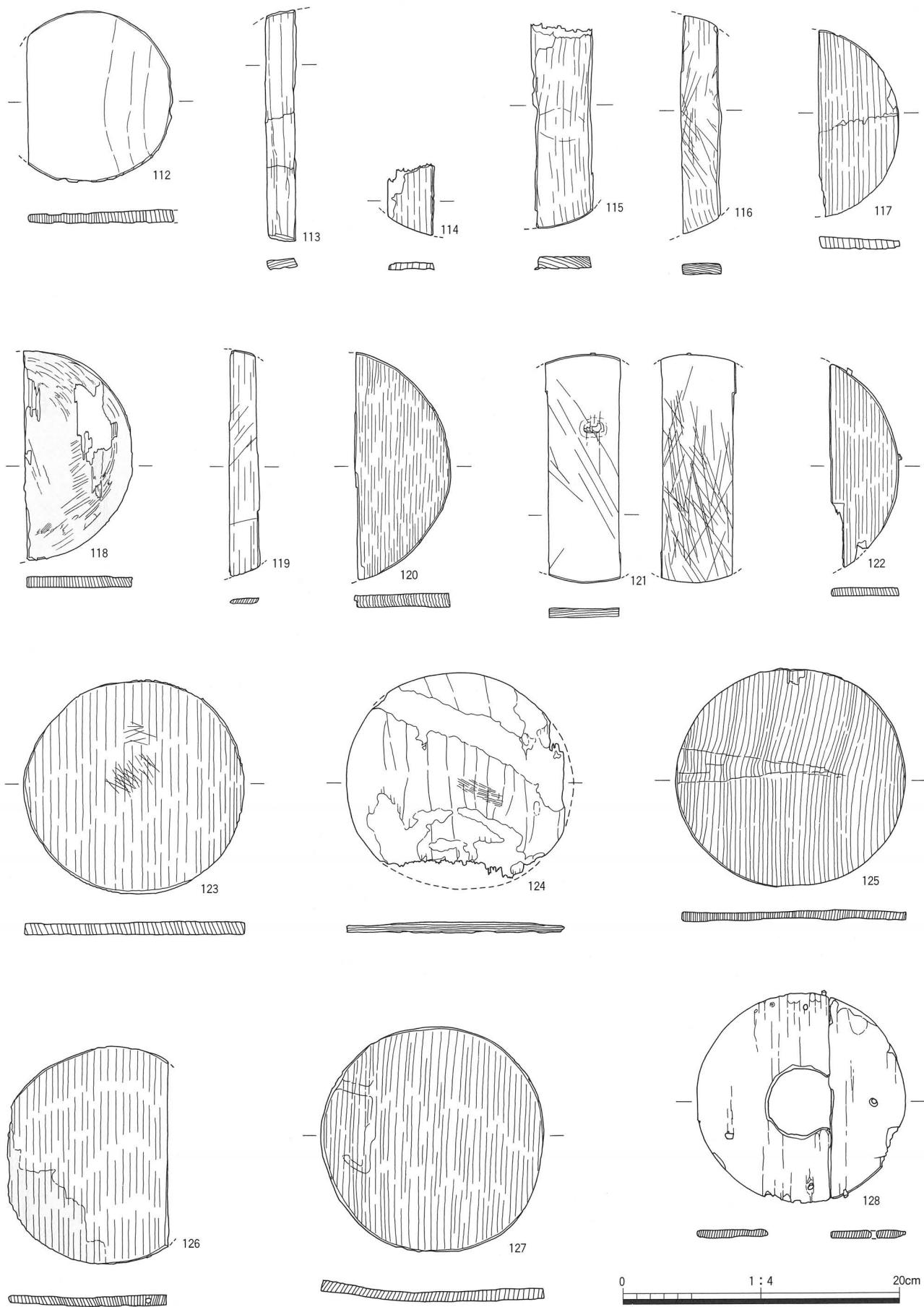
第15図 遺物実測図 [18地区] (1/4)

18地区：SD01(92~98)



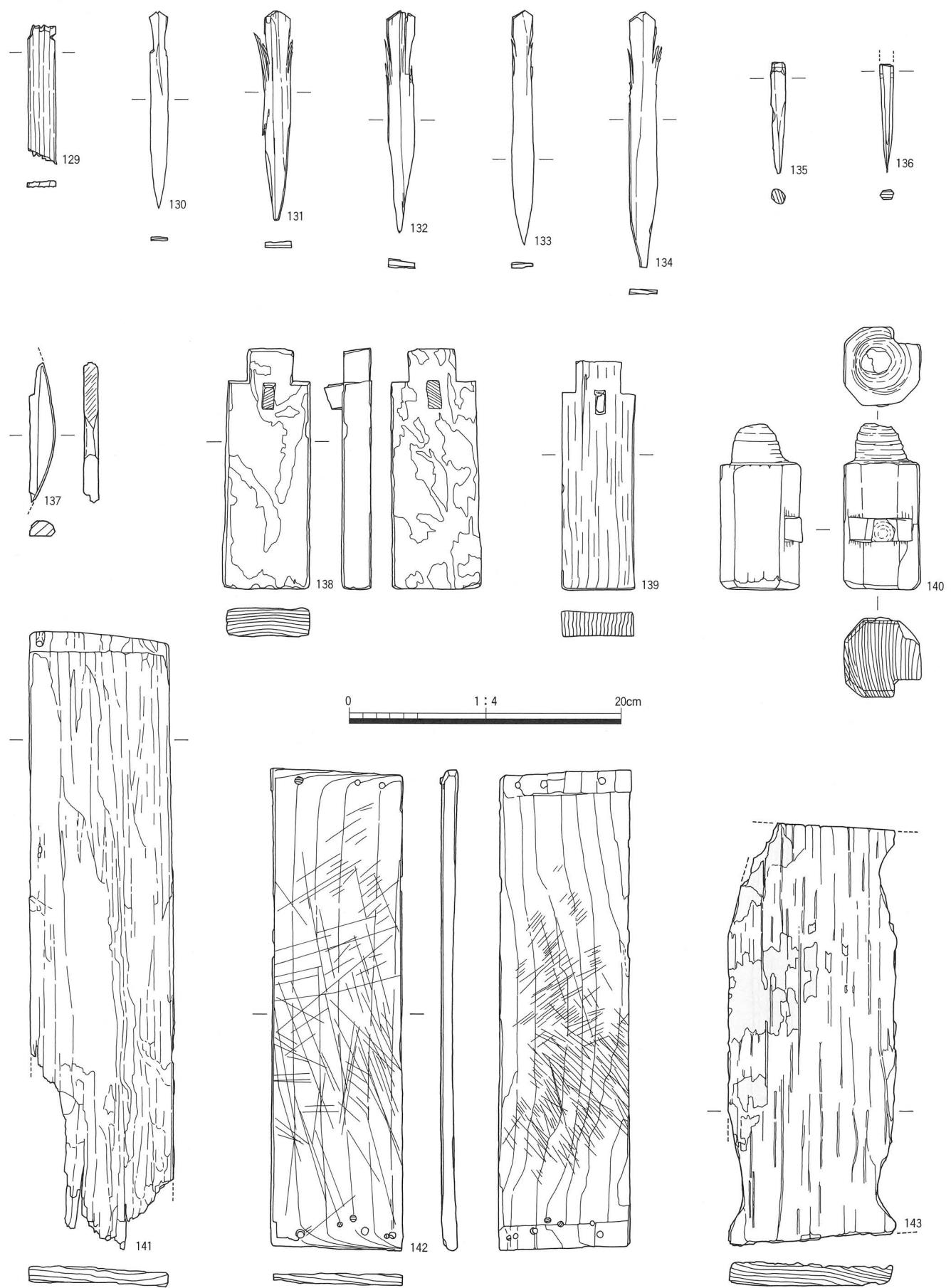
第16図 遺物実測図 [18地区] (1/4)

18地区 : SD01(99~111)



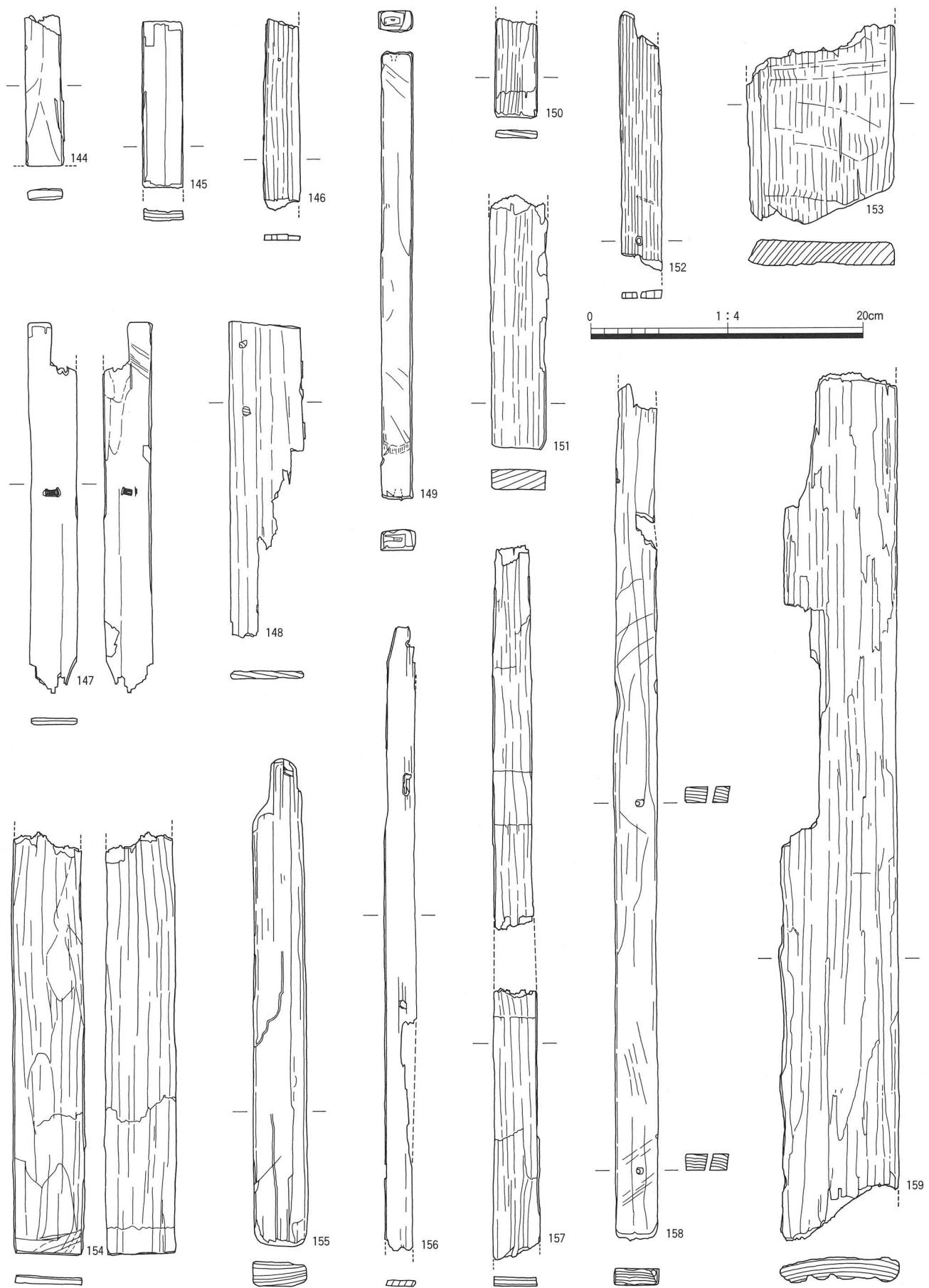
第17図 遺物実測図 [18地区] (1/4)

18地区 : SD01(112~128)



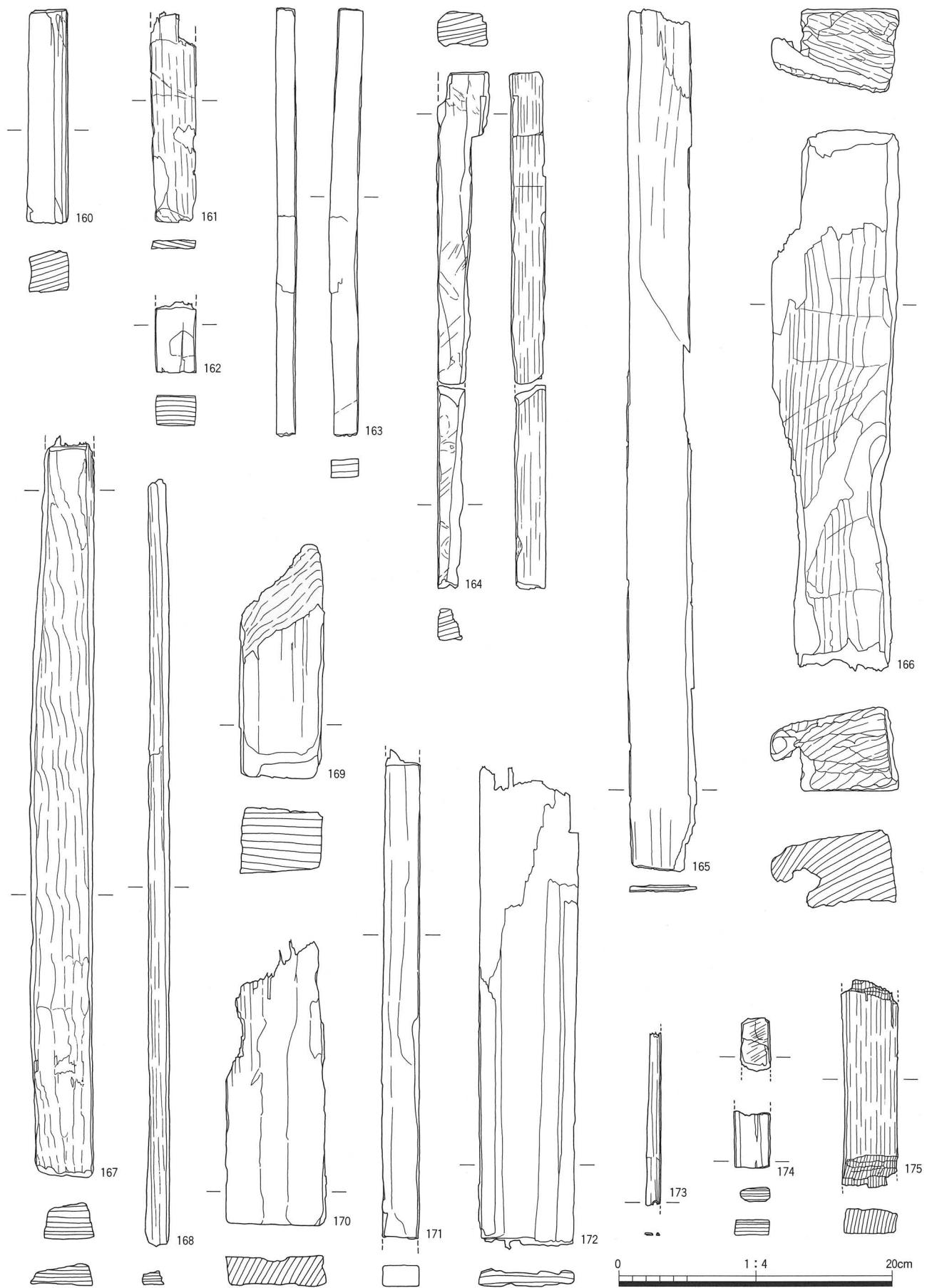
第18図 遺物実測図 [18地区] (1/4)

18地区 : SD01(129~143)



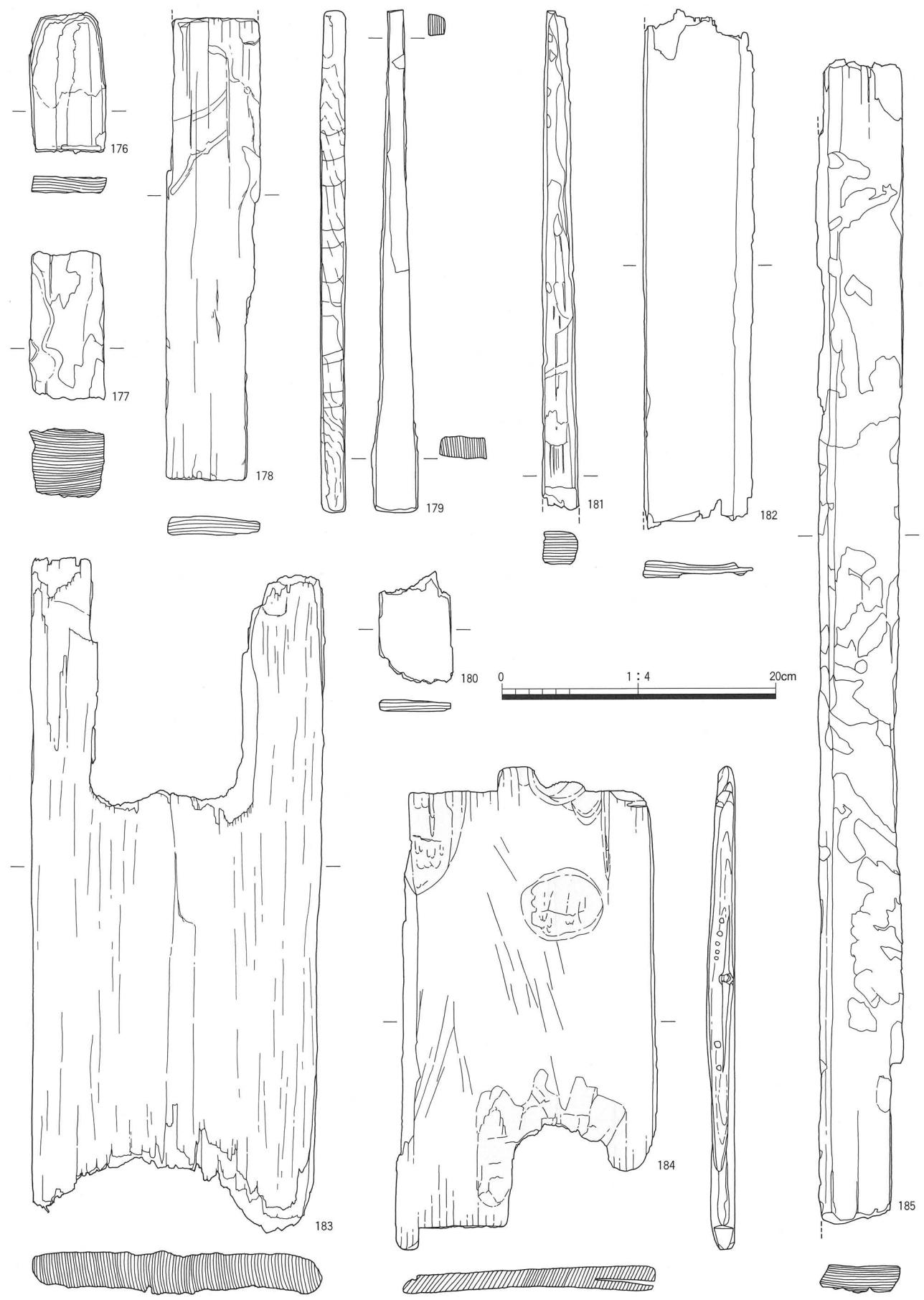
第19図 遺物実測図 [18地区] (1/4)

18地区：SD01(144～159)



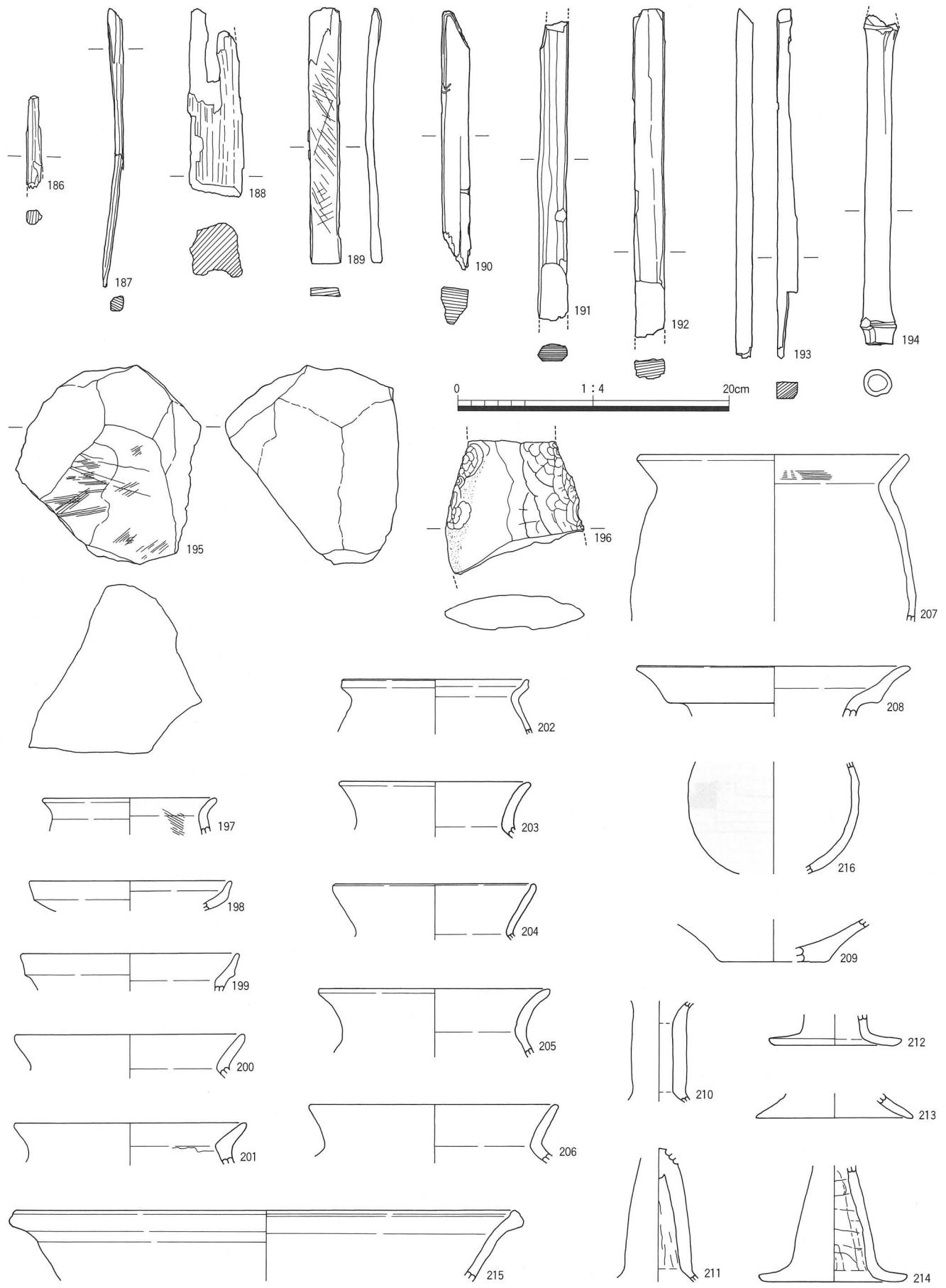
第20図 遺物実測図 [18地区] (1/4)

18地区: SD01(160~175)



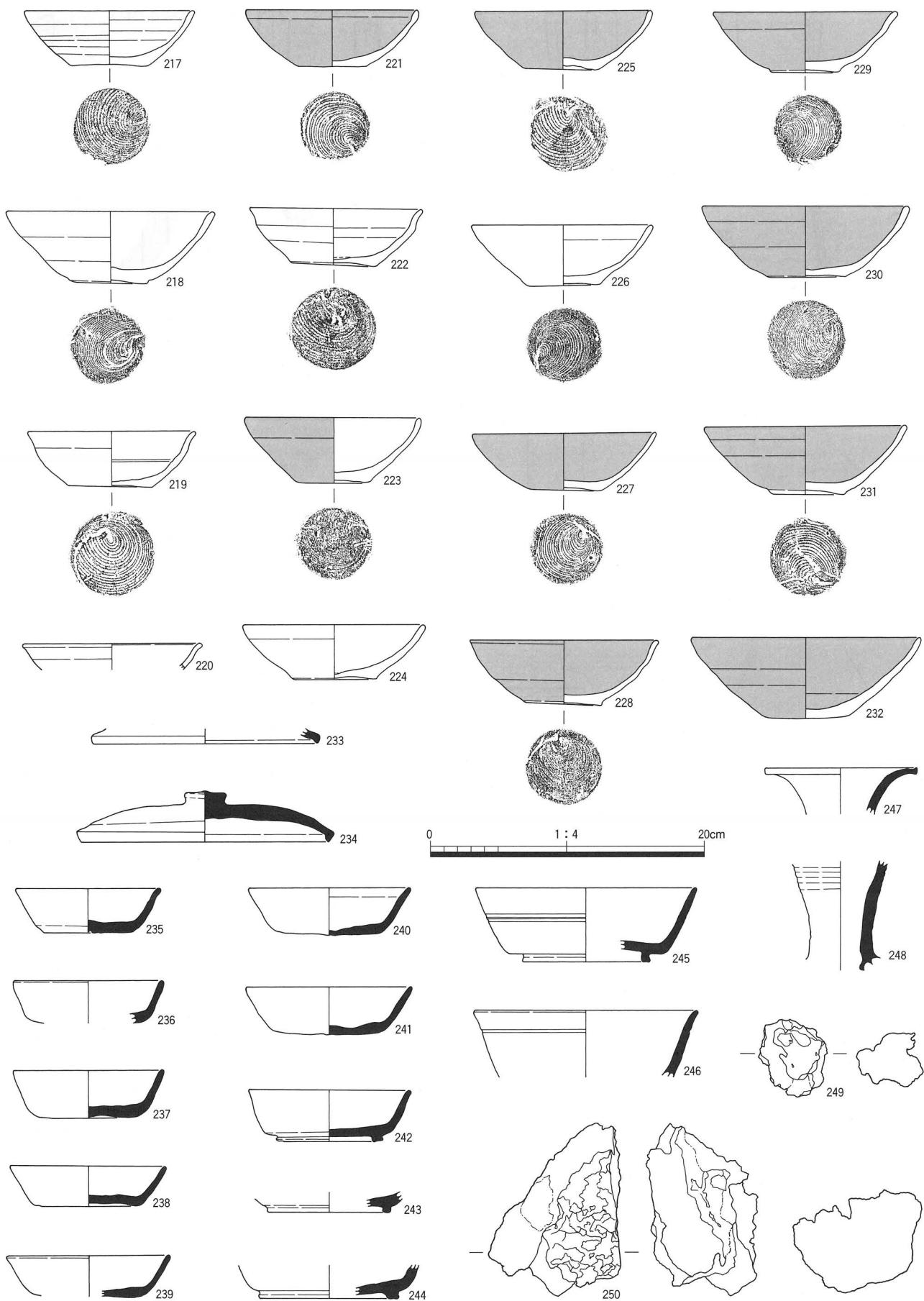
第21図 遺物実測図 [18地区] (1/4)

18地区：SD01(176～185)



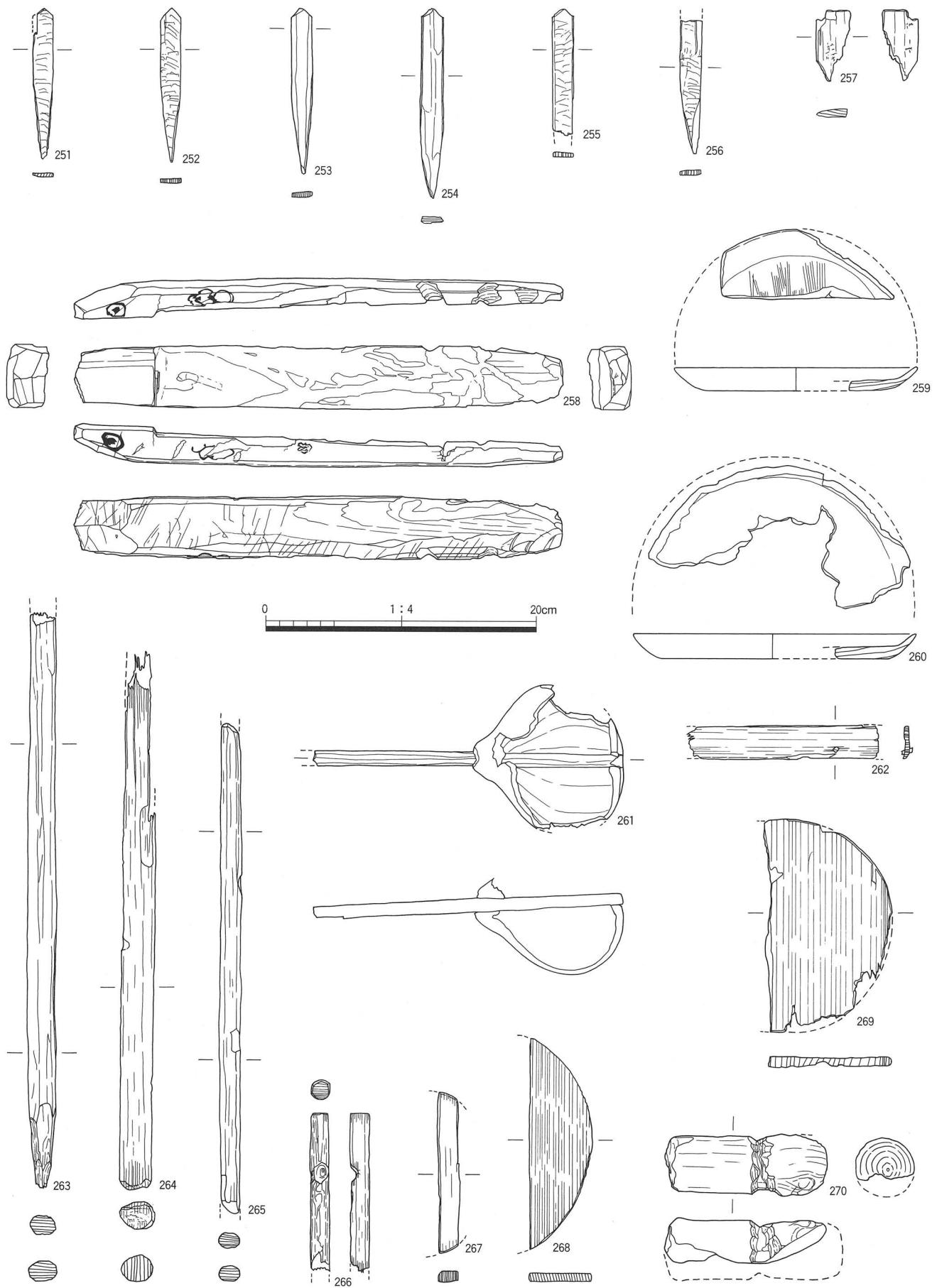
第22図 遺物実測図 [18・19地区] (1/4)

18地区：SD01(186～194) 19地区：SD01(195～216)



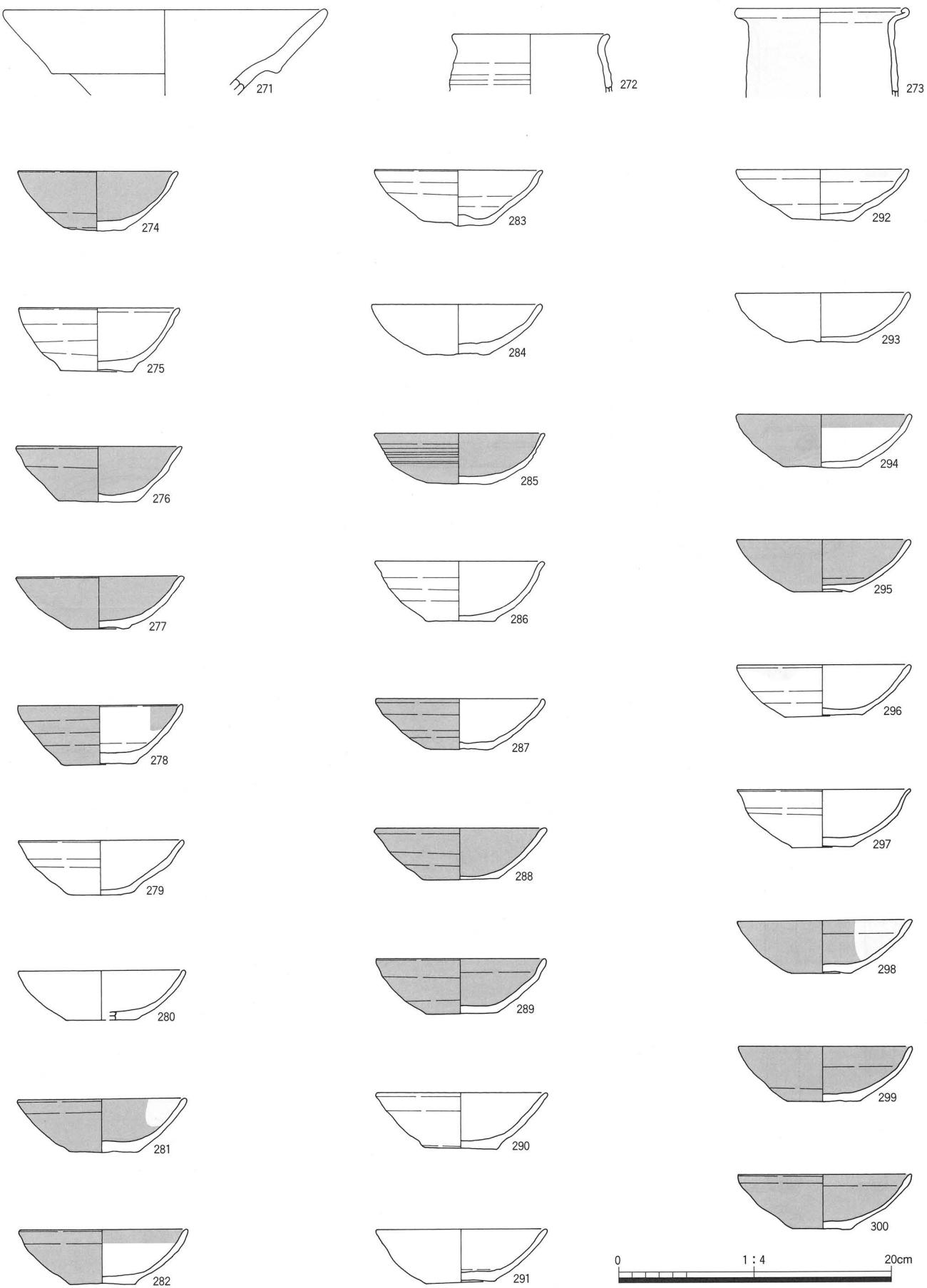
第23図 遺物実測図 [19地区] (1/4)

19地区: SD01(217~250)



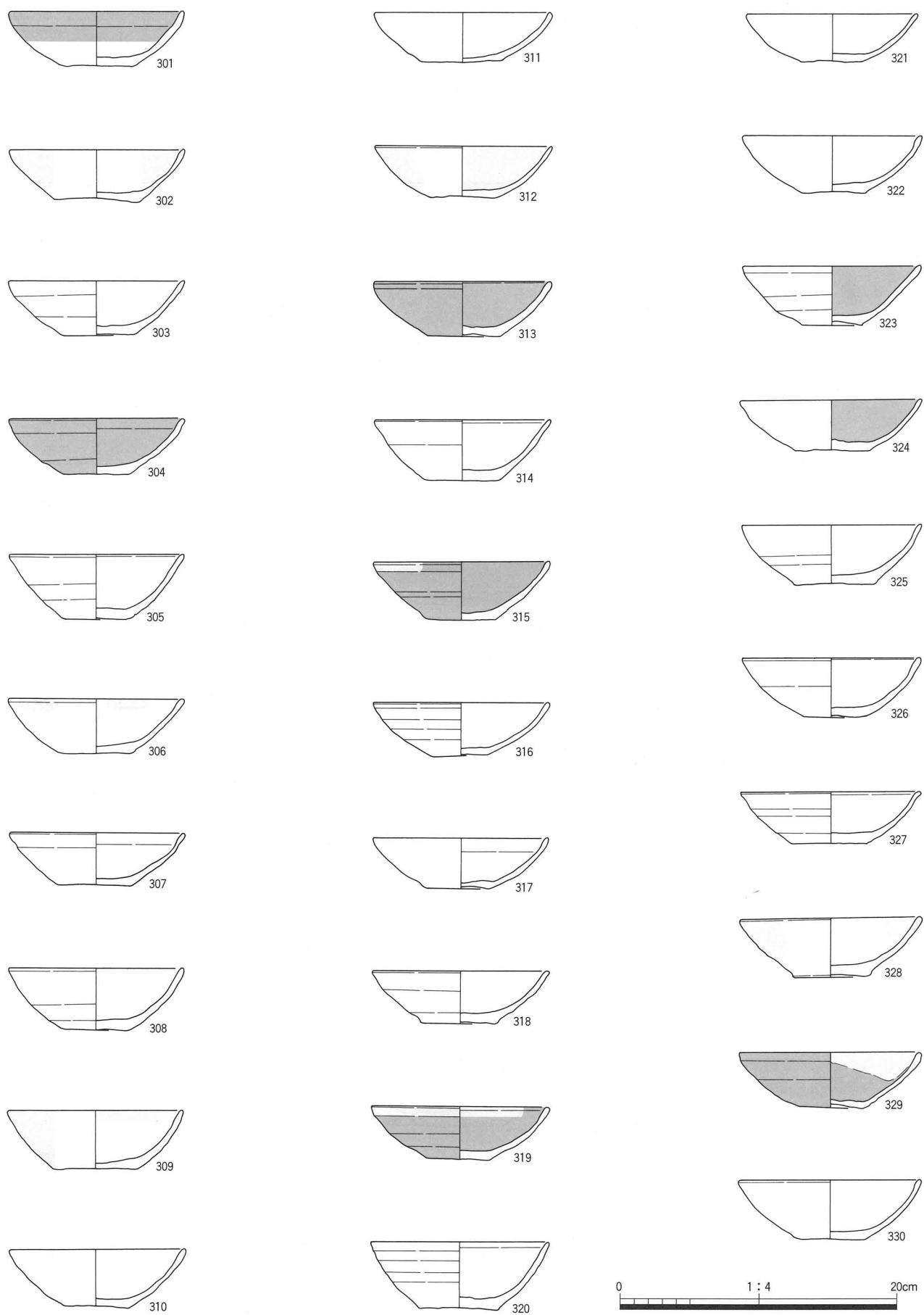
第24図 遺物実測図 [19地区] (1/4)

19地区 : SD01(251~270)



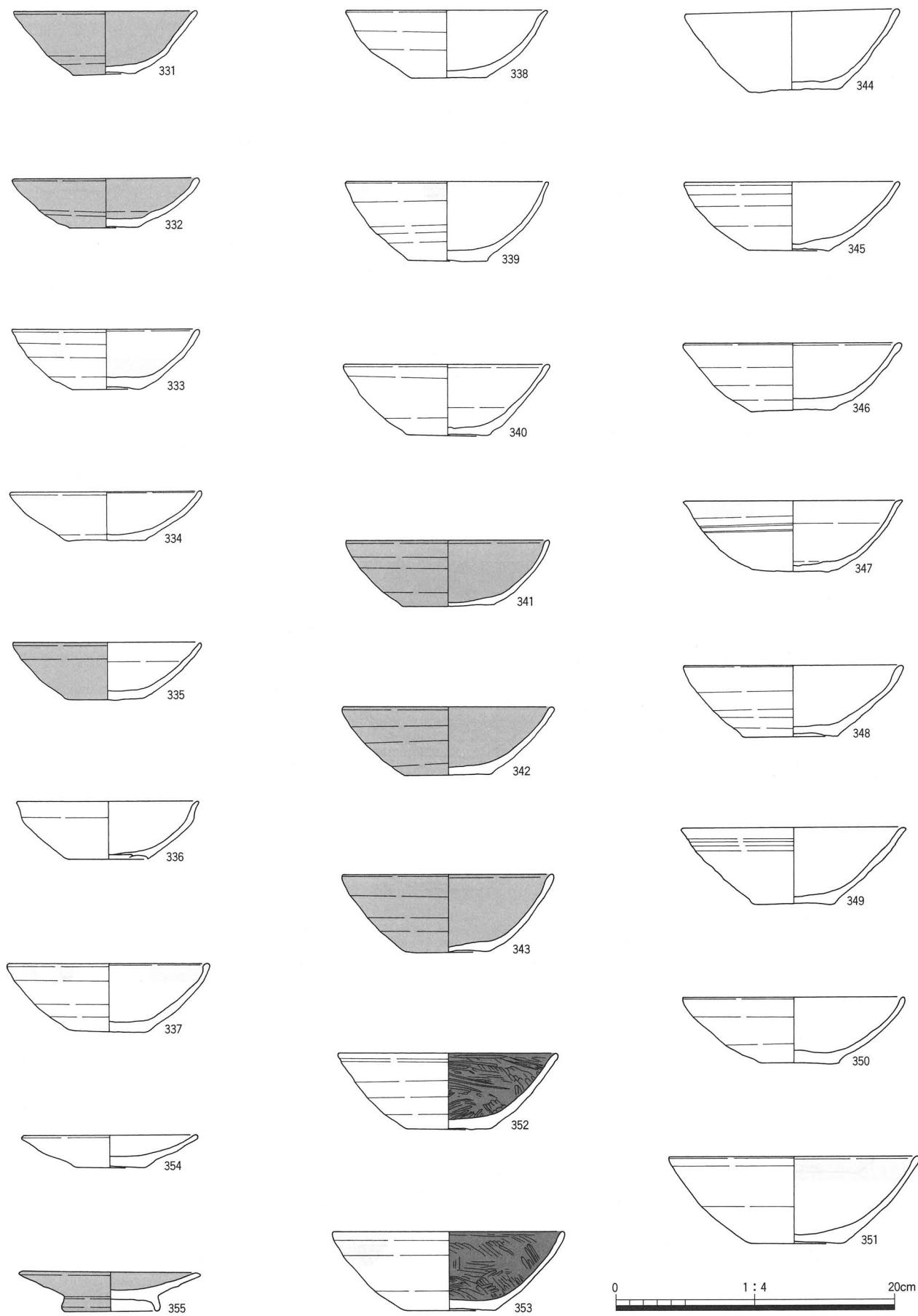
第25図 遺物実測図 [20地区] (1/4)

20地区 : SD01(271~300)



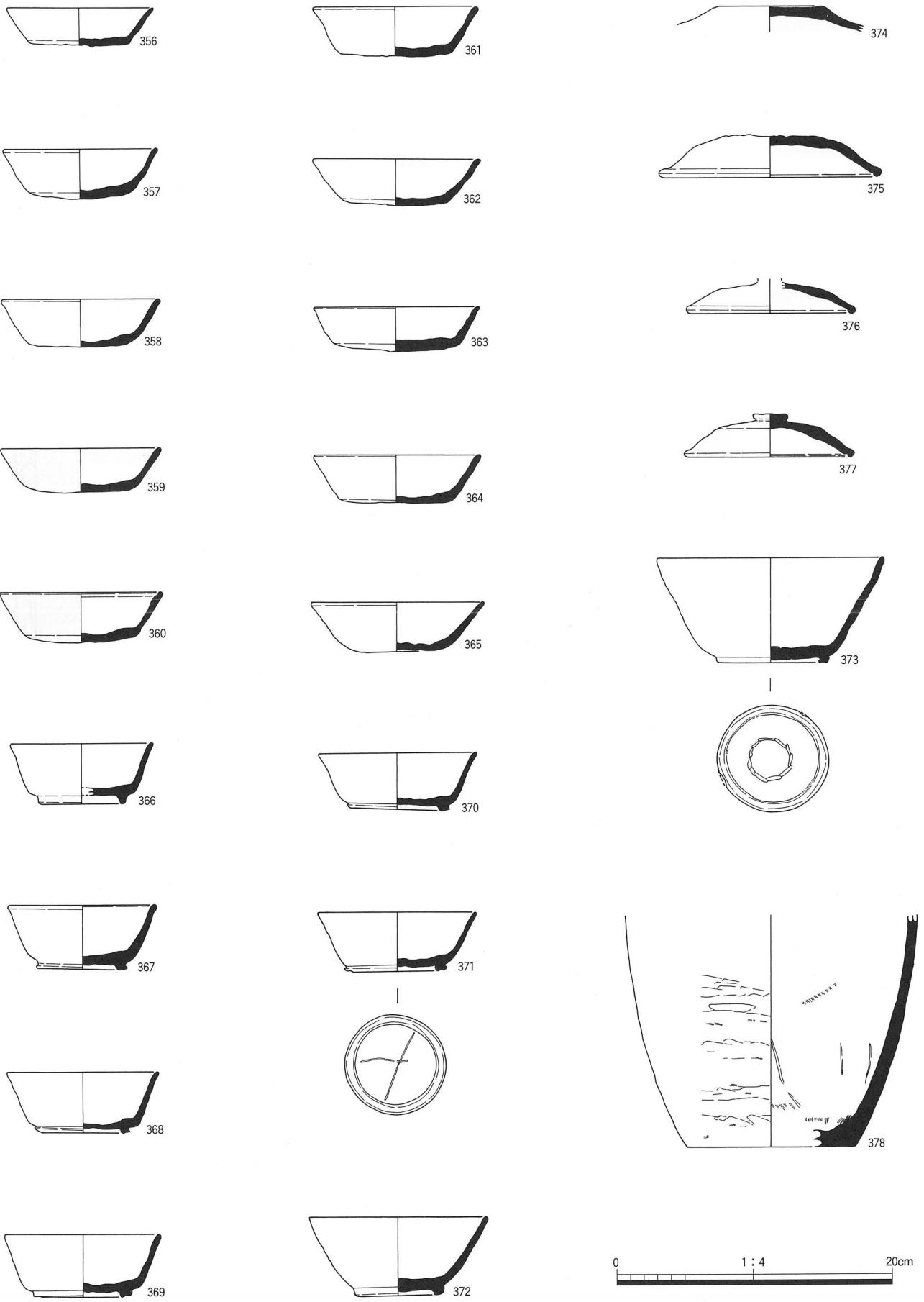
第26図 遺物実測図 [20地区] (1/4)

20地区 : SD01(301~330)



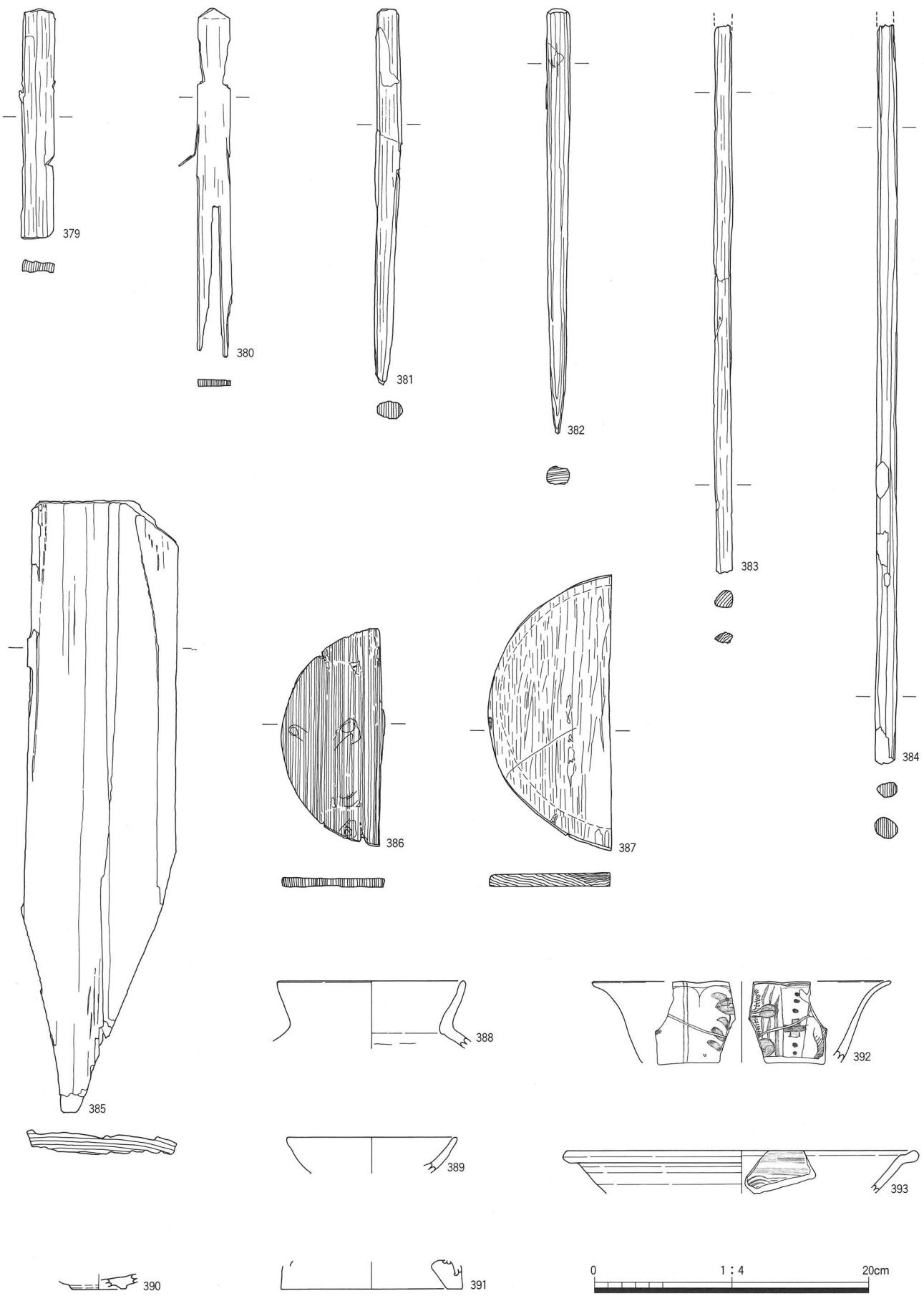
第27図 遺物実測図 [20地区] (1/4)

20地区：SD01(331~355)



第28図 遺物実測図 [20地区] (1/4)

20地区: SD01(356~378)



第29図 遺物実測図 [20・22地区] (1/4)

20地区 : SD01(379~387) 22地区 : SK01(388・389) SD02(390) SD03(391~393)

## 第4節 自然科学分析

### 1. 試料

試料は8・18～20地区の各1号溝（祭祀溝）より出土した木製品14点である。なお、8地区より出土の2点については『赤田I遺跡発掘調査概要(1) 2005年』の図版番号に対応している。

### 2. 方法

試料より木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、プレパラートを作製した。このプレパラートを光学顕微鏡にて40～400倍で検鏡観察し、現生標本と対照しながら樹種の同定を行った。また、観察した顕微鏡像を撮影記録した。

### 3. 結果

樹種同定結果（針葉樹1種：スギ、広葉樹2種：スダジイ・ケヤキ）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

#### スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材である。水平樹脂道と垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は急で、晩材の幅は広い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に散在する。分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～2個確認できる。放射組織はすべて単列で細胞高が見られる。材は割裂性がよく、軽軟で強靭、加工性が良い。

#### ブナ科シイノキ属スダジイ (*Castanopsis sieboldii* Hatusima)

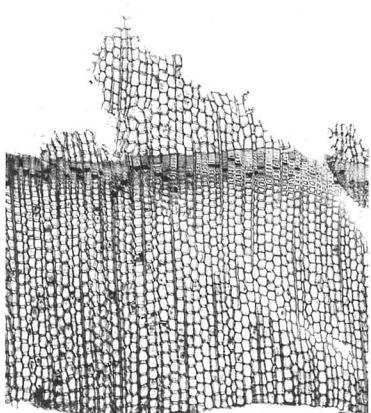
年輪の初めに、中型で丸い単独の道管が数個ずつ、放射方向に伸びる塊をなしてまばらに配列し、晩材では小型で薄壁の管孔が火炎状に配列する還孔材。道管の穿孔は単一、木部柔組織はいびつな接線状である。放射組織は単列同性で、道管との壁孔はしばしば柵状となる。材はやや重硬、加工・割裂性はふつうだが、耐朽性が低く狂いがやすい。クリに比べれば材質は劣るが、しばしば農具や石斧柄に用いられる。

#### ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Thunb)

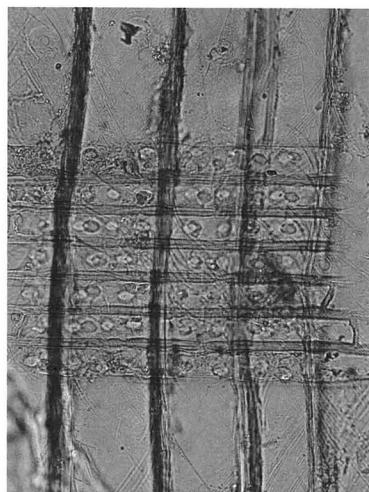
年輪の初めに大型の丸い道管が単独で1～2列に並び、晩材では薄壁で角張った小道管が多数集合して、接線方向あるいは斜めの帯をなす還孔材。木部柔組織は早材部では周囲状、晩材部では小道管に随伴する。道管の穿孔は單一で、小道管の内壁には螺旋肥厚がみられる。放射組織は上下端のみ直立細胞からなる異性で、上下端や多列部の縁に結晶を含むことが多い。道管と放射組織との壁孔は交互状である。材質に優れ、大材が得られるため建築材とされ、木目が美しく加工が容易であることから臼や杵、刳物容器、漆器木地などにされるなど、多様に用いられる。

第2表 木製品樹種同定表

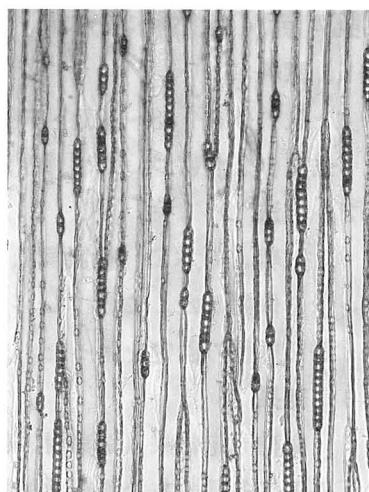
図版番号	地区	器種	樹種	図版番号	地区	器種	樹種
第38図700	8	編み錘	ブナ科シイノキ属スダジイ	第15図98	18	折敷	スギ科スギ属スギ
第38図701	8	木札	スギ科スギ属スギ	第16図100	18	浮子？	スギ科スギ属スギ
第14図84	18	編み台	スギ科スギ属スギ	第18図143	18	組物部材	スギ科スギ属スギ
第14図88	18	糸巻(糸掛け)	スギ科スギ属スギ	第24図253	19	斎串	スギ科スギ属スギ
第14図88	18	糸巻(腕木)	スギ科スギ属スギ	第24図254	19	斎串	スギ科スギ属スギ
第15図92	18	椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	第24図258	19	舟形	スギ科スギ属スギ
第15図93	18	大皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	第29図380	20	人形	スギ科スギ属スギ



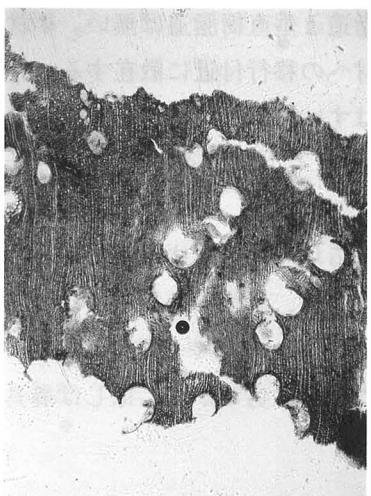
スギ科スギ属スギ  
編み台（第14図84）



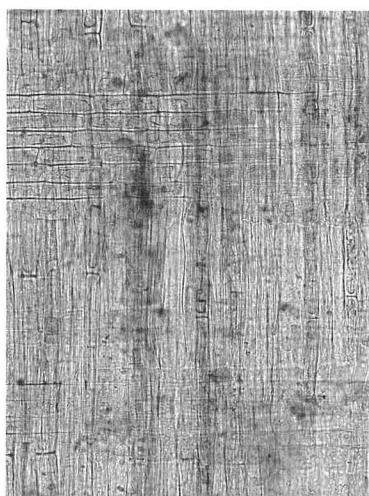
木口



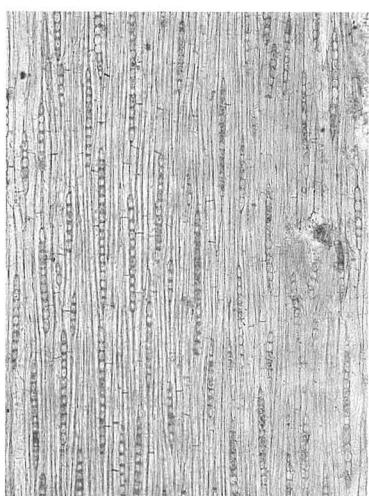
板目



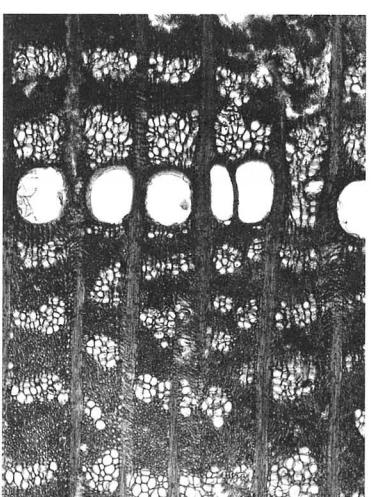
ブナ科シノキ属スマジイ  
編み鉢（第38図700）



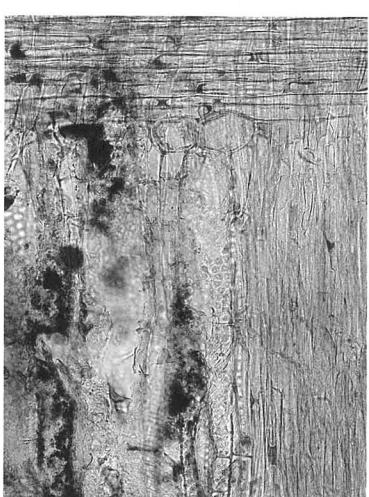
木口



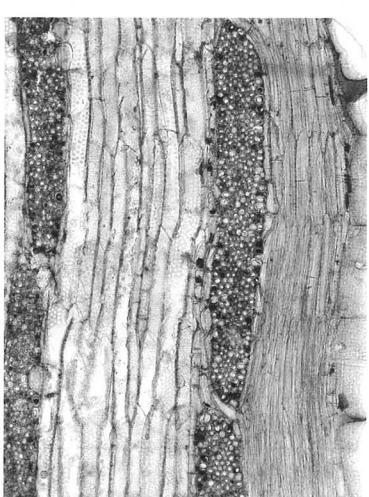
板目



ニレ科ケヤキ属ケヤキ  
大皿（第15図93）



木口



板目

スケール：—————

木口（スケール=1mm）・柾目（スケール=上：0.1mm、中一下：0.2mm）・板目（スケール=0.4mm）

## 第5節 総括

### 第1項 土器

#### 須恵器

須恵器は壺A・壺B・皿・蓋・甕・壺・瓶類等が出土している。壺Aは底部より直線的に立ち上がる浅身のものが殆どであり、報告書に掲載した総数は53点である。口縁部の意図的な打ち欠きや、口端部内外面の炭化物・タール等から灯火具に転用されたものもある。壺Bは壺Aより深身のものが多く総数61点、底部からの立ち上がりが直線的又はやや内湾気味のものがある。蓋は頂部に扁平な宝珠状又はボタン状の摘みの有無で形式がわかれ。壺B・蓋ともに墨痕があり転用硯として使用されたものも8点ある（壺B 3点・蓋5点）。瓶類は双耳瓶・横瓶・平瓶・長頸瓶である。双耳瓶は单孔又は二孔の耳を肩部に付ける。須恵器の帰属時期は8世紀第4四半期～9世紀初頭と9世紀第3四半期～10世紀初頭のものが考えられる。出土地区は5・16・21・22地区以外全てから出土している。

#### 土師器

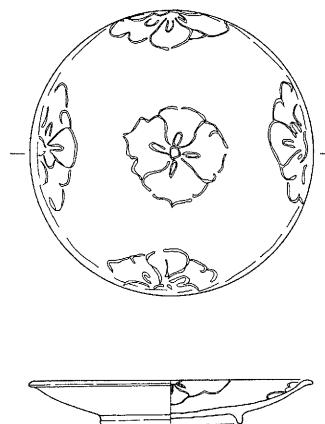
土師器は壺A・壺B・皿A・皿B・甕・鍋が出土している。壺Aはロクロ成形で底部が回転糸切り未調整のものが殆どであり、報告書に掲載した総数は825点である。無高台の壺Bは3・8地区の2点のみ。形態は底部から口縁端部にかけて、やや内湾しながら立ち上がるもの、直線的に立ち上がるものの、内湾しながら口縁部でやや外反するものの3種類に分類される。赤彩を施したものは825点中465点、全体の56%にあたる。また口縁部内外面に炭化物・タール等の付着物がみられるものも76点出土している。皿は、無高台の皿A78点、有高台の皿B22点である。皿も壺と同じくロクロ成形の回転糸切り未調整のもので、皿Bは皿Aの形態に高台が貼り付けられるものである。赤彩を施したものは100点中37点、全体の37%にあたる。土師器の帰属時期は9世紀～10世紀初頭のものと考える。出土地区は5・6・12・14・16・22地区以外全てから出土している。

#### 黒色土器

黒色土器は、燻し焼きをすることにより土器表面に炭素を吸着させ、漆黒色に仕上げた土器である。器種は無高台壺Aと有高台壺Bの2種類あり、総数29点（壺A15点・壺B14点）が出土している。有高台壺Bは口径13.0cm～14.4cmを測る小型品が多い傾向があり、無高台壺Aは口径14.8cm～18.1cmを測る。口縁部外面のヘラ磨きや外底面のヘラ削り調整を省略するもので、時期は9世紀中葉以降のものである。出土地区は3・8・20地区の3箇所で、8割強が3地区からの出土である。

#### 緑釉陶器

緑釉陶器は、器面全体に淡緑色・濃緑色などの光沢ある釉薬を施す陶器である。産地は尾張猿投産と京都洛北産の2箇所、総数13点（尾張2点・京都11点）が出土し、器種は壺と皿の2種類がある。第30図は内面に陰刻花文を施した尾張猿投産の皿（3地区祭祀溝出土）。黒窓90号窯式期にあたり、時期は9世紀後半～10世紀初頭の完形品である。京都洛北産の壺・皿は、素地の器面全体にヘラ磨き調整、淡緑色釉が薄く施されている。削り出し蛇の目高台の内側に×のヘラ記号が刻まれたものが1点ずつ出土。出土地区は2・3・15地区の3箇所で、8割強が3地区である。祭祀における緑釉陶器の役割は、口縁部の意図的な打ち欠きや釉薬の部分的銀化などから、灯火具とも考えられる。出土層位を鑑みると、祭祀後に廃棄されて溝が埋没し終焉をむかえる時期を特定するものと考える。



第30図 緑釉陶器実測図（1/4）

## 第2項 文字資料

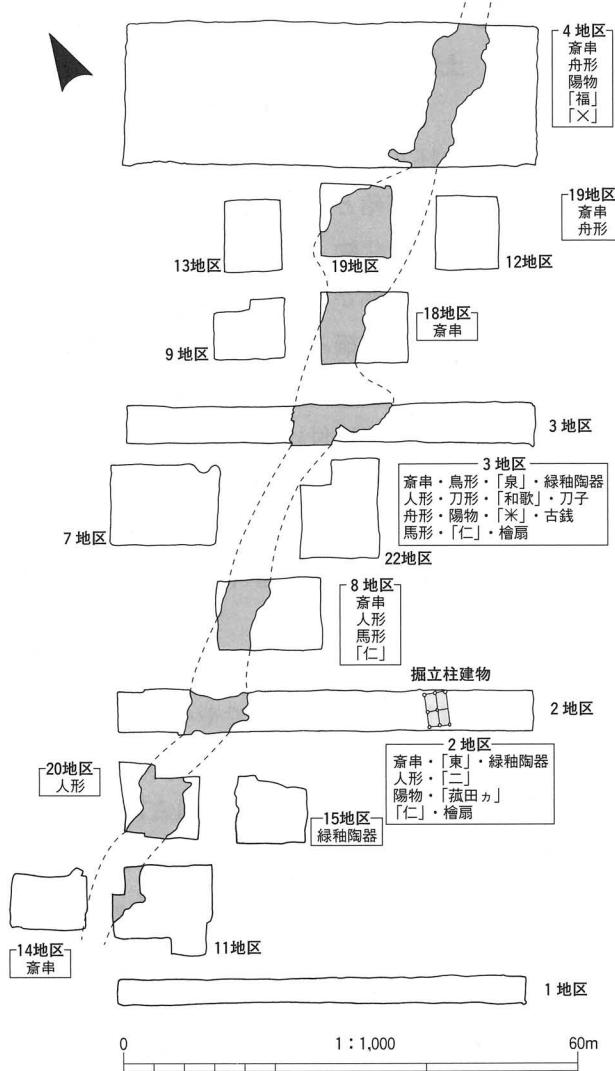
文字資料は墨書土器17点が出土している。出土地区は2・3・4・8地区の4箇所で、半数が3地区からである。判読不明の文字があったため、全ての墨書で改めて鑑定を依頼したところ、新たな解釈が得られた文字が3点確認されている。

まずは、「檜」が「福」であること(第32図1)。祭祀溝から吉祥句の「福」が出土したことで意味がより理解できるものと考える。次は、「蓄カ」が「菰田カ」であること(第32図2)。イネ科の多年生水草で食用にもされた菰(まこも)が遺跡周辺に広がる環境であったと考えられる。祭祀溝より出土のむしろも関連性を増している。最後は、土師器皿の裏面全体に手習い文字が書かれていたものが、「平仮名」に移行していく前段の草仮名と呼ばれる文字で、内容は和歌の断片が書かれていることが判明したことである。(第4項参照)

文字には、全体的なバランスや留め・払いといった筆使い等から、達筆なもの、稚拙なもの2種類がみられる。これは筆順を理解している人と、理解せずに見まねで書く人が、混在していた証拠であり、知識レベルの格差を見ることができる。

## 第3項 木製品

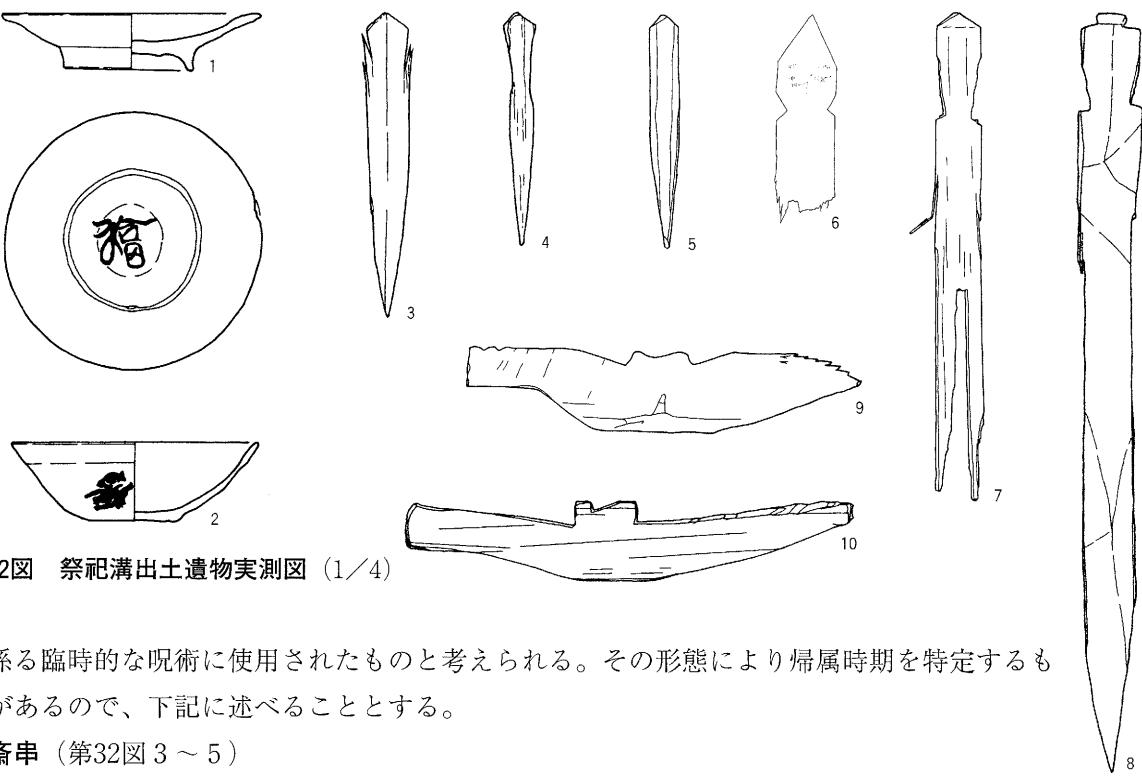
木製品は祭祀溝を検出した全地区より出土しており、食事具(杓子)、農具(鍬・鋤・豎杵・横杵)、紡織具(糸巻・編板)、容器(椀・皿・高杯・柄杓・折敷・曲物)、服飾具(下駄・檜扇)、祭祀具(斎串・人形・舟形・馬形・鳥形・刀形・陽物)、雑具(火鑽臼)と器種も豊富である。これらの木製品は、全て祭祀に関連づけて廃棄されたものと考える。農具は五穀豊穣の祈り、紡織具は井戸祭祀に使用されたと考える。当時、井戸神を女神と考えられていたために、女神の望む紡織具を捧げ、清淨でたゆまぬ湧水を祈ったもの。杓子や容器は神が宿る呪術的な性格をもつものとされ、火鑽臼は土器に痕跡が残る灯火具への発火具として考えられる。檜扇は、前項に記載のある和歌の墨書土器と出土したことで、上巳の祓いに関与しているものと考えられる。(第4項参照)祭祀具は、律令国家繁栄のための大祓や旱魃・飢饉・地震等の天災、疫病



第31図 祭祀溝遺構実測図 (1/1,000)

祭祀具	計	2地区	3地区	4地区	8地区	14地区	18地区	19地区	20地区
斎串	52	2	18	4	3	14	5	6	1
人形	5	1	2		1				
舟形	5		3	1					
馬形	3		2		1				
鳥形	1		1						
刀形	3		3						
陽物	3	1	1	1					
<b>墨書土器</b> 17									
「仁」	6	1	4		1				
「東」	2	2							
「泉」	2		2						
「福」	1			1					
「二」	1	1							
「菰田カ」	1	1							
「和歌」	1		1						
「×」	1			1					
「*」	1		1						
「不明」	1		1						

第3表 祭祀関連遺物出土表



第32図 祭祀溝出土遺物実測図 (1/4)

に係る臨時の呪術に使用されたものと考えられる。その形態により帰属時期を特定するものがあるので、下記に述べることとする。

#### 斎串 (第32図 3 ~ 5)

斎串は総数52点、祭祀溝を検出した約130m間ほぼ均等に全7地区より出土している。形態は圭頭部両角に削りかけを施すもの、圭頭部両側面を切り欠くもの、圭頭部を作り出すのみのものがある。この3形態は順に加工が粗悪になっており、出土層位も約30cmの標高差があることを鑑みると、帰属時期差があるものと考えられる。第32図3は8世紀後半、4・5は9世紀中葉以降のものである。

#### 人形 (第32図 6 ~ 8)

人形は全4地区より総数5点が出土している。形態は墨書による顔の表現があり頬がふくらみ撫肩のもの、頬がこけた撫肩で手足の表現があるもの、頬がこけた怒り肩で大型のものがある。大型品とそれ以外のものは、出土層位の約55cmを測る標高差や大型化傾向から帰属時期差が考えられる。第32図6は8世紀後半、7は8世紀末~9世紀初頭、8は9世紀中葉以降のものである。

#### 馬形 (第32図 9・10)

馬形は3・8地区より総数3点が出土。形態は馬の側面形を表現し鞍を削り出した飾馬のもので、たてがみの有無によって2種類がある。第32図9は8世紀末~9世紀初頭、10は9世紀中葉以降のものである。2地区祭祀溝の最深部に獣骨や歯が出土しており、牛馬と考えられる。祈雨祭に牛馬を屠殺し神に献じたもので、国家が牛馬の屠殺を禁止し、代わりに馬形を使用する以前の祭祀と考える。

#### 年輪年代法

年輪年代法による調査は、年輪数が100層以上あるものを選定し、奈良文化財研究所に搬送し、年代学研究室で行われた。その結果、ヒノキの曲物底板1点が残存最外年輪617年と確定した。心材型のため原木伐採年の上限年代を示すことになる。木製品は「原木伐採→運搬→乾燥→製品加工→使用期間→廃棄」という過程を辿るが、この曲物底板を祭祀で使用された一過性のものと考えると、伐採から廃棄に至る経過年数は少ないと考えられる。従って、残りの心材部・辺材部を勘案しても、700年代の後半が推定され、祭祀開始年代が平安時代ではなく奈良時代に遡ることが判明した。

器種	樹種	(年輪数)	年輪年代	t値	辺材の有無	300	400	500	600	700	800	900	AD
曲物底板 (第17図125)	ヒノキ	(180)	617	7.7	無	438	██████████	617					

第4表 年輪年代測定結果

## 出土遺物保存処理事業報告

平成15~19年度の5箇年度に亘り、文化庁補助金を受けて合計239点(木製品:234・金属製品:5)の出土遺物保存処理を行った。本事業は出土遺物の腐蝕や劣化の防止を行う保存処理で、特殊な技術と手法を用いるため専門業者への委託業務とした。業者は(財)元興寺文化財研究所・(株)エイテックに委託した。各遺物の掲載報告書・処理方法は下記表を参照されたい。

第5表 保存処理完了遺物表

『赤田I遺跡発掘調査報告』 2003年12月  
一小杉町赤田土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一 富山県小杉町教育委員会

No.	器種	図版番号	処理	年度	No.	器種	図版番号	処理	年度	No.	器種	図版番号	処理	年度
1	木札	第28図5	□	15	46	火切臼	第28図18	●	16	91	檜扇	第29図48④	□	16
2	木札	第28図6	□	✓	47	陽物	第28図19	●	✓	92	檜扇	第29図48⑤	□	✓
3	舟形	第28図15	●	✓	48	陽物	第28図20	●	✓	93	檜扇	第29図48⑥	□	✓
4	舟形	第28図17	●	✓	49	陽物	第28図21	●	✓	94	檜扇	第29図48⑦	□	✓
5	斎串	第29図41	□	✓	50	斎串	第29図22	□	✓	95	檜扇	第29図48⑧	□	✓
6	斎串	第29図42	□	✓	51	斎串	第29図23	□	✓	96	檜扇	第29図48⑨	□	✓
7	盤	第30図52	●	✓	52	斎串	第29図24	□	✓	97	檜扇	第29図48⑩	□	✓
8	盤	第30図53	△	✓	53	斎串	第29図25	□	✓	98	檜扇	第29図49	□	✓
9	盤	第30図54	●	✓	54	斎串	第29図26	□	✓	99	檜扇	第29図50	□	✓
10	盤	第30図55	●	✓	55	斎串	第29図27	□	✓	100	檜扇	第29図51	□	✓
11	盤	第30図56	●	✓	56	斎串	第29図28	□	✓	101	御膳の脚	第30図61	△	✓
12	有孔鉢	第30図57	●	✓	57	斎串	第29図29	□	✓	102	堅杵	第30図65	●	✓
13	高杯	第30図59	●	✓	58	斎串	第29図30	□	✓	103	鋤未製品	第31図67	●	✓
14	匙	第30図60	●	✓	59	斎串	第29図31	□	✓	104	曲物	第35図102	□	✓
15	高杯皿	第30図63	●	✓	60	斎串	第29図32	□	✓	105	曲物	第35図103	□	✓
16	杓子	第30図64	●	✓	61	斎串	第29図33	□	✓	106	曲物	第35図104	□	✓
17	舟形	第31図66	●	✓	62	斎串	第29図34	□	✓	107	曲物	第35図106	□	✓
18	円盤状板	第31図68	●	✓	63	斎串	第29図35	□	✓	108	曲物	第35図107	□	✓
19	部材	第33図95	□	✓	64	斎串	第29図36	□	✓	109	曲物	第35図108	□	✓
20	部材	第33図96	◆	✓	65	斎串	第29図37	□	✓	110	曲物	第35図109	□	✓
21	瓢箪	第34図97	●	✓	66	斎串	第29図38	□	✓	111	蓋	第35図110	●	✓
22	瓢箪	第34図98	●	✓	67	斎串	第29図39	□	✓	112	木槌	第37図141	●	✓
23	瓢箪	第34図99	●	✓	68	斎串	第29図40	□	✓	113	部材	第38図145	●	✓
24	柄杓	第34図100	□	✓	69	斎串	第29図43	□	✓	114	人形	第28図2	□	17
25	柄杓	第34図101	□	✓	70	斎串	第29図44	□	✓	115	鳥形	第28図10	●	✓
26	紡織具	第37図126	●	✓	71	檜扇	第29図45①	□	✓	116	木槌	第30図58	●	✓
27	紡織具	第37図127	●	✓	72	檜扇	第29図45②	□	✓	117	包丁の柄	第30図62	●	✓
28	紡織具	第37図128	●	✓	73	檜扇	第29図45③	□	✓	118	杭	第31図69	●	✓
29	紡織具	第37図129	●	✓	74	檜扇	第29図45④	□	✓	119	杭	第31図71	●	✓
30	鋤	第37図130	●	✓	75	檜扇	第29図45⑤	□	✓	120	杭	第31図72	●	✓
31	鋤	第37図131	●	✓	76	檜扇	第29図45⑥	□	✓	121	板	第32図75	□	✓
32	紡織具	第37図140	●	✓	77	檜扇	第29図45⑦	□	✓	122	板	第33図87	●	✓
33	板	第38図146	●	✓	78	檜扇	第29図45⑧	□	✓	123	板	第33図89	●	✓
34	刀子	第40図4	◎	✓	79	檜扇	第29図45⑨	□	✓	124	板	第33図90	□	✓
35	人形	第28図1	●	16	80	檜扇	第29図46①	□	✓	125	板	第33図91	□	✓
36	人形	第28図3	□	✓	81	檜扇	第29図46②	□	✓	126	板	第33図93	●	✓
37	人形?	第28図4	□	✓	82	檜扇	第29図46③	□	✓	127	板	第33図94	●	✓
38	木札	第28図7	□	✓	83	檜扇	第29図46④	□	✓	128	曲物	第35図105	□	✓
39	馬形	第28図8	●	✓	84	檜扇	第29図46⑤	□	✓	129	蓋	第35図111	●	✓
40	馬形	第28図9	●	✓	85	檜扇	第29図46⑥	□	✓	130	曲物底板	第36図112	●	✓
41	刀形	第28図11	●	✓	86	檜扇	第29図46⑦	□	✓	131	曲物底板	第36図114	●	✓
42	刀形	第28図12	●	✓	87	檜扇	第29図47	□	✓	132	曲物底板	第36図116	●	✓
43	刀形	第28図13	●	✓	88	檜扇	第29図48①	□	✓	133	曲物底板	第36図117	●	✓
44	刀形	第28図14	●	✓	89	檜扇	第29図48②	□	✓	134	曲物底板	第36図118	●	✓
45	舟形	第28図16	●	✓	90	檜扇	第29図48③	□	✓	135	曲物底板	第36図122	●	✓

処理方法: ポリエチレングリコール(P E G)含浸法 ● 凍結乾燥法 △  
 : アルコール・キシレン・樹脂法 □ 糖アルコール含浸法 ◆  
 : 樹脂含浸、塗布による強化・防錆処理 ○

No.	器種	図版番号	処理	年度	No.	器種	図版番号	処理	年度	No.	器種	図版番号	処理	年度
136	曲物底板	第36図124	●	17	141	斎串	第38図152	●	17	146	棒	第39図194	●	17
137	曲物底板	第36図125	●	〃	142	板扇	第38図153	□	〃	147	鉄鎌	第40図1	○	〃
138	宝珠状製品	第37図136	●	〃	143	棒	第39図191	●	〃	148	鉄釜	第40図2	○	〃
139	杭の先	第37図137	●	〃	144	棒	第39図192	●	〃	149	包丁	第40図3	○	〃
140	斎串	第38図151	□	〃	145	棒	第39図193	●	〃	150	鏃子	第40図5	○	〃

『赤田 I 遺跡発掘調査概要(1)』 2005年3月  
一個人専用住宅建築に伴う埋蔵文化財調査一 富山県小杉町教育委員会

No.	器種	図版番号	処理	年度	No.	器種	図版番号	処理	年度	No.	器種	図版番号	処理	年度
151	下駄	第37図678	●	17	157	折敷部材	第37図685	◆	17	163	木札	第39図701	◆	19
152	下駄	第37図679	●	〃	158	皿	第37図684	●	18	164	木札	第39図702	◆	〃
153	紡織部材?	第37図680	◆	〃	159	曲物	第38図686	□	〃	165	木札	第39図703	◆	〃
154	紡織具	第37図681	◆	〃	160	馬形	第39図709	□	〃	166	斎串	第39図704	□	〃
155	部材	第37図682	◆	〃	161	曲物	第38図687	◆	19	167	斎串	第39図707	□	〃
156	皿	第37図683	◆	〃	162	編み錘	第38図700	◆	〃	168	棒状製品	第39図708	◆	〃

『射水市内遺跡発掘調査報告 I』 2008年3月  
一赤田 I 遺跡本発掘調査・串田地区試掘調査一 富山県射水市教育委員会

No.	器種	図版番号	処理	年度	No.	器種	図版番号	処理	年度	No.	器種	図版番号	処理	年度
169	斎串	第12図1	□	19	193	杵状製品	第15図94	◆	19	217	組物	第18図141	◆	19
170	斎串	第12図2	□	〃	194	杵先端部	第15図95	◆	〃	218	組物	第18図142	◆	〃
171	斎串	第12図3	□	〃	195	折敷	第15図96	◆	〃	219	机脚部?	第18図143	◆	〃
172	斎串	第12図4	□	〃	196	折敷	第15図97	◆	〃	220	組物部材	第19図149	◆	〃
173	斎串	第12図5	□	〃	197	折敷	第15図98	◆	〃	221	角材状部材	第20図160	◆	〃
174	斎串	第12図6	□	〃	198	羽子板状製品	第16図99	◆	〃	222	角材状部材	第20図163	◆	〃
175	斎串	第12図7	□	〃	199	浮子?	第16図100	◆	〃	223	角材状部材	第20図164	◆	〃
176	斎串	第12図8	□	〃	200	曲物	第16図103	◆	〃	224	角材状部材	第21図179	◆	〃
177	斎串	第12図9	□	〃	201	曲物	第16図104	◆	〃	225	板状部材	第21図183	◆	〃
178	斎串	第12図10	□	〃	202	柄杓の柄	第16図110	◆	〃	226	板状部材	第21図184	◆	〃
179	斎串	第12図11	□	〃	203	柄杓の柄	第16図111	◆	〃	227	棒状部材	第22図187	◆	〃
180	斎串	第12図12	□	〃	204	曲物底板	第17図123	◆	〃	228	斎串	第24図251	□	〃
181	斎串	第12図13	□	〃	205	曲物底板	第17図125	◆	〃	229	斎串	第24図252	□	〃
182	斎串	第12図14	□	〃	206	曲物底板	第17図127	◆	〃	230	斎串	第24図253	□	〃
183	編み台	第14図84	◆	〃	207	曲物部材	第17図128	◆	〃	231	斎串	第24図254	□	〃
184	糸巻	第14図85	◆	〃	208	斎串	第18図130	□	〃	232	斎串	第24図255	□	〃
185	糸巻	第14図86	◆	〃	209	斎串	第18図131	□	〃	233	斎串	第24図256	□	〃
186	糸巻	第14図87	◆	〃	210	斎串	第18図132	□	〃	234	舟形製品	第24図258	□	〃
187	糸巻	第14図88	◆	〃	211	斎串	第18図133	□	〃	235	皿	第24図259	◆	〃
188	糸巻	第14図89	◆	〃	212	斎串	第18図134	□	〃	236	皿	第24図260	◆	〃
189	編み錘?	第14図90	◆	〃	213	楔	第18図135	◆	〃	237	柄杓(瓢箪)	第24図261	◆	〃
190	下駄	第14図91	◆	〃	214	楔	第18図136	◆	〃	238	編み錘	第24図270	◆	〃
191	椀	第15図92	◆	〃	215	机脚部	第18図139	◆	〃	239	人形	第29図380	□	〃
192	大皿	第15図93	◆	〃	216	台脚部	第18図140	◆	〃					

処理方法：ポリエチレングリコール(P E G)含浸法 ● 凍結乾燥法 △  
: アルコール・キシレン・樹脂法 □ 糖アルコール含浸法 ◆  
: 樹脂含浸、塗布による強化・防錆処理 ○

## 第4項 草仮名墨書き土器

### 赤田I遺跡出土の草仮名墨書き土器

鈴木 景二

#### はじめに

富山県射水市（当時は小杉町）下条の赤田I遺跡で検出された溝S D01から15点の墨書き土器が出土した。これらの墨書き土器の概要是前報告書<sup>(1)</sup>に写真、図、釈文を掲載して報告されている。その多くは他の遺跡で見られるような一文字のものであるが、解読されないまま残されていたものが1点ある。今回その土器を実見したところ、草仮名の墨書きであることが見て取れた。土器自体は9世紀後半のものとされ、草仮名の成立期の資料として国語学、書道史、国文学、さらに平安前期の地方社会での儀礼に関するきわめて重要な遺物であると考えられる。そこで、以下に概要を報告することとする。

#### 1. 墨書きと概要

草仮名が記された土器は、口径131mm、器高24mm、糸切底座径48mmの扁平な土師器の完形の壺で、輻轤成形し、底座には明瞭な糸切痕跡が見られる。器体は明るい赤褐色を呈し、外面はナデ調整を施す。同面に色相の違いによる重ね焼きの痕が残る。口縁内側に赤彩の痕跡がわずかに残る。土器自体は9世紀後半の年代が与えられている。器形からみて酒杯、「かはらけ」と考えて差し支えない。

第33図にみるように、墨書きはその外面に、底座を挟んで左右に振り分けに書かれている。墨書きの遺存は良好で、機器を用いなくても肉眼で十分に観察することができる。

文字は数文字でまとまりを持つ部分があるので、そのまままとった部分から順に検討していこう<sup>(2)</sup>。Aは、同方向、同大の四文字でひとまとまりとみられ、草仮名「佐佐川幾」（ささつき）と読むことができる。「佐」は第四画がやや外反する。古筆などの仮名「佐」は同画が内側へ湾曲するものが多いが、字母「佐」の崩しとしてはこの方が字母に近く、古風を残しているように思う。外反する例は『寛平御時后宮歌合』、『神楽和琴秘譜』など<sup>(3)</sup>に見られる。「川」は二画のように見えるが、現物を観察すると第一画の横線上に第二画の点が重なっていることが看取される。第三画は末端をわずかに下方へ曲げている。『正倉院万葉仮名文書乙』<sup>(4)</sup>、『自家集切』<sup>(5)</sup>などに近い例がある。「幾」は縦に伸びた字形であるが、筆画をたどれば『秋萩帖』<sup>(6)</sup>などに見られる草仮名「幾」であることは明らかである。この四文字の個々の結体は稚拙さを感じさせる。草仮名の成立期ゆえの素朴さか、もしくは筆者の技量の反映であろうか。「ささつき」は名詞らしいが、語意は明確ではない。「さ」の二文字を習書ならではの重複とみて「さつき」の語意となる可能性も考慮されるが、酒杯の意である可能性がある。「つき」は「壺」と解せる。「ささ」を酒の異名とする確実な例は中世末まで下るが、『播磨国風土記』揖保郡条に、「屋形を屋形田に作り、酒屋を佐々山に作りて」という記述がみられ、酒を「佐々」と称することが奈良時代に遡る可能性があり、『懐風藻』の漢詩に「竹葉」（境部王「宴長王宅」・背奈王行文「上巳禊飲 応詔」）と詠まれている文言が、中国の故事を踏まえて宴席における酒を含意するとの指摘がある<sup>(7)</sup>。墨書き土器自体が扁平な壺で酒杯とみてよいものであるから、その器名を試みに仮名で書き付けたと解することができよう。他に「淤」（どろ）に「サ、」と訓を付した例が『東大寺諷誦文稿』に見られる<sup>(8)</sup>。

Bは、口縁に沿って書かれた三文字がひとまとまりとみられる。「奈尔波」（なには）である。古代の手習いの歌として多くの出土文字資料にみられる難波津歌<sup>(9)</sup>の書き出しであろう。ただし、その後に続く文字の習書がないから、他の意味をもつ可能性もいちおう考慮される。祭祀遺物との関連で、地名の難波などが連想される。なお、富山県高岡市の東木津遺跡からは、この土器と近い時期のものとされる難波津歌を書いた木簡が出土している<sup>(10)</sup>。

Cは、硬直した直線的な字であるが「計」（け）であろう。D・EはBと一部重複するが、Dは「比」

(ひ)、Eは「奈」(な)である。

Fは一見するとGと同形にみえるが、仔細に観察すると二文字目には左右に点がある。「比尔」(ひに)であろう。Gは「比川川」(ひつつ)である。F・Gは仮名としての字形、筆使いが洗練の度を加えているようにみえ、特に連綿が現われている点で注目される。

Hは「乃見」(のみ)である。「乃」は見慣れない字形で、平仮名の「の」でいうと、第一画の回転する線を2本の直線で表現している。『正倉院万葉仮名文書甲』に近似した字体がある。第三画の末をさらに小さく屈曲させるのは、字母「乃」の第一画の屈曲の痕跡であろう。その線は「見」に連綿としてつながる。「見」は古筆の例に比べると第二画が極端に短い。また、終筆の線末はわずかに上方にはね、筆勢が左に内転して現われた縦棒がクロスして下方へ抜け、連綿の勢いを見せる。

以上の草仮名は、底座を中心に挟んで左右に書かれている。これは意図したとみるより左側が埋まり、つづいて右の余白に習書が及んだのである。二つの「川」の違いにみられるように、左側には名詞をややこちない独立した文字で書くが、右側には送り仮名らしい仮名が、こまやかな筆勢の連綿で書かれている。後者は、例えば「恋ひつつ」あるいは「思ひに」などのような語句の、活用語尾と助詞と考えられる。

このような語彙からみると、この墨書、特に右側の仮名は公文書や漢詩の習書とみるよりも和歌に関する習書と見る方がふさわしいと考えられる。しかも、断片的な文言しか見られないことは、これが典籍書写時の習書ではなく、和歌詠作の場における習書であることを物語るであろう。また連綿が句末の送り仮名相当部分に見られることは、仮名の連綿の成立過程をも示唆するものではないだろうか。

## 2. 草仮名資料としての位置

この墨書(以下、草仮名墨書と称す)の位置づけを確認するために、現在までに知られている草仮名から平仮名への移行期の主な資料を大体の年代順に並べると、以下の通りである<sup>(11)</sup>。

- ①. 多賀城跡出土漆紙仮名文書 9世紀中ごろ
- ②. 讀岐国司解有年申文 867年
- ③. 東寺檜扇 877年
- ④. 東木津遺跡出土難波津歌木簡 9世紀後半
- ⑤. 紀貫之筆土左日記(藤原定家臨模本) ~945年
- ⑥. 因幡国司解案紙背仮名消息 10世紀前半
- ⑦. 醍醐寺五重塔初層天井板落書 951年
- ⑧. 平安宮左兵衛府跡出土和歌墨書土器 10世紀前半から半ば
- ⑨. 『金剛界入曼荼羅受三昧耶戒行儀』表紙紙背消息 10世紀半ば

草仮名墨書は土器自体が9世紀後半とされるので、②讀岐国司解有年申文と同時期から半世紀ほどの間のものと位置づけられる。書体もそれに違和感を抱かせないものである。記述内容の性格についてみると、9世紀までの資料のほとんどが文書であるなかで、草仮名墨書が和歌の習書を含むとすれば、④とともに貴重な資料となる。さらに、④が定型的な難波津歌の習書であるのに対し、草仮名墨書は和歌詠作時の習書の可能性が高く、稀有な資料となる。

なお、以上のはかにも9世紀代とされる難波津歌の習書が知られているが、草仮名とすべきかどうか判断しがたい。また三重県斎宮跡、松阪市堀町遺跡からも9世紀とみられる仮名墨書土器が出土しているが、年代、判読が一定していないようなので、今後の検討を待ちたい<sup>(12)</sup>。

### 3. 土器に歌を書くこと

土器に和歌を書く場合のあったことは、次の資料によって知られている。奈良時代では『万葉集』に収められた粟田女娘子が大伴家持に贈った恋歌（巻4 707番）に、「注土境之中」と注記があることから確認され、平安時代に入ってからも、『うつほ物語』には「かはらけにかく書きつけ給ふ…（和歌）」（巻4 まつりの使）、「かはらけを見給へば、女御の君の御手にて…（和歌）…と例よりもめでたく書き給へり」（巻9 蔵ひらき）とある。さらに『藤原義孝集』には、「またかはらけに（和歌を）かきてかみにつつみてうちわりてとらせたれば」と詞書のある和歌が載り、『伊勢物語』にも「女のかたよりいだすさかづきのさらに…（和歌）…とかきて、すゑはなし。そのさかづきのさらに、ついまつのすみしてかきつく…（和歌）」（第69段）とある<sup>(13)</sup>。上記の草仮名資料⑧は、その実例と見るべきものであろう。

これらは和歌の贈答における媒体として、土器（かはらけ・さかづき）に書いたものである。これに対して草仮名墨書は、完成した和歌そのものを記したものではなく、「ひとつ」「のみ」など和歌の句末と推定される文言に過ぎない。これを和歌の習書の一部であると前提して考えると、上述のように、この墨書は和歌を詠みつつそれを書き記す、まさに詠作の現場における筆試しの所産であると推定することができるであろう。ちなみに、宴で詠んだ和歌をその場で折敷に書き付けたことが、やはり『うつほ物語』などに見えている<sup>(14)</sup>。この墨書が坏に記されていることは、その詠作が宴の場においてであったことを示している。

以上のような推定が許されるなら、この資料は草仮名の資料であるに留まらず、その出土遺構の性格、そこで繰り広げられた儀礼について推測する手がかりを提供するものとなる。

### 4. 草仮名墨書の書かれた場と遺構 —曲水の宴の可能性—

あらためて出土遺構と伴出遺物についてふりかえってみよう。この墨書土器が出土したのは試掘調査で検出された溝S D01である。調査は、東西方向のトレーナー4本を、南北方向に約20m間隔で並べて設定して行われた。溝S D01は、そのうちの4区から2区にかけて、北東から南西へと斜めに横断するかたちで部分的に検出された。特に多くの遺物や墨書土器などが出土した3区について溝の規模や状況をみると、断面は逆台形で、上幅約6～8m、最深部の深さ約1.5m、岸には護岸の堰状遺構もみられる。また土層に流水堆積がみられず緩やかな流れであったと推定されている。溝S D01からは、檜扇3組、祭祀具をふくむ木製品、それに同型の土師器坏が完形で大量に伴出している。緑釉陶器の皿も出土しており、灯明皿と見られるものがある。こうした状況から、前報告書では溝S D01を祭祀に関する遺構と推定し、新潟県柏崎市半田の箕輪遺跡と共通する部分の多いことを指摘している。溝に沿うことから祓いなどの祭祀が行われたことが想定される。しかし、饗宴の器とされる緑釉の皿や大量の土師器坏が出土していることに改めて注目すべきであろう<sup>(15)</sup>。それらは、酒杯とみられ、この遺跡が祭祀の場であっただけではなく饗宴の場であったことを如実に示している。そうとなると草仮名墨書は、その宴の場での詠歌の際に記されたことになる。

つまりこの遺跡の場では、遺物からみて高貴な人物も参加した祭祀儀礼とそれに伴う饗宴が開かれたと考えられ、それは水辺において行われ、かつ和歌を詠む場でもあったのである。こうした条件を満たす儀礼として想起されるのは、三月三日の上巳の祓いとそれに伴う曲水の宴である<sup>(16)</sup>。

曲水の宴は中国に由来し飛鳥時代から宮廷で行われ、貴族の邸宅でも開催されたことが知られている。奈良時代では『統日本紀』に記録された事例や『懐風藻』所収の詩が詠まれた事例がしられ、畿外での事例では大伴家持が越中守在任中にその館で催した事例（『万葉集』巻19 4153）がある。平安時代の貴族が開催した記録も残り、紀貫之が主催した曲水の宴については、和歌がまとまって残されている<sup>(17)</sup>。9世紀後半に地方へ赴任した官人が、地元の豪族も含めて同様の年中行事を行うこと

は不思議ではない。

また、都の庭園遺跡などでは蛇行し景石などを配した曲池の遺構によって曲水の行われたことが推定されているが、曲水の宴はある程度の条件を満たす水流があれば実施可能であろうから、そうした場所で行われていた場合は、遺構のみから認識することが難しいであろう。

検出された溝 S D01はトレンチ調査のため断続的に検出したのみであるが、直線の溝ではなく屈曲した部分がある。前報告書に指摘されていた、溝の流れが緩やかであったと考えられること、岸に護岸の設備があることなども、曲水の宴の場とする想定と符合する。赤田 I 遺跡の溝 S D01は、上巳の祓いと曲水の宴の遺構であると推定してよいと思う。

赤田 I 遺跡で催されたと推定される宴に参加した人々は、中央から赴任した国府の官人だけでなく在地の人びとも参加していた可能性が考えられる。墨書を書き残した人物像を考えるうえで考慮すべき問題である。

### 結語

これまでの考察の結果をまとめると以下の通りである。

1. 本稿で検討した草仮名墨書は9世紀後半の草仮名であり、これまで知られている草仮名資料のなかでも成立期のものとして位置づけられる。また連綿が現われている点でも、仮名文表記の歴史を考える上で重要な資料である。
2. 難波津歌の書き出しである可能性の高い文言が記され、同歌の資料として加えることができる。
3. 多賀城跡出土漆紙文書、東木津遺跡出土難波津歌木簡とともに、古代の地方における仮名の使用状況を示す資料となる。
4. 草仮名墨書には和歌の句末の文言の習書が含まれるらしく、和歌を詠んだ場で書き残された習書であると推定される。和歌詠作の場で書かれた最古級の現物仮名資料である可能性が高い。
5. 墨書土器が出土した溝 S D01は曲水の宴の場であると考えられ、古代の地方における曲水の宴に関わる遺構・遺物としてきわめて重要である。現段階において、草仮名墨書土器は古代の曲水の宴での詠作に関わる現物資料として最古かつ唯一の資料である可能性が高い。
6. 上記の溝 S D01の性格づけが正しければ、同様の遺構・遺物が出土している各地の遺跡も曲水の宴の場である可能性を有することになる。

最後に、4・5の点の推定について問題点を述べれば、これまでの各地の発掘調査において、なぜ曲水の宴の遺構、特にそこでの和歌の習書資料の出土が知られていないのか、ということである。この点についての断案は得ていない。今後の研究を俟つこととしたい。

### 【註】

- (1) 『赤田 I 遺跡発掘調査報告』(2003年12月 小杉町教育委員会)
- (2) 以下の検討にあたっては、筒井茂徳編『かな名跡大字典』角川書店 1981年、井茂圭洞編『二玄社かな字典』二玄社 1991年、古谷稔『秋萩帖と草仮名の研究』二玄社 1996年などを参照した。
- (3) 『寛平御時后宮歌合』日本名筆選14(二玄社 1993年 5頁5行目など)、『神楽和琴秘譜』(『古楽古歌謡集』陽明叢書国書篇8 思文閣出版 1978年 43頁7行目など)。
- (4) 『正倉院万葉仮名文書乙』(『南京遺文』佐佐木信綱 1921年 所収。同書で、正倉院文書万葉仮名文書2通のうち「布多止己呂」で始まる方を「甲」、「和可夜之奈比」で始まる方を「乙」と仮称している。)
- (5) 『自家集切』(『古筆小品集』日本名筆選35 二玄社 1995年 3頁1行目)。
- (6) 『秋萩帖』(日本名筆選42 二玄社 2003年 10頁2行目など)。本帖の成立について小松茂美「『秋萩帖』原本の出現」(『東京国立博物館紀要』第20号 1985年)がある。

- (7) 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂 1967年「ささ」「わささざけ」、『懐風藻』日本古典文学大系 岩波書店 1964年 125頁頭注。
- (8) 築島裕編『東大寺諷誦文稿總索引』汲古書院 2001年 310行目。
- (9) 近年の難波津歌の研究については犬飼隆『木簡による日本語表記史』笠間書院 2005年を参照。また、八木京子「難波津の落書」(『国文面白』第44号 2005年)、「上代文字資料における音訓仮名の交用表記」(『高岡市万葉歴史館紀要』第15号 2005年)に出土事例を集めている。
- (10) 東木津遺跡出土の難波津歌木簡については、『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』高岡市教育委員会 2001年に報告がある。年代については叙述に不明な部分があるが、9世紀後半を中心とされているようである(92頁)。さらにこの木簡を検討された川崎晃氏も9世紀後半とするのが穩當とされている。同「気多大神宮寺木簡と難波津歌木簡について」(『高岡市万葉歴史館紀要』第12号 2002年)。なお、同遺跡出土の杯蓋に同時期とみられる仮名風の墨書「比□(豆カ)」がある(同上報告書図116・5841番 田中明氏の御教示による)。
- (11) 以下の資料の年代などについては、森岡隆『図説かなの成り立ち事典』(教育出版 2006年)などを参照した。事例のうち④⑨以外は同書に写真が載せられている。④は前掲(10)、⑨は小林芳規「金剛界入曼荼羅受三昧耶戒行儀」『石山寺資料叢書』史料篇第一 法藏館 1996年、同『図説日本の漢字』大修館書店 1998年。⑧については、土橋誠「仮名書きの墨書土器」『月刊文化財』第361号 1993年を参照。
- (12) 『眠りから覚めた文字たち』斎宮歴史博物館 1997年、『器は語る700年』同 2000年、山本真吾「平仮名史に於ける斎宮跡出土仮名墨書土器の座標」、小濱学「斎宮跡出土平仮名墨書土器の現状と課題」『斎宮歴史博物館研究紀要』第14号 2005年。
- (13) 日色四郎『日本上代井の研究』日色四郎先生遺稿出版会 1967年 176頁、榎村寛之「斎宮跡出土の墨書土器について」(前掲12『眠りから覚めた文字たち』)。
- (14) 入間田宣夫「折敷墨書を読む」(平泉文化研究会編『奥州藤原氏と柳之御所跡』吉川弘文館 1992年 298頁)。
- (15) 藤原良章「中世の食器」(1988年、同『中世的思惟とその社会』吉川弘文館 1997年)、高橋照彦「出土文物からみた平安時代の儀礼の場とその変化」、吉岡康暢「カワラケ小考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第74集 1997年。
- (16) 古代の曲水の宴については、小中村清矩「曲水考」同『陽春盧離考』卷5 1898年、倉林正次『饗宴の研究(文學編)』桜楓社 1969年があり、考古学、文献史学、庭園学などの共同研究の成果が『古代庭園研究』1 奈良文化財研究所 2006年に集成されている。以下の叙述はこれらを参照した。
- (17) 山田孝雄「紀師匠家曲水宴和歌」同『日本歌学の源流』日本書院 1952年。この論考では曲水の宴が日没後にも行われたことが指摘されており、SD01出土土器に灯明皿に使用されたものが含まれることと符号する。

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
				は	ホ		ハ		
ヰ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
			ヰ	ヒ	ホ			ホ	
	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
						ツ			
ヱ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
								ヘ	
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
				ヲ					

第6表 仮名字体表



A  
佐  
佐  
川  
幾  
九  
神  
自  
秋



H  
乃  
見  
正甲  
元  
有



G  
比  
川  
因

C  
D  
E  
「計」  
「比」  
「奈」  
B  
奈 尔 波



F  
比  
尔  
尔  
正乙  
有

正：正倉院万葉仮名文書甲・乙 神：神楽和琴秘譜 自：自家集切  
有：讃岐国司解有年申文 因：因幡国司解案紙背仮名消息 秋：秋萩帖

第33図 草仮名墨書詳細図

## 第5項まとめ

### 古代赤田I遺跡の復元案

赤田I遺跡を発掘調査による考古学と古文書にみる文献史学の分野から考察してみる。出土遺物より8世紀第3四半期(750)～10世紀初頭(900)頃までの暦年代が考えられる。この150年間の古代越中国が記載された文献史実と、発掘調査によって確認した祭祀溝の土層堆積から3時期区分案を考える。

1期は8世紀第3四半期～9世紀初頭、都城の律令祭祀が伝播し溝が掘削され祭祀の開始期である。溝は標高5.2mの平坦地に深度約1.3mまで掘削し、殆ど勾配がないように造られている。文献によると飢饉が三度発生しており、不安定な生活下と祭祀が合致している。2期は9世紀初頭～中葉、生活が安定し溝が埋没する時期である。2期に帰属すると考えられる遺物が殆ど無いため、律令祭祀の年中行事のみが細々と行われていたものと考える。承和5年(838)9月の豊穣や、この間の天災記録が史実として伝承されていないことからも言えよう。3期は9世紀中葉～10世紀初頭、溝が再掘削され祭祀の再開期である。溝は自然埋没し堆積した土層を壊すように上から掘り込まれており、深度約0.7mまで掘削し、勾配がないよう1期同等に造られている。両岸が確認できた10箇所の堆積断面より判明している。文献にも飢饉・旱魃・大地震と天災続きの頃で、祭祀の必要性が増すものと考えられる。以上が各期の時代背景や出土遺物をもとに、祭祀溝の変遷を復元してみたものである。

祭祀の具体的な内容は6・12月の晦日に行う大祓や3月最初の巳の日に行う上巳の祓いとそれに伴う曲水の宴などの年中行事、飢饉・旱魃・地震などの天災時に行う祈雨祭・井戸祭祀や疫病の蔓延防止・病気回復を願う祓いの臨時的なものまで多岐に亘って行われていたと考えられる。

赤田I遺跡における律令祭祀は8世紀第3四半期以降に、都城から地方官衙、地方官衙から村落へと段階的に伝播しながらもたらされ、9世紀初頭に国家仏教として新たに採り入れられた密教がそれまでの道教思想に基づく律令祭祀に取って代わる10世紀初頭頃まで続けられていたものと考える。

和暦	西暦	古代越中国関連事項	祭祀溝変遷	祭祀溝(SD01)深度
天平神護1	765	4.4 美濃・能登・越中国などが飢饉となる。【続日本紀】	8C第3 1 期 9C初	1期：溝の掘削 5.2m 最深 3.9m (1.3)
延暦18 延暦24	799 805	6.25、7.23越中国に飢饉、都から使が遣わされる。【日本後紀】 5.26越中国に飢饉が発生し、庸を免じられる。		2期：溝の埋没 5.2m
承和5	838	9.29越中国などに灰のようなものが降り、 <u>豊年</u> となる。	2 期 9C中葉	3期：溝の再掘削 5.2m 最深 4.5m (0.7)
嘉祥1	848	6.3 越中国が飢饉となる。【続日本後紀】		
齊衡3	856	7.11越中国に干ばつのあったことが報告される。【文徳実録】		
貞觀5	863	6.17越中、越後国に大地震が発生し、家屋倒壊による圧死者が多くなる。【三代実録】	3 期 9C第3	

第7表 古代赤田I遺跡年表

〈参考文献〉

- 安念幹倫他 1995 『北高木遺跡発掘調査報告書』 大島町教育委員会
- 池野 正男 1997 「越中における9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究 第6号』 北陸古代土器研究会
- 稻垣尚美他 2003 『赤田I遺跡発掘調査報告』 小杉町教育委員会
- 金子 裕之 1996 『日本の美術5 まじないの世界I(縄文~古代)』 至文堂
- 岸本雅敏他 1985 『南太閤山I遺跡 都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(3)』 富山県教育委員会
- 小池淳一他 2002 『陰陽道の講義』 嵐峨野書院
- 巽 淳一郎 1996 『日本の美術6 まじないの世界II(歴史時代)』 至文堂
- 田中 明 2007 『北高木遺跡発掘調査報告(2)』 射水市教育委員会
- 原田義範他 2005 『赤田I遺跡発掘調査概要(1)』 小杉町教育委員会
- 原田義範他 2006 『赤田I遺跡発掘調査概要(2)』 射水市教育委員会
- 平川 南 2008 『全集 日本の歴史第2巻 日本の原像』 小学館

第8表 出土遺物観察表

図版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	残存量
第12図	1	S K06 14地区	木製品	斎串	8.8	1.7	0.3	8 C後半 スギ	完形
	2	S K06 14地区	木製品	斎串	8.8	1.7	0.3	8 C後半 スギ	完形
	3	S K06 14地区	木製品	斎串	8.8	1.5	0.3	8 C後半 スギ	完形
	4	S K06 14地区	木製品	斎串	10.0	1.8	0.3	8 C後半 スギ	完形
	5	S K06 14地区	木製品	斎串	10.3	1.7	0.4	8 C後半 スギ	完形
	6	S K06 14地区	木製品	斎串	10.2	1.7	0.3	8 C後半 スギ	完形
	7	S K06 14地区	木製品	斎串	10.6	1.6	0.2	8 C後半 スギ	完形
	8	S K06 14地区	木製品	斎串	10.6	1.6	0.3	8 C後半 スギ	完形
	9	S K06 14地区	木製品	斎串	10.7	1.5	0.3	8 C後半 スギ	完形
	10	S K06 14地区	木製品	斎串	10.9	1.7	0.4	8 C後半 スギ	完形
	11	S K06 14地区	木製品	斎串	11.0	1.8	0.3	8 C後半 スギ	完形
	12	S K06 14地区	木製品	斎串	11.2	1.8	0.4	8 C後半 スギ	完形
	13	S K06 14地区	木製品	斎串	11.8	1.8	0.5	8 C後半 スギ	完形
	14	S K06 14地区	木製品	斎串	12.5	1.7	0.5	8 C後半 スギ	完形
					口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)		
	15	包含層 14地区	須恵器	壺B			9.5		底 1/4
	16	包含層 14地区	金属製品	銅錢				寛永通宝	
	17	包含層 15地区	土師器	鍋				把手	破片
	18	包含層 15地区	土師器						破片
	19	包含層 15地区	須恵器	壺蓋					破片
	20	包含層 15地区	須恵器						破片
	21	包含層 15地区	須恵器	甕					破片
	22	包含層 15地区	須恵器	甕				外面櫛描波状文	破片
	23	包含層 15地区	須恵器	甕					破片
	24	包含層 15地区	須恵器	甕					破片
	25	包含層 15地区	須恵器	甕					破片
	26	包含層 15地区	須恵器	甕					破片
	27	包含層 15地区	珠洲	甕					破片
	28	包含層 15地区	珠洲	片口鉢	31.1				口 1/16
	29	包含層 15地区	緑釉陶器	塊	14.6			京都洛北産 9 C後半	破片
	30	S D03 16地区	木製品	不明部材	長27.7	幅1.5	厚1.3		
	31	包含層 17地区	石製品	石斧					
	32	包含層 17地区	石製玉作					鉄石英 剥片 荒削工程	5 g
	33	包含層 17地区	土師器	甕	13.2			外面黒色処理	破片
	34	包含層 17地区	土師器	甕	23.6				破片
	35	包含層 17地区	土師器	甕			5.3		底 完存
	36	包含層 17地区	須恵器				11.8	焼成不良	底 1/6
	37	包含層 17地区	土師器		10.8				
	38	包含層 17地区	土師器				4.2		破片
	39	包含層 17地区	石製品	砥石					
	40	包含層 17地区	石製品	砥石					
	41	包含層 17地区	石製品	碁石				灰色	
	42	包含層 17地区	石製品	碁石				黒色	
第13図	43	包含層 17地区	須恵器	壺蓋			つまみ径2.3		
	44	包含層 17地区	須恵器	壺蓋	10.2				破片
	45	包含層 17地区	須恵器	壺蓋				外面中心部に叩き痕	
	46	包含層 17地区	須恵器	壺	11.1				口 1/8
	47	包含層 17地区	須恵器	壺			10.4		
	48	包含層 17地区	須恵器	壺B			9.9		底 1/8
	49	包含層 17地区	須恵器	双耳瓶					破片
	50	包含層 17地区	須恵器						破片
	51	包含層 17地区	須恵器						
	52	包含層 17地区	須恵器	甕					破片
	53	包含層 17地区	須恵器	横瓶					破片

口：口縁部 底：底部 体：体部 壊：壺部 脚：脚部

第9表 出土遺物観察表

図版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存量
第13図	54	包含層 17地区	須恵器	甕		19.9			破片
	55	包含層 17地区	須恵器	甕	長10.0	幅2.3	厚1.2		破片
	56	包含層 17地区	木製品		25.0				
	57	S D01 18地区	土師器	甕	12.0	4.5	4.1	内外面赤彩 糸切り痕	口 1/16
	58	S D01 18地区	土師器	塊A	12.7	4.0	5.8	外面煤付着 糸切り痕	完形
	59	S D01 18地区	土師器	塊A	12.8	4.2	5.8	糸切り痕	口3/8 底 完存
	60	S D01 18地区	土師器	塊A	14.6	5.4	5.9	内外面赤彩 外面煤付着	口3/4 底 完存
	61	S D01 18地区	土師器	塊A	14.1	4.0	7.8	内面ミガキ痕 糸切り痕 外面赤彩 糸切り痕	口3/4 底 完存
	62	S D01 18地区	土師器	塊A	11.6	3.1	6.8		口1/4 底 完存
	63	S D01 18地区	土師器	塊B			7.0		底 1/3
	64	S D01 18地区	須恵器	壺A	11.3				1/2
	65	S D01 18地区	須恵器	壺B					底 1/4
	66	S D01 18地区	須恵器	長頸壺					破片
	67	S D01 18地区	須恵器	長頸壺			8.5	内外面自然釉付着	ほぼ完形
	68	S D01 18地区	須恵器						破片
	69	S D01 18地区	須恵器	甕					破片
	70	S D01 18地区	須恵器	甕				内面煤付着	破片
	71	S D01 18地区	須恵器	甕				内面煤付着	破片
第14図	72	S D01 18地区	須恵器	甕					破片
	73	S D01 18地区	須恵器	甕					破片
	74	S D01 18地区	伊万里	碗			4.6	内面コンニャク印判五弁花	底 4/5
	75	S D01 18地区	越中瀬戸	皿			4.5	内外面鉄釉	底 1/4
	76	S D01 18地区	石製品	砥石					
	77	S D01 18地区	石製品					煤付着	
	78	S D01 18地区	金属製品						
	79	S D06 18地区	珠洲	片口鉢	22.0				破片
	80	S K11 18地区	唐津	すり鉢					破片
	81	包含層 18地区	土師器	塊A			5.2	糸切り痕	底 1/2
	82	包含層 18地区	須恵器				11.2		底 1/5
	83	包含層 18地区	青磁	碗				同安窯系	破片
	84	S D01 18地区	木製品	編み台	18.3	4.0	1.2	スギ	
	85	S D01 18地区	木製品	糸巻	25.2	2.9	1.6	腕木	
	86	S D01 18地区	木製品	糸巻	23.5	2.2	1.8	腕木 木釘	
	87	S D01 18地区	木製品	糸巻	24.4	9.3	1.3	腕木 糸掛け	
	88	S D01 18地区	木製品	糸巻	24.2	9.0	1.4	腕木 糸掛け スギ	
	89	S D01 18地区	木製品	糸巻	11.6	3.1	1.1	糸掛け 釘穴 2箇所	
	90	S D01 18地区	木製品	編み錘	14.2	6.5	6.9		
	91	S D01 18地区	木製品	下駄	20.3	9.8	4.4	連歯型 右足	
第15図	92	S D01 18地区	木製品	椀	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)		
	93	S D01 18地区	木製品	大皿	16.9	9.8	5.3	ケヤキ	1/2
					43.3	2.1	36.8	ケヤキ 黒漆	1/2
	94	S D01 18地区	木製品	杵状製品	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
	95	S D01 18地区	木製品	杵状製品	25.4	4.9	4.5		
	96	S D01 18地区	木製品	折敷	4.4	5.8	5.5		
	97	S D01 18地区	木製品	折敷	26.5	8.8	0.9		
	98	S D01 18地区	木製品	折敷	49.2	12.5	1.3	一部炭化	
第16図	99	S D01 18地区	木製品	杓子状製品	56.0	19.4	1.2	スギ	
	100	S D01 18地区	木製品	浮子?	45.4	11.5	2.8		
	101	S D01 18地区	木製品		15.5	6.1	0.8	スギ	
	102	S D01 18地区	木製品					瓢箪	破片
	103	S D01 18地区	木製品	曲物				側板のみ	破片
	104	S D01 18地区	木製品	曲物	17.0	16.5	2.8	木釘・穴2箇所 底板あり	
				曲物	21.3	23.7	6.3	側板・底板あり	

口：口縁部 底：底部 体：体部 壱：壺部 脚：脚部

第10表 出土遺物観察表

図版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	残存量
第16図	105	S D01 18地区	木製品	曲物	11.5	3.0	1.0	側板のみ 破片	
	106	S D01 18地区	木製品	柄杓の柄	17.0	1.3	1.2		
	107	S D01 18地区	木製品	柄杓の柄	21.3	1.0	1.0		
	108	S D01 18地区	木製品	柄杓の柄	25.5	2.0	1.6		
	109	欠番							
	110	S D01 18地区	木製品	柄杓の柄?	61.9	0.9	0.9		
	111	S D01 18地区	木製品	柄杓の柄?	52.1	2.0	1.7		
第17図	112	S D01 18地区	木製品	曲物底板	12.5	10.5	1.0	7/8 1/6 破片 1/3 1/4 1/2 1/2 1/2 1/6 1/2 3/5 1/3 完形 9/10 完形 4/5 完形 完形	
	113	S D01 18地区	木製品	曲物底板	16.9	2.2	0.6		
	114	S D01 18地区	木製品	曲物底板	5.2	3.3	0.5		
	115	S D01 18地区	木製品	曲物底板	15.0	4.5	0.9		
	116	S D01 18地区	木製品	曲物底板	15.9	2.8	0.8		
	117	S D01 18地区	木製品	曲物底板	13.7	5.8	0.8		
	118	S D01 18地区	木製品	曲物底板	15.3	7.8	0.8		
	119	S D01 18地区	木製品	曲物底板	16.5	2.1	0.4		
	120	S D01 18地区	木製品	曲物底板	16.7	6.9	1.0		
	121	S D01 18地区	木製品	曲物底板	16.8	5.1	0.7		
	122	S D01 18地区	木製品	曲物底板	15.0	5.0	0.6		
	123	S D01 18地区	木製品	曲物底板	15.6	16.0	1.0		
	124	S D01 18地区	木製品	曲物底板	14.0	15.8	0.8		
	125	S D01 18地区	木製品	曲物底板	15.9	16.1	0.7		
	126	S D01 18地区	木製品	曲物底板	15.9	11.5	0.8		
	127	S D01 18地区	木製品	曲物底板	16.4	16.2	0.8		
	128	S D01 18地区	木製品	曲物底板	15.3	15.0	0.6		
								転用 木釘2・貫通穴6箇所	
								木釘3・木釘穴2箇所	
								完形	
第18図	129	S D01 18地区	木製品	木札	10.2	2.0	0.4	完形 完形 完形 完形 完形 8 C後半 8 C後半 8 C後半 8 C後半 8 C後半 脚? 脚? 脚? 脚? 貫通穴1箇所 貫通穴9箇所 脚? タガ一部炭化	
	130	S D01 18地区	木製品	斎串	14.6	12.5	0.2		
	131	S D01 18地区	木製品	斎串	15.5	1.9	0.4		
	132	S D01 18地区	木製品	斎串	16.4	1.9	0.6		
	133	S D01 18地区	木製品	斎串	17.3	1.6	0.3		
	134	S D01 18地区	木製品	斎串	19.0	2.0	0.4		
	135	S D01 18地区	木製品	楔状製品	8.3	1.0	1.1		
	136	S D01 18地区	木製品	楔状製品	8.0	1.0	0.7		
	137	S D01 18地区	木製品	組物部材	10.4	1.9	1.1		
	138	S D01 18地区	木製品	組物部材	17.9	6.2	3.4		
	139	S D01 18地区	木製品	組物部材	17.0	5.3	1.9		
	140	S D01 18地区	木製品	組物部材	12.3	5.6	5.9		
	141	S D01 18地区	木製品	組物部材	45.8	10.2	1.2		
	142	S D01 18地区	木製品	組物部材	35.6	9.5	0.8		
	143	S D01 18地区	木製品	組物部材	31.3	12.2	1.7		
第19図	144	S D01 18地区	木製品	組物部材	11.2	2.6	0.8	完形 8 C後半 8 C後半	
	145	S D01 18地区	木製品	組物部材	12.3	2.9	0.7		
	146	S D01 18地区	木製品	組物部材	14.2	2.6	0.4		
	147	S D01 18地区	木製品	組物部材	27.5	3.5	0.5		
	148	S D01 18地区	木製品	組物部材	23.5	5.4	0.6		
	149	S D01 18地区	木製品	組物部材	33.3	2.3	1.5		
	150	S D01 18地区	木製品	組物部材	7.3	3.1	0.6		
	151	S D01 18地区	木製品	組物部材	18.8	4.0	1.5		
	152	S D01 18地区	木製品	組物部材	19.2	3.0	0.6		
	153	S D01 18地区	木製品	組物部材	12.8	10.8	1.9		
	154	S D01 18地区	木製品	組物部材	31.5	5.3	0.6		
	155	S D01 18地区	木製品	組物部材	36.1	4.0	1.8		
	156	S D01 18地区	木製品	組物部材	46.3	2.3	0.5		
	157	S D01 18地区	木製品	組物部材		3.2	0.7		
	158	S D01 18地区	木製品	組物部材	63.7	3.2	1.2		
								一部炭化 貫通穴2箇所	

口：口縁部 底：底部 体：体部 壊：壊部 脚：脚部

第11表 出土遺物観察表

図版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	残存量
第19図	159	S D01 18地区	木製品	組物部材	64.4	8.8	1.8		
第20図	160	S D01 18地区	木製品	不明部材	15.9	2.1	3.1	角材	
	161	S D01 18地区	木製品	不明部材	15.6	3.3	0.7	板材	
	162	S D01 18地区	木製品	不明部材	5.2	3.0	2.3	角材	
	163	S D01 18地区	木製品	不明部材	31.8	2.0	1.4		
	164	S D01 18地区	木製品	不明部材	38.2	1.7	2.3		
	165	S D01 18地区	木製品	不明部材	63.9	4.9	0.5	板材	
	166	S D01 18地区	木製品	不明部材	40.0	9.2	5.2	角材	
	167	S D01 18地区	木製品	不明部材	54.9	4.7	2.6		
	168	S D01 18地区	木製品	不明部材	56.8	1.8	1.0		
	169	S D01 18地区	木製品	不明部材	17.4	6.1	4.9	一部炭化 角材	
第21図	170	S D01 18地区	木製品	不明部材	21.1	7.4	2.2	板材	
	171	S D01 18地区	木製品	不明部材	36.2	2.7	1.5		
	172	S D01 18地区	木製品	不明部材	35.5	7.0	1.3	板材	
	173	S D01 18地区	木製品	不明部材	12.8	1.1	0.2	貫通穴2箇所	
	174	S D01 18地区	木製品	不明部材		2.6	1.2	一部炭化	
	175	S D01 18地区	木製品	不明部材	15.3	4.0	1.8	板材	
	176	S D01 18地区	木製品	不明部材	10.3	5.5	1.1	一部炭化 板材	
	177	S D01 18地区	木製品	不明部材	12.0	5.4	5.0	角材	
	178	S D01 18地区	木製品	不明部材	33.9	6.7	1.3	板材	
	179	S D01 18地区	木製品	不明部材	37.1	3.3	1.8		
第22図	180	S D01 18地区	木製品	不明部材	8.3	5.3	0.8	板材	
	181	S D01 18地区	木製品	不明部材	36.8	2.5	2.4		
	182	S D01 18地区	木製品	不明部材	38.3	8.0	1.2	板材	
	183	S D01 18地区	木製品	不明部材	49.7	21.3	3.1	板材	
	184	S D01 18地区	木製品	不明部材	35.6	18.5	1.8	一部炭化 板材 穴7箇所	
	185	S D01 18地区	木製品	不明部材	85.9	6.0	2.0	板材	
	186	S D01 18地区	木製品	不明部材	6.9	1.1	1.0		
	187	S D01 18地区	木製品	不明部材	20.7	0.9	1.1		
	188	S D01 18地区	木製品	不明部材	13.9	3.9	4.0		
	189	S D01 18地区	木製品	不明部材	19.1	2.2	0.6	板材	
第23図	190	S D01 18地区	木製品	不明部材	19.3	2.1	2.8		
	191	S D01 18地区	木製品	不明部材	22.2	2.2	1.3		
	192	S D01 18地区	木製品	不明部材	24.4	2.2	1.5		
	193	S D01 18地区	木製品	不明部材	26.0	1.5	1.2		
	194	S D01 18地区	木製品	不明部材	24.5	2.7	1.9	タケ 比熱	
	195	S D01 19地区	石製品						
	196	S D01 19地区	石製品	打製石斧					
	197	S D01 19地区	土師器	甕	12.6			内面煤付着 古墳前期	口 1/8
	198	S D01 19地区	土師器	甕	14.8			古墳前期	口 1/8
	199	S D01 19地区	土師器	甕	15.9			古墳前期	口 1/12
第24図	200	S D01 19地区	土師器	甕	16.8			古墳前期	口 1/14
	201	S D01 19地区	土師器	甕	17.0			古墳前期	口 1/8
	202	S D01 19地区	土師器	甕	13.6			古墳前期	口 1/4
	203	S D01 19地区	土師器	甕	13.8			古墳前期	口 1/4
	204	S D01 19地区	土師器	甕	14.6			古墳前期	口 1/8
	205	S D01 19地区	土師器	甕	16.7			古墳前期	口 1/12
	206	S D01 19地区	土師器	甕	18.2			古墳前期	口 1/12
	207	S D01 19地区	土師器	甕	19.6			古墳前期	口 1/8
	208	S D01 19地区	土師器	壺	19.7		7.5	古墳前期	口 1/8
	209	S D01 19地区	土師器	器台				古墳前期	底 1/4
	210	S D01 19地区	土師器	高坏				古墳前期	
	211	S D01 19地区	土師器					古墳前期	

口：口縁部 底：底部 体：体部 壁：壁部 脚：脚部

第12表 出土遺物観察表

図版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存量
第22図	212	S D01 19地区	土師器	高坏(器台)	26.7		脚径 9.8	古墳前期	口 1/14
	213	S D01 19地区	土師器	高坏(器台)			脚径 11.2	古墳前期	
	214	S D01 19地区	土師器	高坏(器台)			脚径 10.9	古墳前期	
	215	S D01 19地区	土師器	高坏(器台)				外面煤付着	
	216	S D01 19地区	土師器	甕					
第23図	217	S D01 19地区	土師器	塊A	12.2	4.0	5.6	内外面黒色処理 糸切り痕	完形
	218	S D01 19地区	土師器	塊A	15.0	5.3	5.8	内面煤付着	口 1/4 底 完存
	219	S D01 19地区	土師器	塊A	12.1	4.0	6.3	糸切り痕	完形
	220	S D01 19地区	土師器	塊A	12.8				口 1/8
	221	S D01 19地区	土師器	塊A	12.3	4.2	5.1	内外面赤彩 糸切り痕	完形
	222	S D01 19地区	土師器	塊A	12.4	4.2	6.3	外面煤付着 糸切り痕	ほぼ完形
	223	S D01 19地区	土師器	塊A	12.5	4.8	5.5	内外面赤彩 糸切り痕	口 1/8 底 完存
	224	S D01 19地区	土師器	塊A	13.0	4.0	6.1	糸切り痕	1/2
	225	S D01 19地区	土師器	塊A	12.6	4.2	5.7	内外面赤彩 内面墨痕	口 1/2 底 完存
	226	S D01 19地区	土師器	塊A	12.9	4.4	5.3	糸切り痕	完形
	227	S D01 19地区	土師器	塊A	13.0	4.2	5.3	内外面赤彩 糸切り痕	完形
	228	S D01 19地区	土師器	塊A	13.4	4.7	5.5	内外面赤彩 外面煤付着	口 3/4 底 完存
	229	S D01 19地区	土師器	塊A	13.2	4.4	5.0	内外面赤彩 糸切り痕	ほぼ完形
	230	S D01 19地区	土師器	塊A	14.8	5.2	5.6	内外面赤彩 糸切り痕	口 1/3 底 完存
	231	S D01 19地区	土師器	塊A	15.5	4.9	5.5	内外面赤彩 糸切り痕	口 3/4 底 完存
	232	S D01 19地区	土師器	塊A	16.5	6.0	6.4	内外面赤彩 糸切り痕	口 1/4 底 2/3
	233	S D01 19地区	須恵器	坏蓋	16.2			内面自然釉付着	口 1/8
	234	S D01 19地区	須恵器	坏蓋	17.9	3.7			口 1/5
	235	S D01 19地区	須恵器	坏A	10.4	3.3		ヘラ切り痕	ほぼ完形
	236	S D01 19地区	須恵器	坏A	10.8				口 1/4
	237	S D01 19地区	須恵器	坏A	10.9	3.5		ヘラ切り痕	完形
	238	S D01 19地区	須恵器	坏A	11.2	3.9		ヘラ切り痕	口 3/4 底 4/5
	239	S D01 19地区	須恵器	坏A	11.8	3.1		ヘラ切り痕	1/2
	240	S D01 19地区	須恵器	坏A	11.6	3.5		ヘラ切り痕	口 2/3 底 5/6
	241	S D01 19地区	須恵器	坏A	11.9	3.5		ヘラ切り痕	完形
	242	S D01 19地区	須恵器	坏B	11.5	3.7			2/3
	243	S D01 19地区	須恵器	坏B			8.8		破片
	244	S D01 19地区	須恵器	坏B			9.9		底 1/4
	245	S D01 19地区	須恵器	坏B	15.8	5.4	9.2	沈線 2 条	1/3
	246	S D01 19地区	須恵器	坏	16.1			沈線 1 条	破片
	247	S D01 19地区	須恵器	長頸壺	11.0			内面自然釉付着	口 1/4
	248	S D01 19地区	須恵器	長頸壺					
	249	S D01 19地区	鉄滓						
	250	S D01 19地区	鉄滓						
第24図					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	墨書で魚(目・うろこ) スギ	
					11.1	1.5	0.3		
					11.4	1.4	0.3		
					12.2	1.5	0.4		
					14.1	1.7	0.4		
					9.4	1.5	0.3		
					10.0	1.7	0.3		
					36.0	4.6	3.0		
				口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)			
				17.8	1.7				
				20.7	1.9				
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
				22.8	10.6	7.0	瓢箪		
				14.0	2.5	0.3	板材		

口：口縁部 底：底部 体：体部 壁：坏部 脚：脚部

第13表 出土遺物観察表

図版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	残存量
第24図	263	S D01 19地区	木製品	不明部材	42.8	2.2	1.5		
	264	S D01 19地区	木製品	不明部材	40.0	2.6	2.0		
	265	S D01 19地区	木製品	柄杓の柄	36.4	1.6	1.2		
	266	S D01 19地区	木製品	不明部材	11.7	1.3	1.4		
	267	S D01 19地区	木製品	曲物底板	12.0	1.6	0.8		1/6
	268	S D01 19地区	木製品	曲物底板	15.6	4.5	0.6		1/3
	269	S D01 19地区	木製品	曲物底板	15.9	9.1	0.8		3/5
	270	S D01 19地区	木製品	編み錘	12.0	4.4	3.2	心持ち材	1/2
第25図	271	S D01 20地区	土師器	壺	23.4			古墳前期	口 1/6
	272	S D01 20地区	土師器	甕	11.2				口 1/6
	273	S D01 20地区	土師器	甕	12.2			内外面煤付着	口 1/3
	274	S D01 20地区	土師器	塊A	11.6	4.4	4.6	内外面赤彩 糸切り痕	口 5/6 底 完存
	275	S D01 20地区	土師器	塊A	11.6	4.6	5.4	糸切り痕	口 5/6 底 完存
	276	S D01 20地区	土師器	塊A	11.9	4.1	5.9	内外面赤彩 糸切り痕	ほぼ完形
	277	S D01 20地区	土師器	塊A	12.0	3.8	4.3	内外面赤彩 糸切り痕	ほぼ完形
	278	S D01 20地区	土師器	塊A	12.0	4.4	5.5	内外面赤彩 外面煤付着	口 3/8 底 完存
	279	S D01 20地区	土師器	塊A	12.1	4.0	4.9	糸切り痕	口 5/8 底 完存
	280	S D01 20地区	土師器	塊A	12.1	3.6	5.3	糸切り痕	口 1/5 底 1/3
	281	S D01 20地区	土師器	塊A	12.2	4.0	5.2	内外面赤彩 内面煤付着	口 2/3 底 完存
	282	S D01 20地区	土師器	塊A	12.2	4.0	4.8	内外面赤彩 糸切り痕	口 7/8 底 完存
	283	S D01 20地区	土師器	塊A	12.2	4.1	5.3	糸切り後ヘラ切り	口 5/8 底 完存
	284	S D01 20地区	土師器	塊A	12.3	3.7	4.9	糸切り後ヘラ切り	口 1/4 底 完存
	285	S D01 20地区	土師器	塊A	12.3	3.8	4.7	内外面赤彩 ヘラ削り	口 1/3 底 完存
	286	S D01 20地区	土師器	塊A	12.3	4.4	5.3	糸切り痕	口 1/3 底 完存
	287	S D01 20地区	土師器	塊A	12.3	3.6	4.6	外面赤彩 糸切り痕	口 7/8 底 完存
	288	S D01 20地区	土師器	塊A	12.3	3.8	5.6	内外面赤彩 糸切り痕	完形
	289	S D01 20地区	土師器	塊A	12.3	4.0	5.4	内外面赤彩 糸切り痕	ほぼ完形
	290	S D01 20地区	土師器	塊A	12.4	4.1	5.7	糸切り痕	口 3/4 底 完存
	291	S D01 20地区	土師器	塊A	12.4	4.0	5.3	糸切り痕	口 1/2 底 完存
	292	S D01 20地区	土師器	塊A	12.4	3.8	4.5	内面煤付着 糸切り痕	口 1/2 底 完存
	293	S D01 20地区	土師器	塊A	12.5	3.6	5.5	糸切り痕	口 3/4 底 完存
	294	S D01 20地区	土師器	塊A	12.5	4.0	5.8	内外面赤彩 糸切り痕	口 3/5 底 完存
	295	S D01 20地区	土師器	塊A	12.5	3.8	4.6	内外面赤彩 糸切り痕	口 5/8 底 完存
	296	S D01 20地区	土師器	塊A	12.5	3.8	5.8	外面煤付着 糸切り痕	口 3/4 底 完存
	297	S D01 20地区	土師器	塊A	12.5	4.3	4.5	糸切り痕	口 3/4 底 完存
	298	S D01 20地区	土師器	塊A	12.5	4.1	4.7	内外面赤彩 内面煤付着	完形
	299	S D01 20地区	土師器	塊A	12.5	4.0	5.5	内外面赤彩 糸切り痕	口 1/2 底 完存
	300	S D01 20地区	土師器	塊A	12.5	4.0	4.4	内外面赤彩 糸切り痕	ほぼ完形
第26図	301	S D01 20地区	土師器	塊A	12.6	4.0	5.5	内外面赤彩 糸切り痕	口 3/4 底 完存
	302	S D01 20地区	土師器	塊A	12.6	3.7	6.2	内外面煤付着 糸切り痕	完形
	303	S D01 20地区	土師器	塊A	12.6	3.9	5.4	糸切り痕	口 4/5 底 5/6
	304	S D01 20地区	土師器	塊A	12.6	4.0	4.9	内外面赤彩 糸切り痕	ほぼ完形
	305	S D01 20地区	土師器	塊A	12.6	4.7	4.9	内面墨痕 糸切り痕	ほぼ完形
	306	S D01 20地区	土師器	塊A	12.6	3.9	5.7	口端部内外面煤付着	口 4/5 底 完存
	307	S D01 20地区	土師器	塊A	12.6	3.8	5.4		口 1/3 底 完存
	308	S D01 20地区	土師器	塊A	12.6	4.5	5.0	外面墨痕 糸切り痕	口 3/4 底 完存
	309	S D01 20地区	土師器	塊A	12.6	4.3	6.1	内外面煤付着 糸切り痕	口 3/4 底 完存
	310	S D01 20地区	土師器	塊A	12.7	4.2	4.8	糸切り痕	口 5/8 底 完存
	311	S D01 20地区	土師器	塊A	12.7	3.6	5.8	糸切り痕	口 7/8 底 完存
	312	S D01 20地区	土師器	塊A	12.7	3.7	5.0	内外面煤付着 糸切り痕	ほぼ完形
	313	S D01 20地区	土師器	塊A	12.7	4.0	5.6	内外面赤彩 糸切り痕	口 3/8 底 完存
	314	S D01 20地区	土師器	塊A	12.7	4.3	5.5	糸切り痕	口 7/8 底 完存
	315	S D01 20地区	土師器	塊A	12.7	4.3	5.1	内外面赤彩 内外面煤付着	口 5/8 底 完存

口：口縁部 底：底部 体：体部 壊：壊部 脚：脚部

第14表 出土遺物観察表

図版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存量
第26図	316	S D01 20地区	土師器	塊A	12.7	3.9	4.1	糸切り痕	ほぼ完形
	317	S D01 20地区	土師器	塊A	12.7	3.7	4.7	糸切り痕	完形
	318	S D01 20地区	土師器	塊A	12.7	3.8	5.7	糸切り痕	口 1/2 底 完存
	319	S D01 20地区	土師器	塊A	12.7	3.8	4.6	内外面赤彩 内外面煤付着	完形
	320	S D01 20地区	土師器	塊A	12.8	4.9	5.8	糸切り痕	口 1/3 底 完存
	321	S D01 20地区	土師器	塊A	12.8	3.5	4.6	糸切り痕	口 2/5 底 完存
	322	S D01 20地区	土師器	塊A	12.8	4.2	4.8	糸切り痕	口 1/5 底 完存
	323	S D01 20地区	土師器	塊A	12.8	4.3	4.4	内面赤彩 糸切り痕	ほぼ完形
	324	S D01 20地区	土師器	塊A	12.9	3.7	5.5	内面赤彩 糸切り痕	口 3/8 底 完存
	325	S D01 20地区	土師器	塊A	12.9	4.4	5.9	糸切り痕	口 1/2 底 完存
	326	S D01 20地区	土師器	塊A	12.9	4.3	4.4	糸切り痕	ほぼ完形
	327	S D01 20地区	土師器	塊A	12.9	3.7	5.5	糸切り痕	口 1/2 底 完存
	328	S D01 20地区	土師器	塊A	12.9	4.4	5.7	内外面煤付着	口 3/5 底 完存
	329	S D01 20地区	土師器	塊A	13.0	4.0	4.7	内外面赤彩 内面煤付着	完形
	330	S D01 20地区	土師器	塊A	13.0	4.3	5.3	糸切り痕	ほぼ完形
第27図	331	S D01 20地区	土師器	塊A	13.0	4.6	4.6	内外面赤彩 糸切り痕	口 3/4 底 完存
	332	S D01 20地区	土師器	塊A	13.2	3.6	4.9	内外面赤彩 糸切り痕	口 1/2 底 完存
	333	S D01 20地区	土師器	塊A	13.3	4.3	5.1	内外面煤付着 糸切り痕	口 3/4 底 完存
	334	S D01 20地区	土師器	塊A	13.4	3.6	5.8	糸切り痕	口 1/16 底 完存
	335	S D01 20地区	土師器	塊A	13.4	4.1	6.7	外面赤彩 糸切り痕	口 3/4 底 完存
	336	S D01 20地区	土師器	塊A	13.5				口 1/16
	337	S D01 20地区	土師器	塊A	14.2	4.9	5.8	口端部内外面煤付着	口 7/8 底 ほぼ完存
	338	S D01 20地区	土師器	塊A	14.4	4.9	5.7	糸切り痕	口 7/8 底 完存
	339	S D01 20地区	土師器	塊A	14.4	5.8	5.7	外面煤付着 糸切り痕	口 1/2 底 完存
	340	S D01 20地区	土師器	塊A	14.5	5.1	6.1	糸切り痕	口 3/4 底 完存
	341	S D01 20地区	土師器	塊A	14.5	4.8	6.5	内外面赤彩 糸切り痕	ほぼ完形
	342	S D01 20地区	土師器	塊A	14.9	4.9	6.3	内外面赤彩 糸切り痕	口 3/4 底 完存
	343	S D01 20地区	土師器	塊A	14.9	5.7	6.0	内外面赤彩 糸切り痕	ほぼ完形
	344	S D01 20地区	土師器	塊A	15.2	5.7	6.8		口 2/5 底 完存
	345	S D01 20地区	土師器	塊A	15.2	5.0	5.9	内底面墨痕 糸切り痕	口 7/8 底 完存
	346	S D01 20地区	土師器	塊A	15.4	4.7	6.0	糸切り痕	口 1/2 底 完存
	347	S D01 20地区	土師器	塊A	15.4	5.1	6.0	外面煤付着 糸切り痕	口 2/3 底 完存
	348	S D01 20地区	土師器	塊A	15.5	5.2	6.8	糸切り痕	口 3/4 底 完存
	349	S D01 20地区	土師器	塊A	15.7	5.6	6.0	糸切り痕	口 4/5 底 完存
	350	S D01 20地区	土師器	塊A	15.8	4.8	5.8	糸切り痕	口 3/4 底 完存
	351	S D01 20地区	土師器	塊A	17.8	6.2	7.1	内面煤付着 糸切り痕	口 1/8 底 3/4
	352	S D01 20地区	土師器	塊A	15.5	5.4	6.4	内面黒色処理 内面ミガキ	口 7/8 底 完存
	353	S D01 20地区	土師器	塊A	16.4	5.7	6.7	内面黒色処理 内面ミガキ	口 5/8 底 完存
	354	S D01 20地区	土師器	皿A	12.4	2.3	5.2	糸切り痕	ほぼ完形
	355	S D01 20地区	土師器	皿B	12.4	2.9	7.1	内外面赤彩	ほぼ完形
第28図	356	S D01 20地区	須恵器	坏A	10.5	2.9		ヘラ切り痕	完形
	357	S D01 20地区	須恵器	坏A	11.0	3.6		ヘラ切り痕	口 1/10 底 1/2
	358	S D01 20地区	須恵器	坏A	11.4	3.5		ヘラ切り痕	口 5/8 底 3/4
	359	S D01 20地区	須恵器	坏A	11.5	3.2		内面タール・外面煤付着	ほぼ完形
	360	S D01 20地区	須恵器	坏A	11.6	3.6		内外面煤付着 ヘラ切り痕	口 3/8 底 完存
	361	S D01 20地区	須恵器	坏A	11.6	3.6		ヘラ切り痕	口 5/8 底 完存
	362	S D01 20地区	須恵器	坏A	11.7	3.4		内面タール付着 ヘラ切り痕	口 3/5 底 ほぼ完存
	363	S D01 20地区	須恵器	坏A	11.8	3.2		ヘラ切り痕	口 1/3 底 1/2
	364	S D01 20地区	須恵器	坏A	11.9	3.5		ヘラ切り痕	5/8
	365	S D01 20地区	須恵器	坏A	12.3	3.6		ヘラ切り痕	完形
	366	S D01 20地区	須恵器	坏B	10.2	4.4	6.3		口 3/8 底 2/5
	367	S D01 20地区	須恵器	坏B	10.5	4.7	6.5	ヘラ切り痕	口 3/4 底 完存
	368	S D01 20地区	須恵器	坏B	10.8	4.4	6.9	底外面墨痕	口 5/6 底 ほぼ完存
	369	S D01 20地区	須恵器	坏B	11.1	4.5	7.1	ヘラ切り痕	完形

口：口縁部 底：底部 体：体部 坏：坏部 脚：脚部

第15表 出土遺物観察表

図版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存量
第28図	370	S D01 20地区	須恵器	壺B	11.2	4.1	7.3	底外面墨痕 ヘラ切り痕	口 3/5 底 完存
	371	S D01 20地区	須恵器	壺B	11.3	4.3	7.3	底外面ヘラ記号	口 3/8 底 完存
	372	S D01 20地区	須恵器	壺B	12.8	5.8	6.4	底外面墨痕 ヘラ切り痕	完形
	373	S D01 20地区	須恵器	壺B	16.3	7.6	8.0	底外面ヘラ記号	完形
	374	S D01 20地区	須恵器	壺蓋				内面墨痕 糸切り痕	5/8
	375	S D01 20地区	須恵器	壺蓋	15.3	3.1		内面墨痕	完形
	376	S D01 20地区	須恵器	壺蓋	11.6			内面墨痕	1/4
	377	S D01 20地区	須恵器	壺蓋	11.8	3.2		内外面煤付着	ほぼ完形
	378	S D01 20地区	須恵器	瓶			12.0		体 1/3 底 1/6
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第29図	379	S D01 20地区	木製品	不明部材	17.0	2.4	0.8	板材	
	380	S D01 20地区	木製品	人形	25.7	2.5	0.5	正面全身 8C後半 スギ	
	381	S D01 20地区	木製品	不明部材	27.7	1.8	1.3		
	382	S D01 20地区	木製品	不明部材	31.3	1.8	1.3		
	383	S D01 20地区	木製品	不明部材	40.5	1.3	1.2		
	384	S D01 20地区	木製品	不明部材	54.6	1.6	1.5		
	385	S D01 20地区	木製品	不明部材	45.2	11.0	1.4	板材	
	386	S D01 20地区	木製品	曲物底板	16.0	7.5	0.7		1/2
	387	S D01 20地区	木製品	曲物底板	20.4	8.9	1.0		1/2
			口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)				
	388	S K01 22地区	土師器	甕	13.4				口 1/8
	389	S K01 22地区	土師器		12.3				口 1/8
	390	S D02 22地区	唐津	碗			3.9		底 1/4
	391	S D03 22地区						脚端部 1/8	
	392	S D03 22地区	伊万里	鉢	21.5				口 1/16
	393	S D03 22地区	唐津	鉢	25.4			内外面焼継痕	破片

口：口縁部 底：底部 体：体部 壺：壺部 脚：脚部

## 第3章 串田地区試掘調査

### 第1節 調査に至る経緯

平成16年4月、大門町教育委員会は、富山県高岡農地林務事務所から、串田地区における県営ほ場整備事業に係る協議を受けた。事業は平成17年から21年度までの5か年計画で、農道・用排水路等の撤去・新設および水田の切土・盛土を含み、標準2haあまりの大区画ほ場を整備するものである。

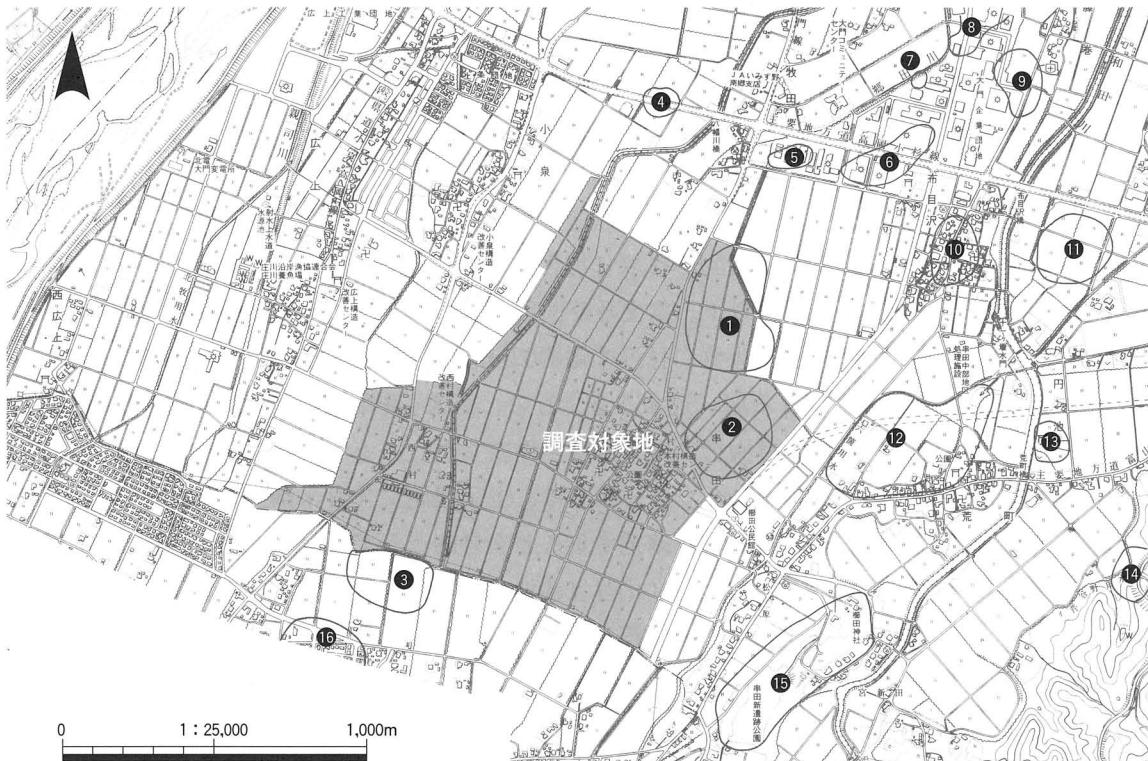
平成16年の時点で、事業計画地内では、北東の一部に周知の埋蔵文化財包蔵地である布目沢II遺跡、本村遺跡の所在が確認されていたが、大部分は埋蔵文化財未調査区域であった。加えて、串田地区南部の高岡市下麻生地内には常国北遺跡が隣接しており、町教育委員会は事業計画地全域を対象とした埋蔵文化財包蔵地の範囲確認が必要であると判断した。

串田地区では、過去の耕地整理時に切土や他所からの客土等による表土の移動が行なわれており、踏査による分布調査だけでは地下の埋蔵文化財の状況を把握することが難しいと考えられた。また、約81haに及ぶ事業計画地の全域を対象とする試掘調査の実施についても、経費的・時間的に困難であった。

県教育委員会をはじめ関係機関との間で、調査方法及び事業計画との調整に関する協議を重ねた結果、まず小規模な掘削を併用した分布調査を実施し、地山や堆積土壤の状況を併せて確認した上で、試掘調査対象範囲を決定することとした。

同年10月の協議において、平成17年度に射水市教育委員会が主体となり、上記の方法で分布調査を実施し、調査結果により翌年以降の試掘調査へ移行することで調整が図られた。

平成17年11月1日の市町村合併の後、富山県高岡農地林務事務所及び地元関係者と、射水市教育委員会文化課との間で、これまでの協議内容について確認し、11月16日より一連の現地調査に着手した。



第34図 調査対象地および周辺の遺跡 (1/25,000)

- ①布目沢II遺跡 ②本村遺跡 ③常国北遺跡 ④小泉遺跡 ⑤牧田遺跡 ⑥布目沢遺跡 ⑦堀内遺跡 ⑧布目沢北遺跡  
⑨布目沢東遺跡 ⑩布目沢苗島遺跡 ⑪市井泓田遺跡 ⑫荒町遺跡 ⑬円池遺跡 ⑭生源寺南遺跡 ⑮串田新遺跡 ⑯常国遺跡

調査年度	調査方法	調査期間	調査担当者	調査対象面積	発掘面積
平成17年	分布調査	H17.11.16～ 12.8（8日間）	射水市教育委員会 文化課 主査 原田義範 主任 田中 明 学芸員 金三津英則	810,000m <sup>2</sup>	241m <sup>2</sup>
平成18年	試掘調査	H18.10.23～ 11.8（10日間）	射水市教育委員会 文化課 主査 原田義範 主任 金三津英則	164,520m <sup>2</sup>	3,045m <sup>2</sup>
平成19年	試掘調査	H19.4.17	射水市教育委員会 文化課 主任 尾野寺克実 〃 金三津英則	5,400m <sup>2</sup>	91m <sup>2</sup>
	試掘調査	H19.9.26～ 10.9（8日間）	射水市教育委員会 文化課 主任 尾野寺克実 〃 金三津英則	92,940m <sup>2</sup>	1,329m <sup>2</sup>

第16表 分布・試掘調査年次表

## 第2節 分布調査

### 第1項 調査の経過

前節に記したとおり、分布調査の実施に関する協議・調整は、ほ場整備事業関係者と旧大門町教育委員会との間で進められてきたが、平成17年11月1日の市町村合併を経て、調査事務は射水市教育委員会文化課が引き継ぐこととなった。11月7日に富山県高岡農地林務事務所との間で調査の実施方法や今後の取り扱いについての確認のため再度協議の場を設け、同11日に現地にて地元地権者等との打合せを行った後、現地調査に着手した。

現地調査は、11月16日から12月7日にかけて、事業計画地全域の約810,000m<sup>2</sup>を対象として実施した。発掘したトレンチは計180か所で、発掘面積は約241m<sup>2</sup>である。

### 第2項 調査の方法

分布調査は、地表面の踏査による遺物の採取に加え、山積0.13m<sup>3</sup>のバックホウを用いた小規模な掘削を併用して行なった。トレンチ（以下、本文及び図中では「T」と略す）は、現況の水田3～5枚に1か所の割合で設定し、耕作機乗り入れ口付近で幅約0.5m、長さ2.0～3.7m規模の掘削を行なった。掘削の深度は、遺構面と考えられる層に達するまでを行い、遺構・遺物の有無及び土壤の堆積状況を確認のうえ、土層断面の実測及び写真撮影により記録を作成した。

調査対象範囲は第35図のとおりである。分布調査は、主に埋蔵文化財未調査地における地山及び堆積土の状況を確認し、試掘調査対象範囲を確定することを目的として行なったが、試掘調査へ移行するための比較資料を得るため、周知の埋蔵文化財包蔵地である布目沢Ⅱ遺跡・本村遺跡範囲内についてもトレンチを設け、遺構検出面の状況を確認した。なお、28～33T東側に隣接する南北の水田一列に関しては、平成9年に実施された町道中田八塚線造成工事に伴う試掘調査により、河川跡・低湿地状地形が広がる状況が確認されているため、調査対象から除外した。

### 第3項 調査の概要（第35図）

**層序** 基本層序は上層から順に、Ⅰ層：現水田耕作土、Ⅱ層：盛土等、Ⅲ層：黒色粘質土、Ⅳ層：にぶい黄色シルト・同砂質土・灰色粘土、Ⅴ層：礫層となる。

Ⅲ層は弥生時代～古代にかけての遺物を包含し、場所・深さによって粘土・シルト・砂質土と土質が異なる。Ⅳ層上面～Ⅴ層は地山と考えられる層であり、これも場所・深さによって粘土・シルト・砂質土と土質が異なる。

#### 遺構・遺物・地山の状況

表面採取遺物はごく僅かであり、34・107・155・171T付近で、須恵器・珠洲等の破片を数点採取した程度である。

トレーニング発掘では、36・37・106Tで遺構を確認した。遺構はいずれもⅣ層上面から掘り込まれていて、狭小な掘削面積のため、遺構の規模・性格等の判断は困難であるが、深い位置で地山を確認したトレーニングについては、遺構内部にトレーニングが位置している箇所も含まれると思われる。

布目沢Ⅱ遺跡・本村遺跡周辺の28・29・31・32・34～51Tでは、地山となるⅣ層は地表から0.25～0.65mの深さに位置する。地山の土質はにぶい黄色のシルト・粘土であり、36・37TではⅣ層を掘り込む遺構を確認し、49TではⅢ層の黒色土から須恵器片が出土している。

これに近い堆積状況を示すのが7・10・14～16・18・20・26・52・54～56・57・58・61～64・69・71～75・78・82・85～90・98～107・118・139・140・157～159・169・174・176・177Tであり、105・106TではⅢ層から弥生土器片が出土している。

1・2・17・21・23・24・27・30・33・59・60・65・66・70・76・83・84・91・93・95～97・108・114・115・119・121～125・128～130・132～135・137・138・141～150・162～165・171・179・180Tでは地山がⅤ層の礫層となる。地表からの深さは0.35～1.2mと高低はあるが、半数のトレーニングで深さ0.8m以下となる。

115・116・120・146・149・151・154・155Tでは、地山の深さが地表下1.05～1.4mと深く落ち込む。これらのトレーニングは南北に連なっており、周辺のトレーニングでは地山が地表下0.8m以下と深く、東側を中心に礫層が分布している。この一帯は現在の八幡川の流路に重複又は並行する場所にあたり、南北に伸びる一連の旧河川流路として捉えることができる。

**小結** 布目沢Ⅱ遺跡・本村遺跡周辺の地山の状況を基準とすれば、地表下0.6m程度の深さで、Ⅳ層のにぶい黄色シルトが安定して堆積する範囲に遺跡の広がりを推定することができる。

Ⅴ層の礫層分布範囲については、地山面が地表下0.8～1.2mと深い場所が多く、旧河川推定地と重複する部分もみられるため、元来遺構が形成されなかつた範囲と考えられる。確認した範囲では、Ⅴ層上面にⅣ層が堆積する状況が窺えるが、Ⅳ層が堆積しない場所が大部分を占める。これは旧河川跡等との関係が想定でき、流水等の影響によってⅣ層が安定して堆積できず、河川等の埋没に伴い黒色土が礫層上に堆積したものと考えられる。Ⅴ層が耕土直下に現れる範囲については、過去の耕地整理等の影響で、Ⅳ層以上が失われたものであろう。

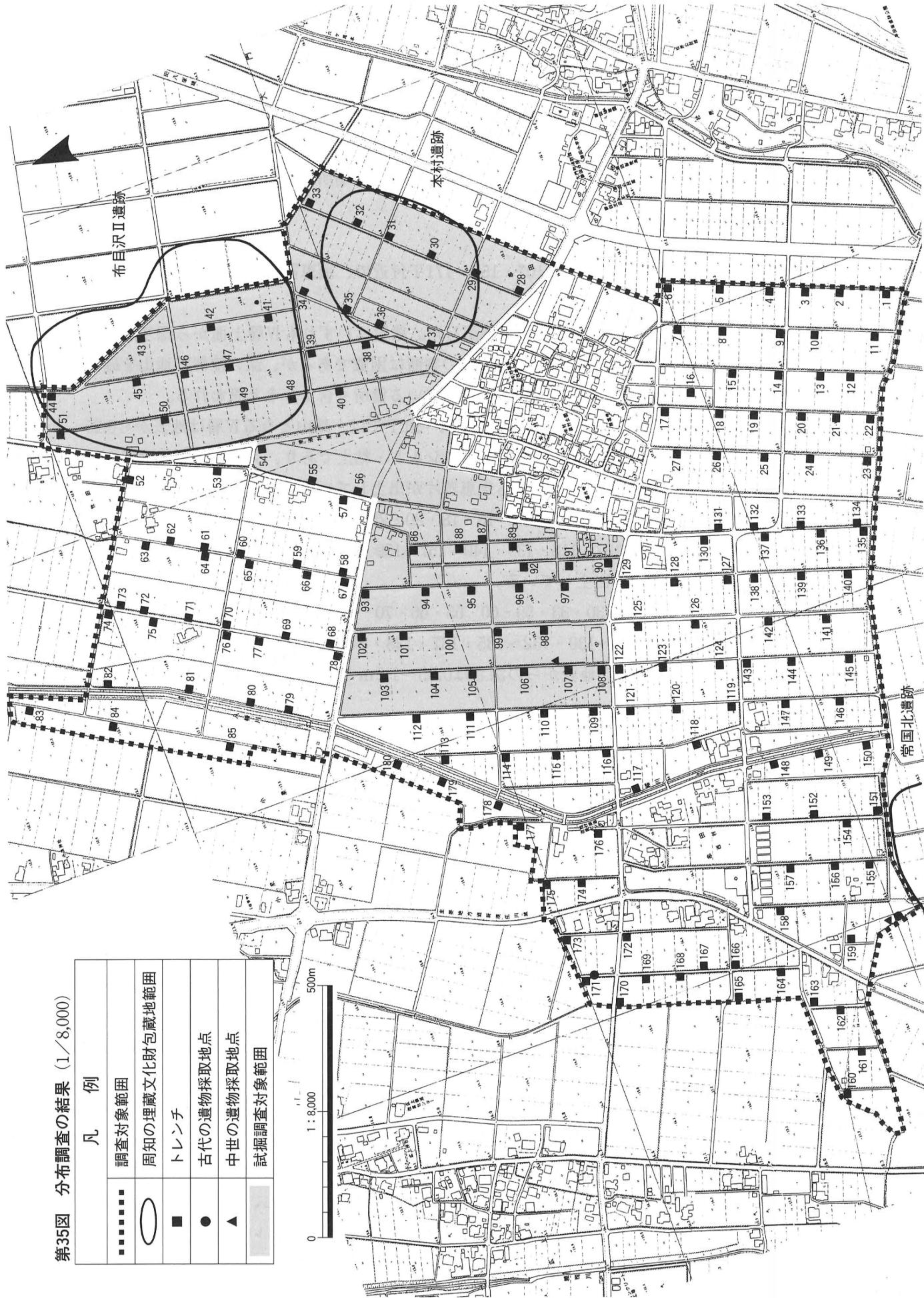
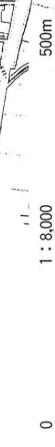
遺物については、布目沢Ⅱ遺跡・本村遺跡周辺を除けば、105・106T周辺部一帯に弥生土器の包含が推定できる。この付近では表面踏査によって珠洲の破片を採取しているが、トレーニング発掘の結果から遺物包含層以下に中世に属する遺物の存在が推定できないため、耕地整理時の混入品と判断した。

以上の調査結果から、①周辺のトレーニングを含めて、Ⅳ層が安定して堆積し、②地表下0.65m程度でⅣ層を確認、③かつ周辺のトレーニングで遺構・遺物の存在が確認されているという3点を満たす場所を埋蔵文化財の所在範囲と推定し、約255,000m<sup>2</sup>を試掘調査対象範囲と定めた。

第35図 分布調査の結果 (1/8,000)

例 凡

調査対象範囲	周知の埋蔵文化財包蔵地範囲	トレンチ	古代の遺物採取地点	中世の遺物採取地点	試掘調査対象範囲
■	○	■	●	▲	



## 第3節 試掘調査

### 第1項 調査の経過

前節の分布調査結果に基づき、今後の調査について関係者との調整を図った結果、試掘調査を平成18・19年度の水稻耕作完了後、2か年に渡って実施することとなった。平成18年度の試掘調査は、164,520m<sup>2</sup>を対象とし、10月23日から11月8日にかけて実施した。発掘したトレンチ（以下、本文及び図中では「T」と略す）は1～94Tの計94か所で、発掘面積は3,045m<sup>2</sup>である。

平成19年4月、ほ場整備事業の計画変更により、約7,500m<sup>2</sup>の水田が新たに事業地に編入された。新規編入地の一部については、工事設計等の関係上早急に試掘調査を実施する必要があったため、地権者の同意を得、4月17日に5,400m<sup>2</sup>を対象として試掘調査を実施した。発掘したトレンチは95～97Tの計3か所で、発掘面積は91m<sup>2</sup>である。平成19年秋の試掘調査は、9月26日から10月9日にかけて、調査未了地の92,940m<sup>2</sup>を対象として実施した。発掘したトレンチは98～168Tの計71か所で、発掘面積は1,329m<sup>2</sup>である。平成19年度の調査をもって現地における試掘調査を全て完了した。

整理作業及び調査報告書の作成は、分布調査完了後の平成17年12月より開始し、年度ごとに調査記録の整理を進め、平成20年3月に作業を完了した。

### 第2項 調査の方法

試掘調査では、山積0.28m<sup>3</sup>のバックホウを使用して、幅約0.8～1.0m、長さ約7～54mの試掘トレンチを任意に設置し、遺構面と考えられる層まで掘り下げた。バックホウによる掘削の後、人力によりトレンチ床面及び壁面の精査を行ない、遺構・遺物の有無を確認するとともに、土層断面の実測及び写真撮影により記録を作成した。

大区画ほ場を整備するという事業の性格上、水田面の平行を確保するための切土・盛土調整が伴うこととなるため、試掘調査では遺構の平面的な広がりに加え、特に遺構面標高値の測定に高い精度が求められた。測量精度の確保及びほ場整備事業計画との整合を図るため、試掘トレンチの平面位置測量及び標高基準面測量は測量業者に委託して実施し、測量原点となる標高点及び基準点には、ほ場整備事業に伴って設置された既設点を使用した。

### 第3項 調査の概要

#### 1. 布目沢Ⅱ遺跡（第36・37・39・40図）

**層序** 基本層序は上層から順に、I層：黒褐色粘質土、II層：黒色粘質土、III層：オリーブ褐色・にぶい黄色シルトとなる。I層は現在の水田耕土である。II層は弥生時代～中世の遺物を包含するが、遺物の出土は散発的である。III層上面は中世の遺構検出面であり、場所・深さによって粘土・シルト・砂質土と土質が異なる。また部分的にII層以下が礫層となる場所がある。

**遺構** 16～21Tで中世の溝・土坑を検出した。遺構の埋土はII層とほぼ同質の黒色粘質土が主体であるが、軟質で腐植物を含む河川跡等の自然地形と考えられるものも含まれている。

**遺物** 弥生土器・打製石斧・中世土師器皿・株洲・砥石・越中瀬戸等が出土しているが、遺構出土遺物は中世期のものに限られる。1は越中瀬戸丸皿である。2～6は株洲。5・6は片口鉢で、両者共に焼成不良気味で粗造の感がある。15世紀後半頃に比定できる。7は打製石斧で基部を欠損する。8は泥岩製とみられる砥石である。

**小結** 布目沢Ⅱ遺跡では、平成9年度に隣接する布目沢地内において試掘調査が実施されており、今回調査した4～13Tの東側隣接地で弥生時代～中世の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査で確認した遺構は、平成9年度調査区から続く一連のものであるが、遺構が比較的まと

まって存在するのは16~21Tの範囲に限られている。東西両側の水田列では河川跡等の自然地形とみられる遺構が中心となり、明確な遺構は確認できていない。16~21Tにおいても、検出した遺構は少數の溝・土坑に限られ、出土遺物もごく僅かである。遺構の存続期間は15世紀後半~16世紀前半頃と考えられ、遺構数からも長期間に渡って継続的に集落が維持された痕跡は見出せない。

遺跡の中心部は、弥生~中世にかけての遺物が出土し、井戸・竪穴住居等が存在する平成9年度調査区に求めることができるが、遺跡全体としては複数の河川間に遺構が存在するという不安定な立地条件にあり、各時代を通して小規模な集落が断続的に営まれたものと考えられる。遺構の分布状況から、既存の遺跡範囲を東側へ縮小した。

## 2. 串田東前田遺跡（旧称本村遺跡）（第36・37・39・40図）

**層序** 基本層序は上層から順に、I層：黒褐色粘質土・暗灰黄色粘質土、II層：黒褐色粘質土・暗オリーブ褐色粘質土、III層：にぶい黄色シルトとなる。

I層は現在の水田耕土及び床土である。II層は、色調により上層の黒褐色粘質土層と下層の暗オリーブ褐色粘質土層とに細分でき、下層部はII・III層間の漸移層となる。現本村集落に近い42~45Tでは、耕地整理時の削平により大部分が消滅している。中世の遺物を包含するが、出土は散発的である。III層上面が中世の遺構検出面となる。

**遺構** 38・42~46・102~106・112・116・119・121・122Tで中世の溝・土坑・井戸を検出した。遺構の埋土はII層の黒褐色粘質土とほぼ同質である。溝は、幅1~3m規模のものが中心となるが、112Tでは幅約0.4m、深さ約0.2mの並行する3条の溝を検出している。井戸は直径1m前後の正円形に近いものを38・42~46・103・116・121・122Tで検出しているが、特に現本村集落付近の38・42~46Tに集中する傾向がある。検出面からの深さは0.6~1m前後で、湧水層まで掘り込まれている。検出した井戸は全て素掘であるが、埋土に木片を含むものも見られる。隣接する布目沢II遺跡の平成9年度調査区では、曲物を埋設した井戸が検出されていることから、本来は木枠や水溜としての曲物を備えたものも含まれていたと考えられる。

**遺物** 中世土師器皿・珠洲・越前・白磁・バンドコ・石臼・石鉢・砥石等が出土している。9は白磁小壺で、削出し高台の下端部まで施釉する。10~12は中世土師器皿で、全て口縁及び底部に煤の付着が認められる。10・11は非ロクロ成形で、両者共に体部が直線的に立ち上がり、口縁端部を摘み上げる。12はロクロ成形で、口縁端部を摘み上げ内湾気味に立ち上がる。緻密な胎土を用い底部をヘラケズリする。10~12全て15世紀後半~16世紀前半頃に比定できる。13~17は珠洲である。16・17は片口鉢で、17は胎土に径2~8程度の礫粒を多量に含む。両者共に焼成不良であり、一見して粗造品と分かる。15世紀後半頃に比定できる。18は凝灰岩製の石鉢。外面の口縁端部付近までノミによる調整痕が明瞭であり、内面には煤が付着している。19は角礫凝灰岩（桑山石）製の石臼である。

**小結** 遺構出土遺物から、本遺跡の存続時期は15世紀後半~16世紀前半頃と考えられる。北東部に隣接する布目沢II遺跡とほぼ同時期に存在することから、両遺跡の関連が窺えるが、布目沢II遺跡と比較して遺構・遺物量共に多く、生活の痕跡を直接的に示すと思われる井戸跡も多数検出している。また、出土遺物も中世土師器皿・珠洲・越前・白磁・石臼・石鉢等多岐に渡っている。

遺構は、現本村集落北東部の東西約250m、南北約130mの範囲に広がっており、東西に位置する河川跡がそれぞれ遺跡の東・西限となる。遺跡中央部にも107T付近で分流して中洲を形成し、102T付近で再び一つの流れに集約する南西~北東方向の流路が存在する。遺跡はこの河川跡によって西部・中央部（中州）・東部に三分されている。この河川跡をもって、布目沢II遺跡との境界とした。

本遺跡は、遺構・出土遺物の面から見れば、一般的な集落遺跡といえる。しかし、隣接する布目沢

II遺跡も含め、15世紀後半～16世紀前半頃と存続時期が限られることや、河川流路間に立地するという点から、ある時期に河川の利用を前提として成立した集落と考えることもできる。遺構の分布状況から旧来の遺跡範囲を西へ移し、小字名から遺跡名称を串田東前田遺跡へと改称した。

### 3. 串田村中遺跡（第38～40図）

**層序** 基本層序は上層から順に、I層：黒褐色粘質土、II層：黒色粘質土・黒褐色粘質土、III層：にぶい黄色シルトとなる。

I層は現在の水田耕土である。II層は、色調により上層の黒色粘質土層と下層の黒褐色粘質土層とに細分でき、下層部はII・III層間の漸移層となる。遺跡南部の68Tでは、耕地整理時の削平によりII層が消滅している。串田東前田遺跡のII層に対応する層であるが、遺物は出土していない。III層上面が中・近世の遺構検出面となる。

**遺構** 溝・土坑・井戸を検出した。遺構の埋土はII層の黒褐色粘質土とほぼ同質である。特に56・57・63Tでは径20～30cm程度の小穴を多く検出した。小穴は、検出面からの深さ10～50cm程度と一定ではないが、比較的まとまりをもって存在し、57Tで井戸に隣接して検出されている点から、何らかの建物に伴う柱穴とみられる。57・64Tでは素掘の井戸を1基ずつ検出している。66・68Tの土坑からは中世土師器皿の細片が出土しており、16～17世紀前半頃にかけての遺構が中心と考えられる。

**遺物** 中世土師器皿・唐津が出土しているが、ごく少量の細片ばかりで、図化できるものは1点のみである。20は唐津の甕口縁部で、肥厚した口縁部を外側へ折り返し、端部に面をもつ。16世紀末～17世紀前半頃に比定できる。

**小結** 今回の試掘調査で新たに確認した遺跡であり、小字名を採用して名称を串田村中遺跡とした。本遺跡は、現本村集落の北端部に位置し、遺跡東方に存在する河川跡を串田東前田遺跡との境界とした。遺跡の存続時期から、中世末～近世にかけての本村集落の一部に位置付けられ、遺跡範囲はさらに南へ広がる可能性がある。

163・164Tの北西には、昭和5年に櫛田神社へ合祀された、「串田村中神明社」又は「串田村中少彦社」が鎮座していた。合祀後は旧社地を畠地として利用し、その後黒色土を50cmあまり掘削して水田にしたという。畠地として利用していた際には、土器等が多く採取できたということから、旧社地は現在の地表より50cmあまり高い場所に位置し、遺構・遺物の大部分は水田への地形改変の際に失われたものと思われる。今回の調査では、遺構は全てIII層上面において検出しているが、削平された黒色土はII層に相当するものと考えられるため、II層中から遺構が掘り込まれていた可能性がある。検出した柱穴は、社やその周辺施設に関連するものであろう。

神明社・少彦社の勧請年代を示す資料は見当たらないが、「櫛田」の地名は古代・中世を通じて存在している。近世の串田村は明暦2年(1656)には2,132石の草高をもつ大村へ成長しているが、中世末期には、串田村中遺跡を含む一帯に、その母体となる集落が形成されていたものと考えられる。

### 4. 串田西前田遺跡（第38・39・41・42図）

**層序** 基本層序は上層から順に、I層：黒褐色粘質土、II層：暗灰黄色粘土、III層：黒色粘質土・黒褐色粘質土、IV層：黄褐色シルトとなる。

I層は現在の水田耕土である。II層は近世以降の遺構検出面と考えられるが、I層の直下に位置する場所が多く、大部分が消滅している。III層は弥生時代の遺物包含層であり、色調により上層の黒色粘質土層と下層の黒褐色粘質土層とに細分できる。上層には弥生時代の遺物を包含し、下層部はIII・IV層間の漸移層となり遺物は含まれない。III層上面が遺構検出面となる。

**遺構** 51・75Tで溝状遺構を1条ずつ確認している。遺構の埋土は黒色シルトであり、上層との関係から弥生時代の遺物包含層堆積以前の流路と考えられるが、遺物は1点も出土しておらず、包含層出土遺物との関連も明確ではない。

**遺物** 全て包含層出土であるが、遺跡範囲全域に渡って弥生土器が出土している。21~23・26~28・32~34・37・44~50は甕。口縁部の形状から、「く」字状に短く外反し口縁端部に面をもつ26・33・34・44・49、口縁下部に段を持ち、やや内側に屈曲して立ち上がる受口状口縁に近い27・48、有段口縁の28・45~47・50の3種に大別できる。口縁部装飾は擬凹線を施すものと無文のものが主であるが、刺突文を施す28も含まれる。また、肩部に刺突文を施す21・22、形骸化した簾状文を施す27等も少数出土している。器面調整には、内外面共にハケ調整を行なうものと、22・23・32・37のように内面或いは外面にケズリ調整を施すものが見られる。29~31・51は壺。30・31・51は口頸部が直立気味に立ち上がり短い筒状を呈する。31は口縁端部下に擬凹線を施す。29は口縁部が外反し、肥厚した口縁端面に擬凹線を施す。25・38・40~43は高坏。25・41は「ハ」字状に広がる裾端部に面をもつ。42は裾部を折り返し端部に刺突文を施す。43は裾端部に無文の突帯を廻らせる。24・36・39は器台。24・36はそれぞれ口縁部と裾部に広い有段部をもち、擬凹線を施す。

時期的には、幅の広い有段口縁に擬凹線を施す甕や、棒状の脚部をもつ大形の高坏が目立つことから弥生時代後期後半に属する土器が中心となるが、形骸化した櫛描文を施す27や口縁端部が先細りする50のように、弥生時代後期前半又は終末期に位置付けられる土器も少量含まれている。

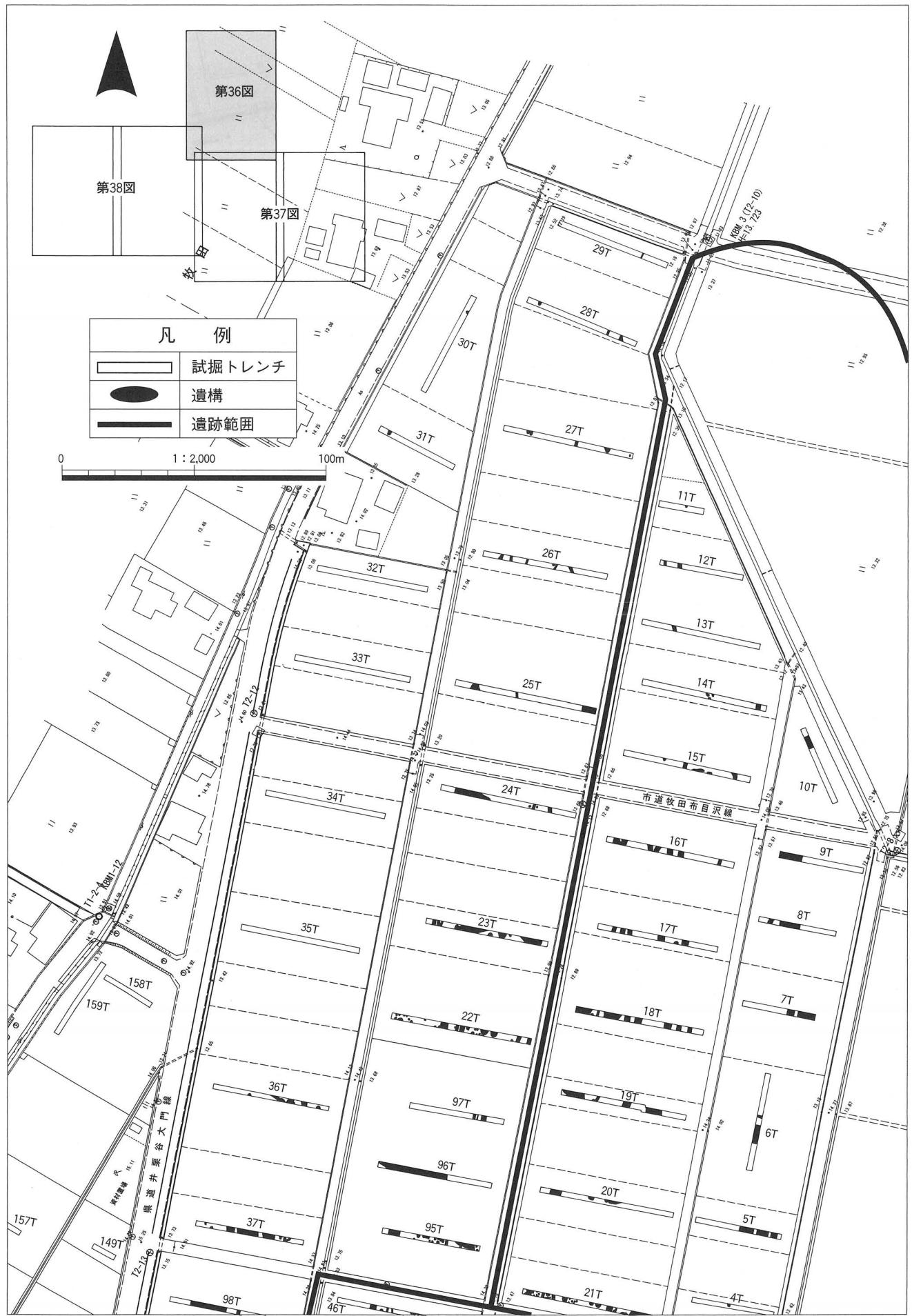
**小結** 今回の試掘調査で新たに確認した遺跡であり、小字名から名称を串田西前田遺跡とした。本遺跡の特徴として、遺跡範囲の全域に渡って弥生時代後期の土器が散布するが、全て遺物包含層であるⅢ層からの出土であり、遺構の形成が認められないという点が挙げられる。

弥生土器は、上下に二分されるⅢ層のうち、上層部にあたる黒色粘質土層上面から10cm程度の深さで面的に散布している。1個体分の土器片がまとまって出土する地点もあるが、特定の場所に集中するという傾向は認められない。なお、黒色粘質土は、遺物出土レベルからさらに20~40cm堆積し、Ⅲ層下層部の漸移層を経て地山のⅣ層に至るが、その間で遺物は全く出土していない。

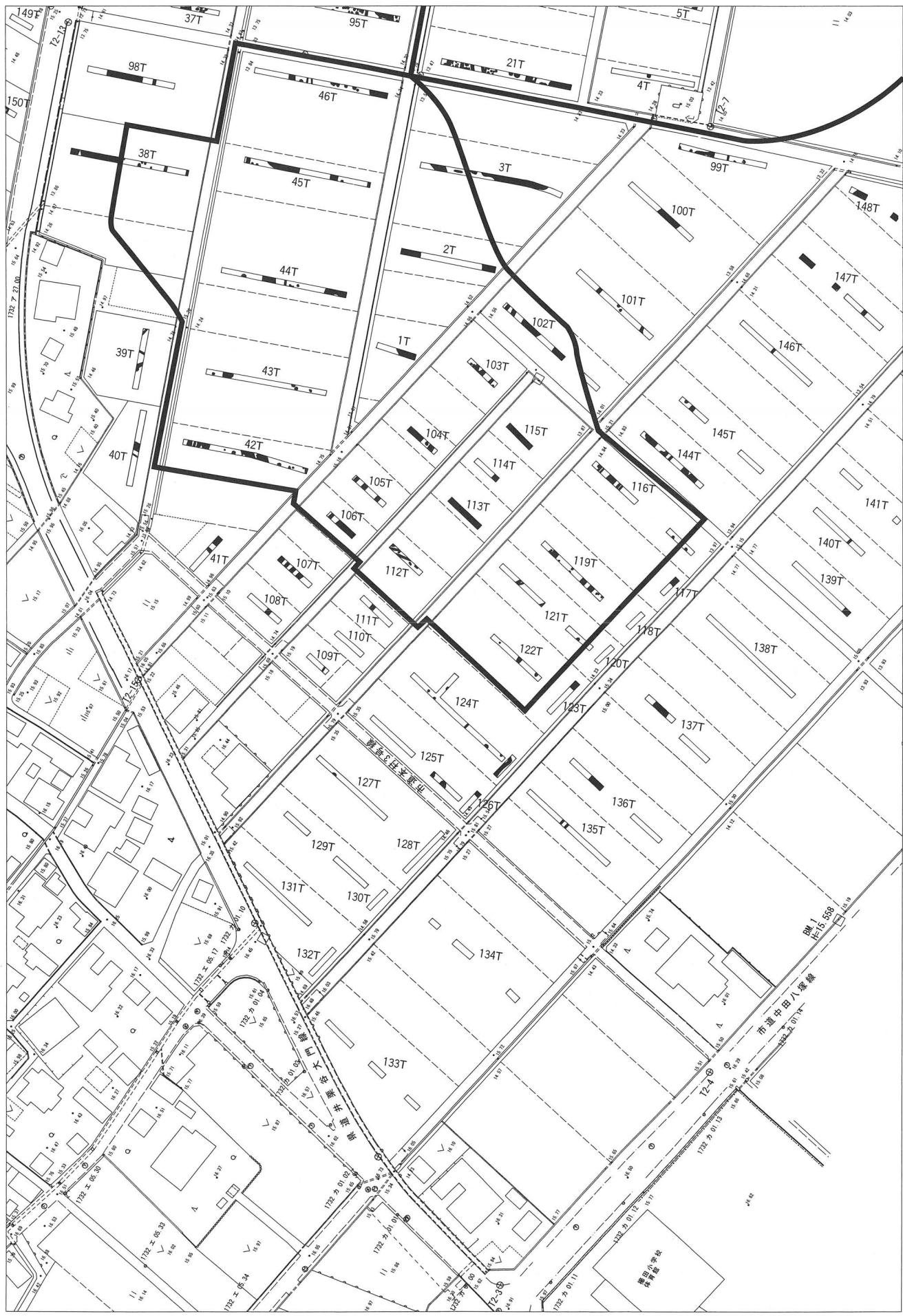
遺跡の西側には八幡川支流と考えられる河川跡、東側には南北に伸びる河川跡がそれぞれ存在する。東西の河川跡に挟まれた場所が土器分布の中心であり、東側河川東岸部では81・92Tのみ弥生土器が出土している。今回の調査対象地内では、当該期の遺構の存在は認められなかった。遺物の出土状況から、Ⅲ層の黒色粘質土が一定程度堆積した後に遺跡外から土器が持ち込まれたものと考えられ、周辺部に所在する集落の遺物廃棄場としての性格が想定できる。Ⅲ層中に一定量の弥生土器を含み、土器の廃棄場と考えられる範囲をもって遺跡範囲とした。

## 5. 遺跡範囲外出土遺物（第42図）

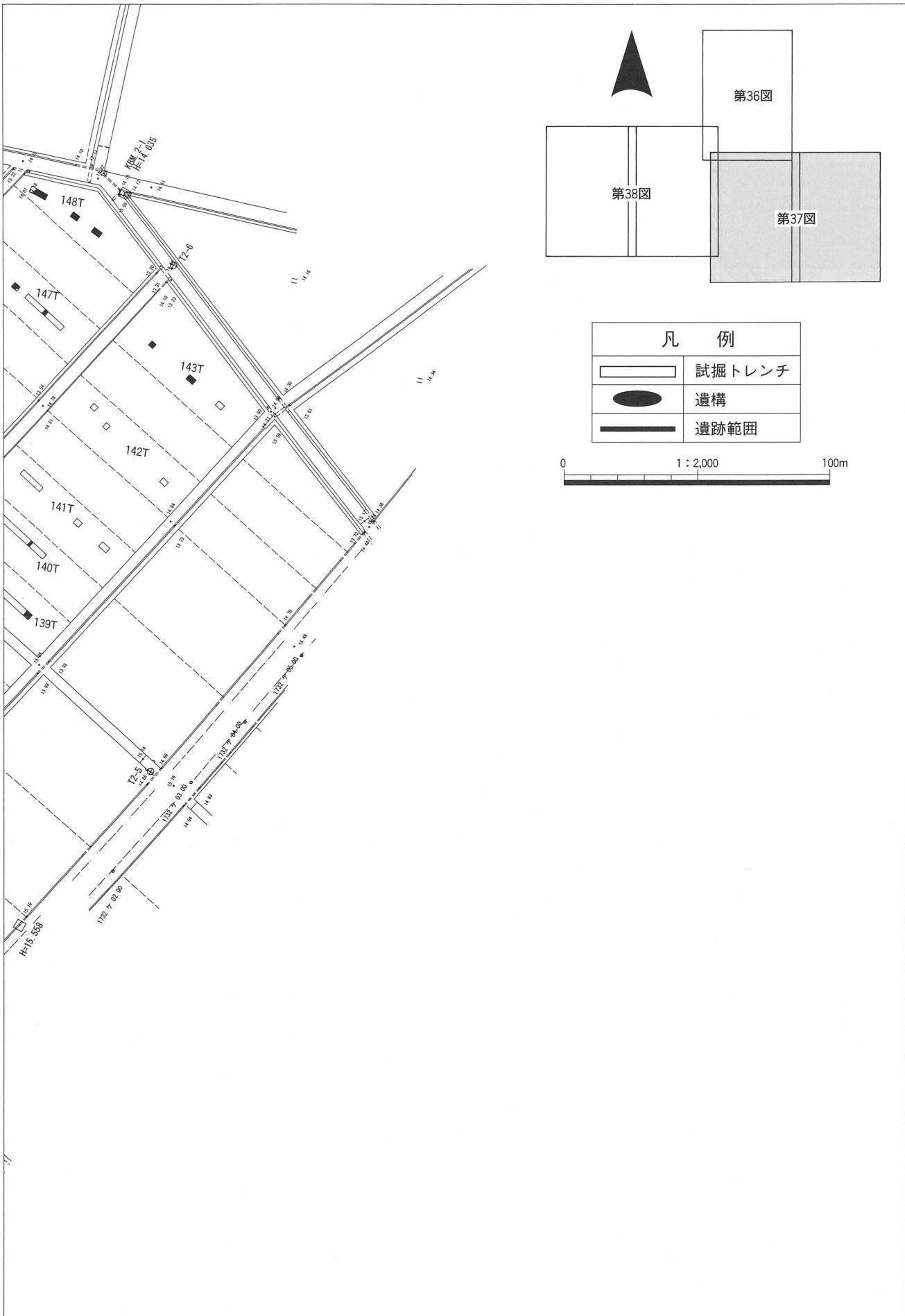
遺跡範囲外からも、弥生～近世にかけての遺物が少量出土している。52は越中瀬戸の丸皿。53は須恵器甕の頸部片で、2条単位で横位の凹線を引き垂下する直線文を施す。7世紀代に比定できる。55は中世土師器皿。非ロクロ整形で、口縁端部を摘み上げる。15世紀後半～16世紀前半頃に比定できる。56は龍泉窯系の青磁碗。57～59は珠洲。57は壺の口縁部で、口縁～肩部にかけて自然釉がかかる。14世紀代に比定できる。これらの遺物は、耕土・遺物包含層・河川流路からの出土である。



第36図 試掘トレンチ配置図(1) (1/2,000)



第37図 試掘トレンチ配置図(2) (1/2,000)





第38図 試掘トレンチ配置図（3）（1/2,000）



## 第4節 工事立会調査

### 第1項 調査の経過

串田地区のは場整備事業では、盛土による遺跡の現状保存を前提として調整が進められたが、串田西前田遺跡範囲内的一部において、田面基盤高調整のため、やむを得ず遺物包含層に影響の及ぶ切土工事の施工が必要となった。串田西前田遺跡では当該期の遺構を確認しておらず、保護対象は遺物包含層と定めていたため、保護措置として当該区域の工事立会による包含層出土遺物の採取と出土状況記録の作成、及び包含層上面における面的な遺構の有無の確認を行なうこととした。なお、大規模な工事立会調査となるため、①遺物包含層及び遺構の有無の面的な確認、②不用意な掘削を避けるため、工事施工者と市教育委員会との間で遺物包含層に対する共通認識を持つこと、③今後の立会調査方法の再確認を目的として、事前に遺物包含層上面までの掘削を伴う予備的な立会調査を実施した。

工事立会調査の対象水田は、串田415、419、445（いずれも水田地番）の3か所であり、調査実施順に1～3区としてそれぞれ地区名を付した。調査実施地区及び調査期間等は下表のとおりである。

地区	水田地番	調査期間	調査担当者	対象面積	備考
1区	串田445	H19.8.6	射水市教育委員会 文化課 主任 田中 明 〃 金三津英則	1,140m <sup>2</sup>	遺物包含層上面までの予備調査
		H19.8.22～27(2日間)			東側に礫層広がる
2区	串田419	H19.10.16～18(2日間)		1,136m <sup>2</sup>	
3区	串田415	H19.10.18～22(2日間)		1,059m <sup>2</sup>	遺物は減少傾向

第17表 工事立会調査実施一覧

### 第2項 調査の方法

調査員立会のもと、法バケットを装着したバックホウを後退させながら水田耕土を掘り下げる方法で行った。1回あたりの掘削深度はおおむね10cmとし、遺物の出土地点・レベル・出土状況を記録し、遺物を取り上げた後に次の10cmの掘削を行なう一連の作業を、計画深度に到達するまで繰り返した。

### 第3項 調査の概要（第38・43・44図）

1区では、水田東端部において礫層が隆起し、遺物包含層の堆積が不安定となる。遺物包含層が安定して堆積する水田西側～中央部にかけて弥生土器が出土するが、礫層範囲では遺物の出土が皆無となる。なお、水田東部の礫層範囲との境界付近では緑色凝灰岩塊が1点出土している。

2区では、遺物包含層は安定した堆積をみせる。弥生土器の出土範囲はほぼ水田全域に渡っており、水田中央部付近に、数箇所の土器のまとまりが認められる。

3区では、水田北半東端部・西端部で局地的に遺物が集中する反面、水田南半の中央～西部かけては、弥生土器の分布が希薄となる。また、1点のみであるが縄文土器が出土している。

1～3区共に、遺物は包含層上面から10cm程度の深さに面的に分布している。完形品こそ見られないが、摩滅が少なく個体ごとに土器片が点在する傾向は、試掘調査の結果とも符合する。投棄された遺物が、地形の傾斜に添って堆積した黒色粘質土中に包含された状況を示すものと考えられる。

出土遺物は、弥生時代後期後半の土器が主体となる。甕・壺類に比して高壺・器台の出土が目立つ。60～62・68・69・84～89は甕。「く」字状に外反する口縁をもつ68・69・85や受口状口縁の88・89等を中心に出土しており、発達した有段口縁をもつ84等は少数である。70・83・94～96は壺。83は図上復元であるが、口径27.1cm、器高45cm以上の大形の壺である。頸胴部境にキザミを施した凸帶を貼付ける。器面には赤彩の痕跡が残る。94は底部以下を欠損するが、台付無頸壺と考えられる。96は頸

下部に粗大な波状文が描かれる。63～67・75～82・99～103は高坏。棒状の脚部をもつ65・79・81・82・103や、口縁部が短く直線的に立ち上がる小形の高坏77等がある。また、口縁部が内湾して立ち上がり、台付無頸壺の可能性のある71、短脚で他器種の可能性のある76・80等も出土している。73・97・98は器台。73・97は幅の広い有段口縁に擬凹線を施す。98はやや内湾気味に立ち上がる口縁部に擬凹線を施す。口縁部内外面に煤の付着が認められる。72・92はミニチュア土器。両者共に手づくね成形であり、器面に指頭圧痕が明瞭に残る。104は縄文土器の深鉢。器面に斜位の縄文を施し、口縁下部では縄文をナデ消す。縄文時代後期のものか。

## 第5節 総 括

2か年による試掘・工事立会調査の結果、調査対象地内において、弥生・中世～近世期に属する4遺跡の広がりを確認した。以下、地形・歴史的環境からの検討を加え、調査のまとめとしたい。

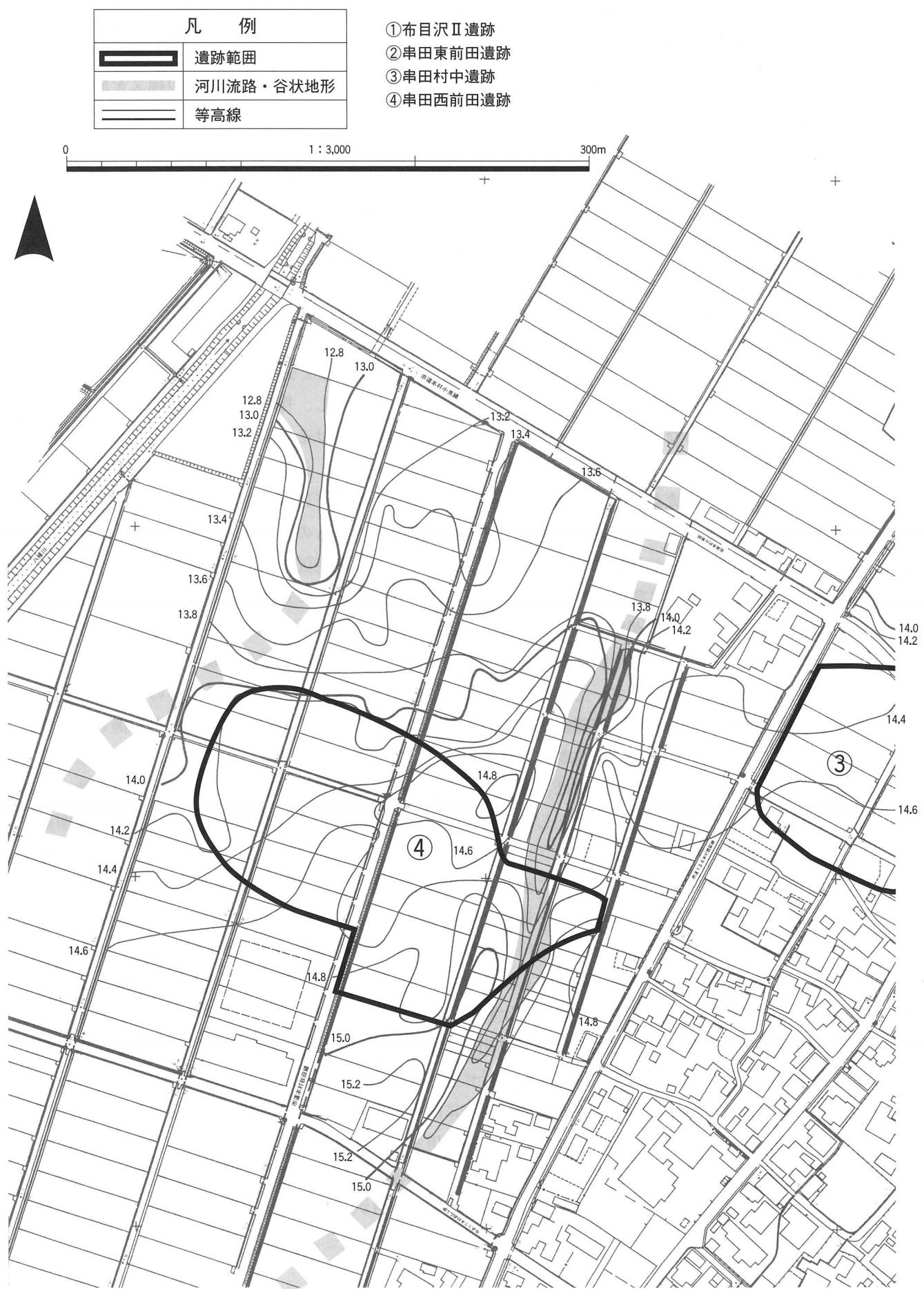
### 第1項 調査対象地の地形及び遺跡の変遷

第39図は、トレーンチ内での地山標高値を基に0.2m間隔の等高線を引き、地形の概況を示したものである。概観すると、調査対象地一帯は北へ向けて緩やかに傾斜し、複数の谷地形によって分断された微高地及び低地からなる状況が窺える。谷地形は、河川流路又はその滞留によって形成された低湿地と考えられる。特に調査対象地東部には流路が幾筋も存在する。流路は標高14.0m付近で著しく蛇行し、さらに複数の支流が加わる。この下流部は常に流水の影響下に置かれる不安定な環境であったと考えられる。対して、西部では北流する2つの流路が存在するものの、その流路は直線的であり、北西方向への緩傾斜をもつ比較的安定した地形となる。なお、調査区外のため詳細は不明だが、現本村集落は東西北を14.6m等高線に囲まれた、北東に伸びる微高地上に立地すると思われる。集落内を南北に貫流する流路の存在が推定されるものの、周囲と比較しても、最も安定した立地といえる。

調査対象地内では、まず弥生時代後期に、西部において串田西前田遺跡が出現する。しかし、当遺跡では集落の形成は認められず、土器の廃棄場としての利用に留まる。布目沢II遺跡の平成9年度調査地区では、当期の遺構・遺物が確認されているが、遺物量において串田西前田遺跡が圧倒しており、これらの土器を生産・使用した集落本体とは認め難い。集落本体は、東方の現本村集落の一角に存在する可能性がある。串田西前田遺跡は、弥生時代後期には姿を消し、以後集落が形成された形跡はない。なお、工事立会調査において出土した縄文土器は、遺跡南方の高岡市中田地内に所在する常国遺跡周辺からの流入と考えられる。

今回の調査では、古墳時代から古代にかけての遺構は確認しておらず、15世紀後半になって、調査対象地東部に布目沢II・串田東前田の2遺跡が出現する。布目沢II遺跡は、標高14.0以下の河川流路間に位置する。遺跡は分流・蛇行する河川に囲まれ、さらにその支流が遺跡内を縦断する。遺跡上流に河川の分岐点が位置し、地形的に安定した場所とは言い難いが、東隣する平成9年度調査地区は、北側へ張り出す細長い微高地上に位置し、比較的安定した立地となっている。串田東前田遺跡は、布目沢II遺跡の南に隣接した、北東方向に張り出す標高15.0～14.0mの微高地上に展開する。河川流路により東西に三分されるが、流路は大きく蛇行せず、布目沢II遺跡に比して安定した立地といえる。両遺跡とも、存続時期は15世紀後半～16世紀前半に限られている。遺跡内部に河川を取り込んだ、安定的とは言い難い立地とする背景には、和田・神楽川水系の水運利用への利点があつたためと思われる。現本村集落北端に位置する串田村中遺跡は、遺跡本体が南部に展開する可能性があり、出現期は明確ではない。試掘調査で確認した遺構の時期は、概ね布目沢II遺跡、串田東前田遺跡と重複すると

第39図 調査結果総括図 (1/3,000)





みられるが、両遺跡廃絶後も当遺跡は近世本村集落の一部として存続したと考えられる。

## 第2項 歴史的環境と調査のまとめ

「櫛田」の地名は、延喜式内社櫛田神社の名で知られ、『和名類聚抄』にも「櫛田郷」の名が見える。集落の創始は、遅くとも10世紀代に遡ると思われ、長禄2年(1458)には、山城平野社料所「櫛田荘」の名が見えることから、古代・中世を通じて「櫛田」集落は継続的に存在していたと考えられる。櫛田荘は、寛正6年(1465)に神保某により押領を受けている。神保某とは、当時放生津を拠点とした射水・婦負郡守護代神保氏であろう。当主長誠は両郡の水陸輸送交通網を掌握し、積極的な領国的支配を企図していた。櫛田荘は、神保氏の拠点である増山～放生津を結ぶ、和田・神楽川水系の中途に位置することから、水系掌握を目的として櫛田荘の押領に及んだものと思われる。布目沢II遺跡、串田東前田遺跡の存続時期は、放生津神保氏の盛衰期と一致する。立地的にも水運管理に特化した様相をみせることから、守護代神保氏との関連を想定したい。両遺跡は16世紀中葉には廃絶する。『大門町史』によると、現在の布目沢集落は、天正11年(1583)以前に「布目」・「澤」の2集落が統合して誕生したという。「澤」の地名は清水の湧き出る様に由来するとされ、布目沢II遺跡の立地は、この由来を裏付ける。周辺部においても当該期の集落遺跡は確認されておらず、当遺跡が旧澤村の故地であった可能性が高い。昭和39年に遺跡内で発見された23,000枚余の埋納銭は、遺跡最終末期又は廃絶直後の埋納であろう。

今回の試掘調査では、当初予測していた10～14世紀代の遺構は確認できなかった。調査で確認した遺跡は、いずれも短期間で姿を消し、かつ弥生時代の土器の廃棄場、中世の河川管理等、特定の目的に特化した様相を見せる。今後の調査による検証の必要性は言及するまでもないが、地形的に最も安定したとみられる現本村集落が、長期間串田地区の中心的集落であったと推定できる。

番号	遺跡名	時代	種別	面積	備考
1	布目沢II遺跡	中世	集落	59,500m <sup>2</sup>	溝・土坑
2	串田東前田遺跡	中世	集落	31,500m <sup>2</sup>	溝・土坑・井戸
3	串田村中遺跡	中世・近世	集落	14,700m <sup>2</sup>	溝・土坑・柱穴・井戸
4	串田西前田遺跡	弥生	散布地	24,400m <sup>2</sup>	遺物のみ散布

第18表 遺跡総括結果表

## 参考文献

- 大門町教育委員会 1999 『大門町布目沢地区埋蔵文化財発掘調査報告－県営ほ場整備事業に伴う試掘調査報告－』  
大門町埋蔵文化財調査報告第19集
- 大門町 1981 『大門町史』
- 大門町 2005 『大門町史 続巻』
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006 『下老子笛川遺跡発掘調査報告』
- 宮田進一 1997 「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会編
- 高橋浩二 2000 「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内式土器研究X X II』庄内式土器研究会

第19表 試掘トレンチ一覧表

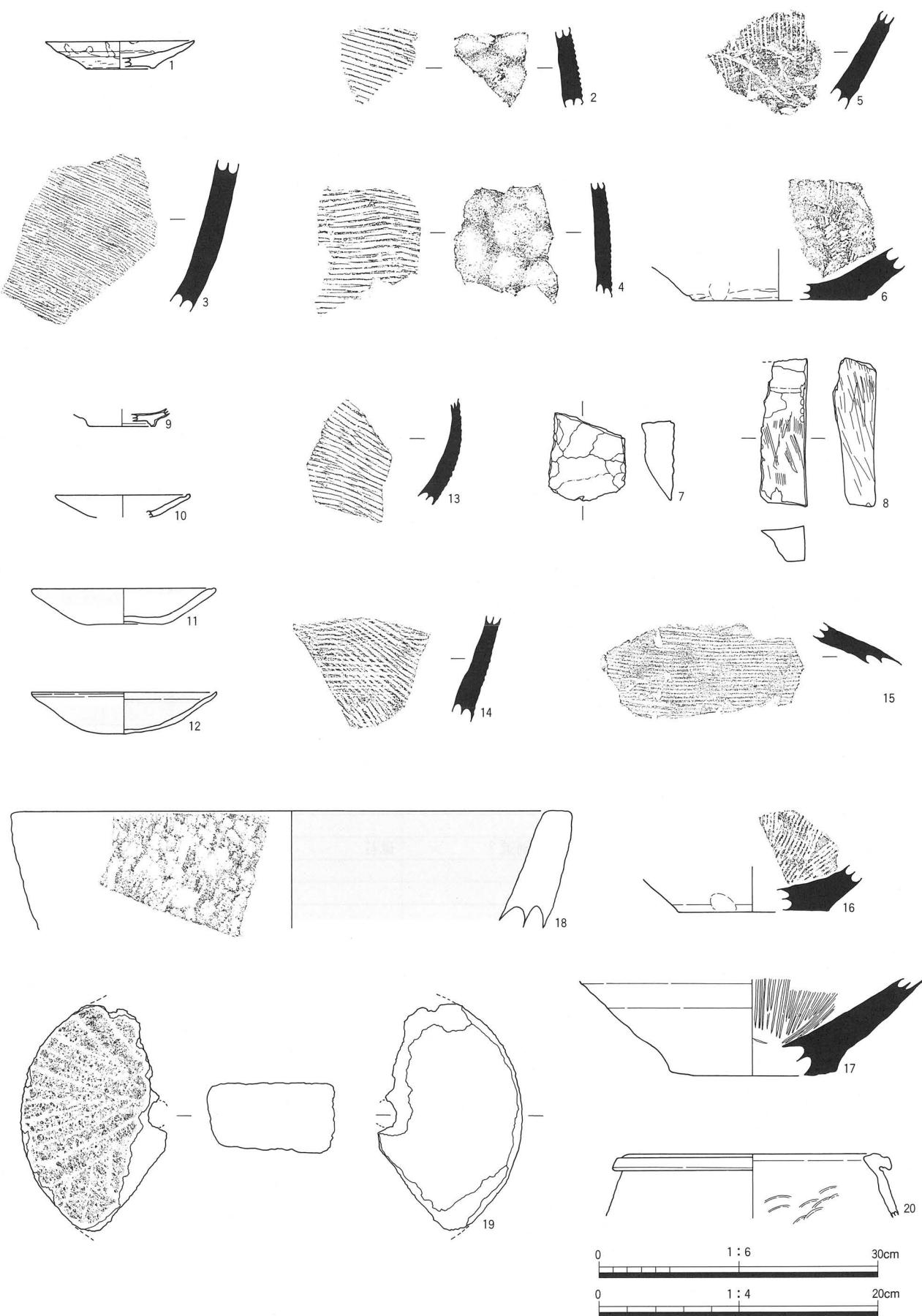
トレンチ番号	トレンチ延長	遺跡名	地山標高	遺構	出土遺物	備考
1	15.4	串田東前田	14.30	自然河道		
2	36.8	串田東前田	14.17	自然河道	中世土師器皿	
3	55.4	串田東前田	14.13	不明溝・土坑、自然河道		
4	31.9	布目沢Ⅱ	14.00	不明土坑		
5	33.7	布目沢Ⅱ	13.83	不明溝		
6	37.6	布目沢Ⅱ	13.60	不明溝		
7	27.6	布目沢Ⅱ	13.41	不明溝、自然河道	弥生土器	
8	29.6	布目沢Ⅱ	13.35	不明溝、自然河道		
9	31.6	布目沢Ⅱ	13.39	自然河道		
10	31.0	布目沢Ⅱ	13.18	不明溝・中世土坑？	珠洲	
11	17.4	布目沢Ⅱ	12.86	不明土坑		
12	32.4	布目沢Ⅱ	12.92	不明溝		
13	46.3	布目沢Ⅱ	12.90	不明溝		
14	48.6	布目沢Ⅱ	13.00	不明溝	打製石斧	
15	49.6	布目沢Ⅱ	13.18	近現代溝、不明溝・土坑	珠洲、近現代磁器	
16	49.6	布目沢Ⅱ	13.18	中世溝	珠洲	
17	46.3	布目沢Ⅱ	13.33	中世溝・土坑	珠洲、越中瀬戸、近世磁器	
18	49.2	布目沢Ⅱ	13.35	中世？溝・土坑、自然河道？		
19	48.2	布目沢Ⅱ	13.40	中世？溝・土坑	珠洲	
20	51.2	布目沢Ⅱ	13.37	中世？溝・土坑	珠洲、中世土師器皿	
21	50.8	布目沢Ⅱ	13.96	中世溝・土坑	珠洲、砥石	
22	53.7		13.70	近現代溝、不明溝・土坑	須恵器	
23	46.4		13.44	不明土坑、自然河道		
24	51.8		13.48	不明溝・土坑、自然河道	中世土師器皿	
25	54.0		13.10	不明溝・土坑		
26	47.6		13.09	不明溝・土坑		
27	49.6		12.89	不明溝・土坑	中世土師器皿、越中瀬戸	
28	44.4		12.81	不明溝・土坑		
29	44.2		12.68	不明溝		
30	41.2		12.78	不明土坑	珠洲、青磁	
31	32.6		13.03	不明土坑		
32	42.9		13.15		越中瀬戸、不明土師器	
33	44.9		13.18		中世土師器皿、不明土師器	
34	46.2		13.45		弥生土器、越中瀬戸	
35	45.7		13.60		唐津、不明土師器	
36	44.6		13.86	不明土坑、自然河道？		
37	41.1		13.94	不明溝・土坑、自然河道	中世土師器皿、越中瀬戸、石臼	
38	45.7	串田東前田	14.18	中世溝・土坑・井戸、自然河道	中世土師器皿、青磁、砥石、不明土師器	
39	23.1		14.52	不明溝・土坑		
40	29.3		14.59	不明溝		
41	16.7		14.72	不明溝、自然河道		
42	47.9	串田東前田	14.48	中世溝・土坑・井戸	中世土師器皿	
43	45.7	串田東前田	14.42	中世井戸・近現代溝	中世土師器皿、近現代磁器	
44	47.7	串田東前田	14.27	中世溝・土坑、自然河道？	中世土師器皿、近世磁器	
45	48.1	串田東前田	14.18	中世？溝・土坑、自然河道？		
46	50.9	串田東前田	14.08	中世溝・土坑・井戸、近現代溝	珠洲	
47	51.2		13.07	近現代溝		
48	49.6		13.25			
49	48.3		13.47			
50	47.0		14.10		珠洲	
51	43.9	串田西前田	14.24	弥生？溝	弥生土器	
52	47.7	串田西前田	14.30		弥生土器、鉄石英	包含層中に土器多数
53	44.6	串田西前田	14.35		弥生土器、唐津	
54	46.8		14.57		弥生土器、伊万里	
55	45.6		14.74			
56	44.8		14.71			

第20表 試掘トレンチ一覧表

トレンチ番号	トレンチ延長	遺跡名	地山標高	遺構	出土遺物	備考
57	43.0	串田西前田	14.62		弥生土器、不明鉄滓	包含層中に土器多数
58	45.0	串田西前田	14.60		弥生土器	
59	44.5	串田西前田	14.62		弥生土器、鉄石英	包含層中に土器多数
60	39.7	串田西前田	14.44		弥生土器	
61	48.3		14.28	近現代？溝	弥生土器	
62	41.2		13.78			
63	39.9		13.66			
64	49.3		13.56			
65	40.3		13.35			
66	41.8		13.70	不明溝		
67	44.5		13.68	不明溝		
68	44.4		14.02	自然河道？		
69	44.1		14.22			
70	45.1		14.51	近現代溝		
71	40.4		14.79		珠洲	
72	44.9	串田西前田	14.71		弥生土器、須恵器、越中瀬戸	
73	49.2	串田西前田	14.83		弥生土器	包含層中に土器多数
74	44.3	串田西前田	14.82			
75	45.4	串田西前田	14.92	弥生？溝	弥生土器、越中瀬戸	
76	45.1		15.21	不明溝		
77	19.9		15.34		須恵器	
78	19.1		14.88	近現代溝		
79	13.2		14.58	近現代溝		
80	17.3	串田西前田	15.06	自然河道		
81	17.8	串田西前田	14.68			
82	17.1		14.01	自然河道		トレンチ全体河道内
83	18.2		14.50	自然河道		
84	18.6		14.55	自然河道	珠洲	
85	15.9		14.02	自然河道		
86	17.6		14.28	近現代溝、自然河道	近現代磁器	
87	15.4		14.37			
88	16.9		14.49	自然河道		
89	16.6		14.59	近現代溝		
90	19.7		14.65	近現代溝		
91	19.6		14.64	近現代溝		
92	20.8	串田西前田	14.80	近現代溝	弥生土器	包含層中に土器多数
93	21.2	串田西前田	14.93	近現代溝、不明土坑	越中瀬戸、近現代磁器	
94	19.8		14.88	近現代溝	唐津	
95	37.7		13.96	近現代溝、不明溝・土坑、自然河道		
96	44.4		13.74	近現代溝、不明溝、自然河道		
97	36.1		13.81	近現代溝、不明溝		
98	34.0		14.06	不明溝、自然河道		
99	34.2		13.87	不明溝・土坑・井戸	弥生土器	
100	31.7		14.01	近現代溝、自然河道	弥生土器、越中瀬戸	
101	37.8		14.42	不明溝・土坑・井戸？	珠洲	
102	38.6	串田東前田	14.20	中世溝、自然河道	中世土師器皿、珠洲、越前、白磁、バンドコ	
103	14.5	串田東前田	14.47	中世溝・土坑・井戸		
104	14.1	串田東前田	14.55	中世溝・井戸、自然河道		
105	15.9	串田東前田	14.50	中世溝	中世土師器皿	
106	13.0	串田東前田	14.36	中世溝、自然河道	珠洲、石臼	
107	16.0		14.70	不明溝	不明鉄滓	
108	15.7		14.80	不明溝		
109	10.0		15.10	不明溝		
110	13.2		14.95			
111	15.5		14.93	不明溝		
112	15.8	串田東前田	14.82	中世溝・土坑	近世陶器	

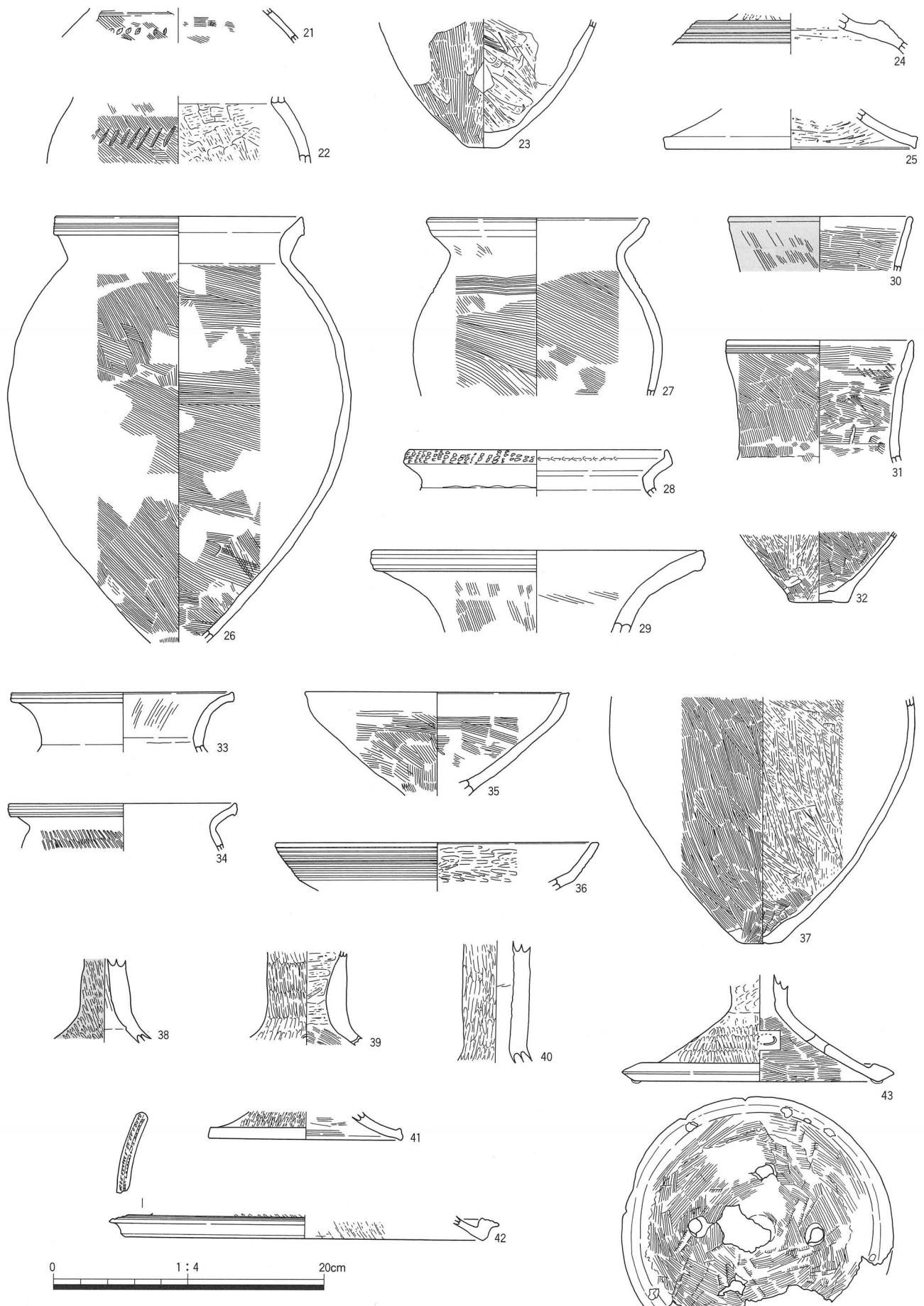
第21表 試掘トレンドー一覧表

トレンド 番号	トレンド 延長	遺跡名	地山 標高	遺構	出土遺物	備考
113	15.9	串田東前田	13.90	自然河道		トレンド全体河道内
114	11.7	串田東前田	14.61	自然河道		
115	12.5	串田東前田	14.41	自然河道		
116	35.3	串田東前田	14.42	中世溝・土坑・井戸	中世土器皿	
117	8.2		14.45	自然河道		
118	7.6		14.42			
119	31.2	串田東前田	14.72	中世溝・土坑	珠洲、石鉢	
120	8.3		14.22			
121	34.7	串田東前田	14.79	中世？溝・井戸		
122	24.9	串田東前田	14.87	中世？溝・土坑・井戸		
123	15.7		14.37	自然河道		
124	69.9		14.92	弥生土坑、近世溝、不明溝・ 土坑	弥生土器・近世磁器	
125	36.6		14.94	不明土坑		
126	10.2		14.83	不明溝		
127	34.7		15.05	不明井戸？		
128	21.1		14.86			
129	29.2		15.04	近現代溝		
130	9.5		14.70			
131	33.5		15.08			
132	13.4		15.02			
133	28.4		14.96			
134	19.2		14.55	自然河道		
135	41.6		14.62	不明溝	中世土器皿	
136	30.9		14.53	自然河道		
137	28.5		14.33	自然河道		
138	35.9		14.14	自然河道		
139	29.4		14.16	自然河道		
140	25.7		14.16	不明溝		
141	17.1		14.03			
142	7.0		13.78			
143	8.6		13.46	自然河道		
144	30.7		14.36	不明溝、自然河道？	砥石	
145	25.3		14.18	不明溝・土坑		
146	35.9		14.00	不明溝		
147	27.9		13.66	不明溝、自然河道		
148	14.0		13.63	自然河道	珠洲	
149	9.5		13.84			
150	21.5		14.15	不明溝		
151	29.8		14.32	不明溝、近世以降溝		
152	21.0		14.34	不明溝・土坑		
153	35.7	串田村中	14.40	中世？土坑・柱穴	近世磁器	
154	9.2	串田村中	14.35	中世？土坑・井戸・柱穴		
155	12.9	串田村中	14.36	中世？土坑		
156	32.1		14.25			
157	19.1		13.88			
158	20.7		13.70	近現代土坑		
159	32.5		13.72		珠洲	
160	42.1	串田村中	14.70	中世？溝・土坑	唐津	
161	33.6	串田村中	14.55	中世？溝・井戸		
162	26.4	串田村中	14.45			
163	29.7	串田村中	14.52	中世土坑	中世土器皿	
164	7.8	串田村中	14.54			
165	38.9	串田村中	14.83	中世溝・土坑？	中世土器皿	
166	33.3		14.46	不明土坑		
167	19.3		14.50			
168	20.7		14.72	不明土坑		



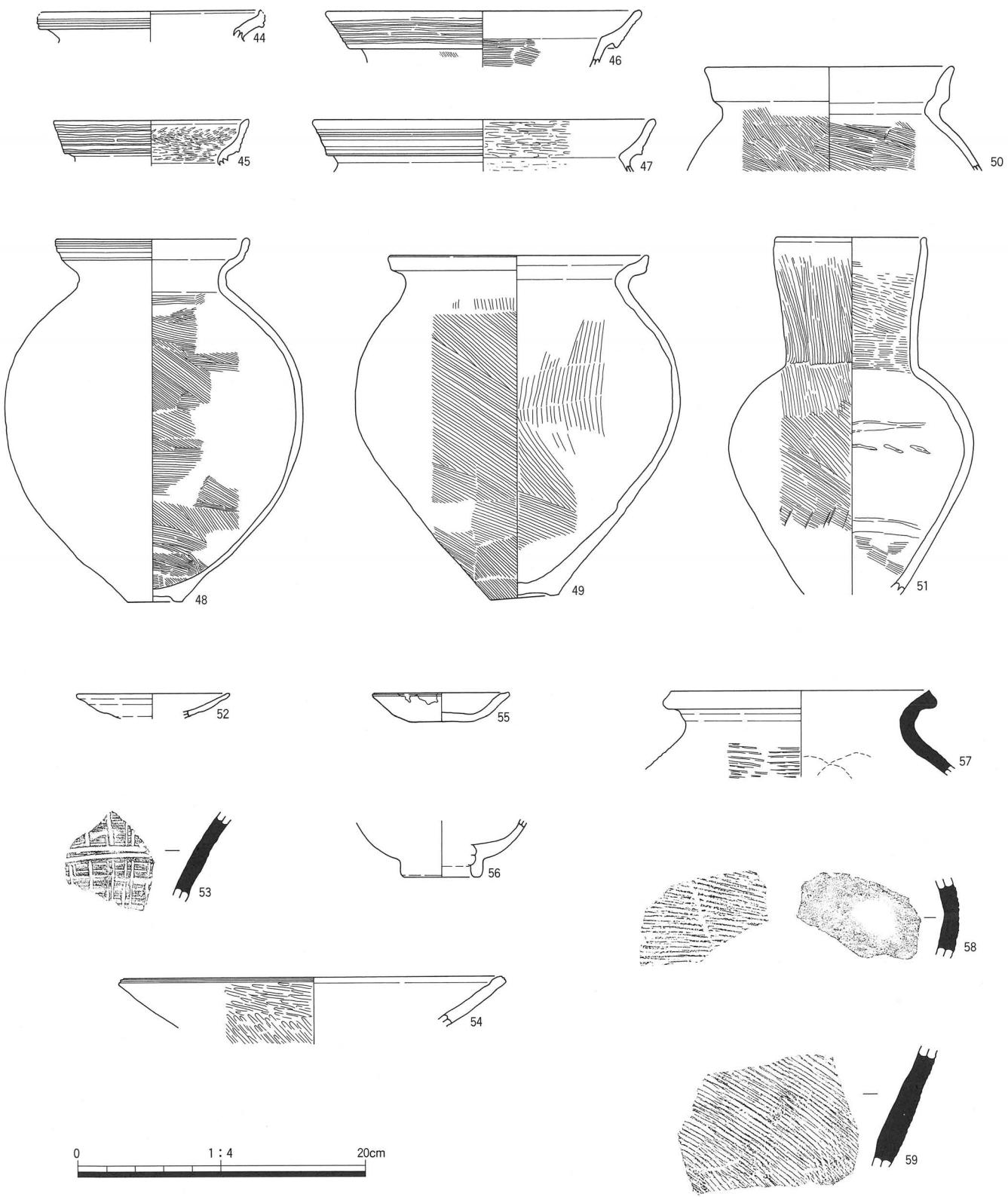
第40図 遺物実測図 [串田地区試掘調査(1)] (1/4, 19:1/6)

1～8：布目沢Ⅱ遺跡 9～19：串田東前田遺跡 20：串田村中遺跡



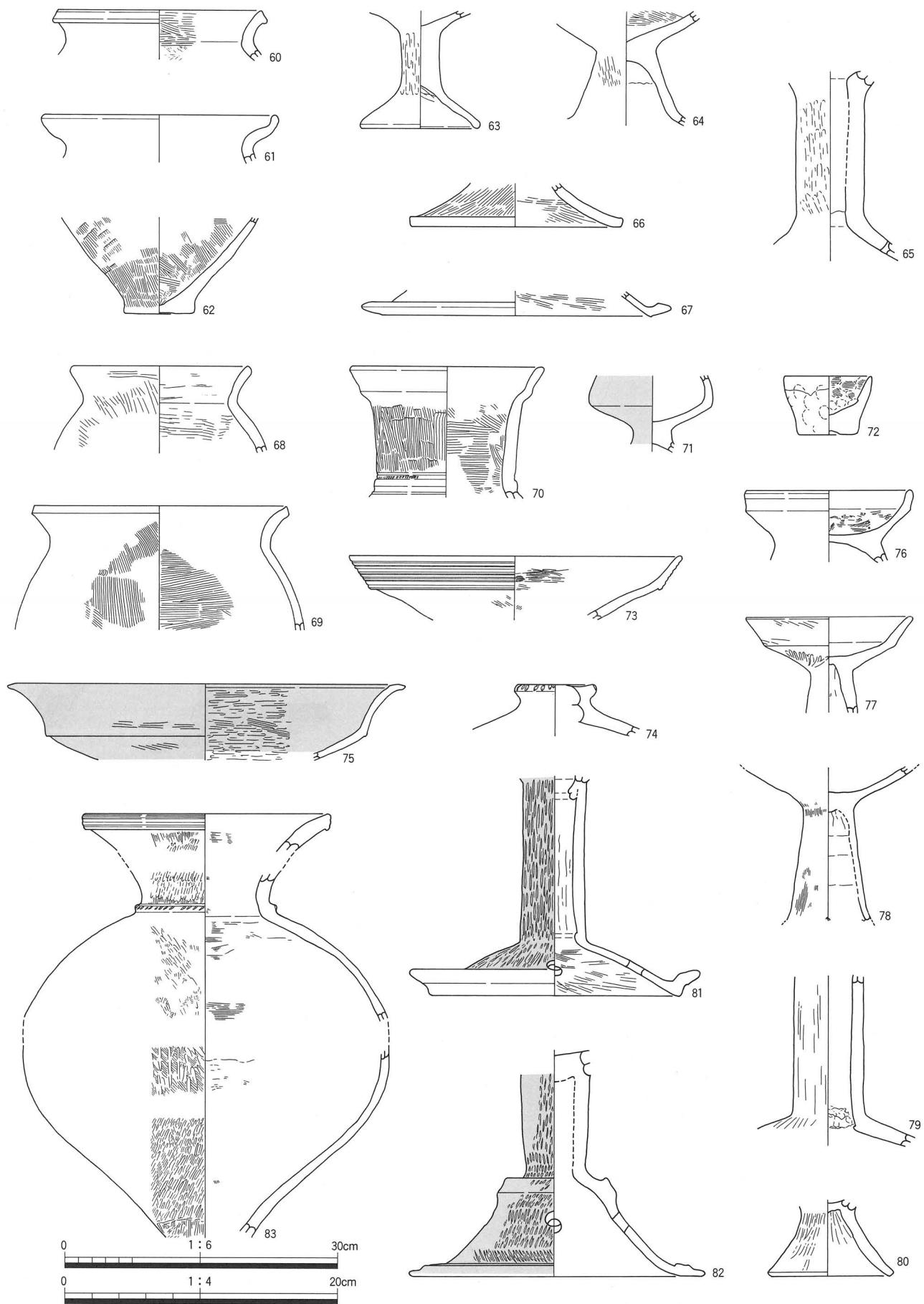
第41図 遺物実測図 [串田地区試掘調査(2)] (1/4)

21~43: 串田西前田遺跡



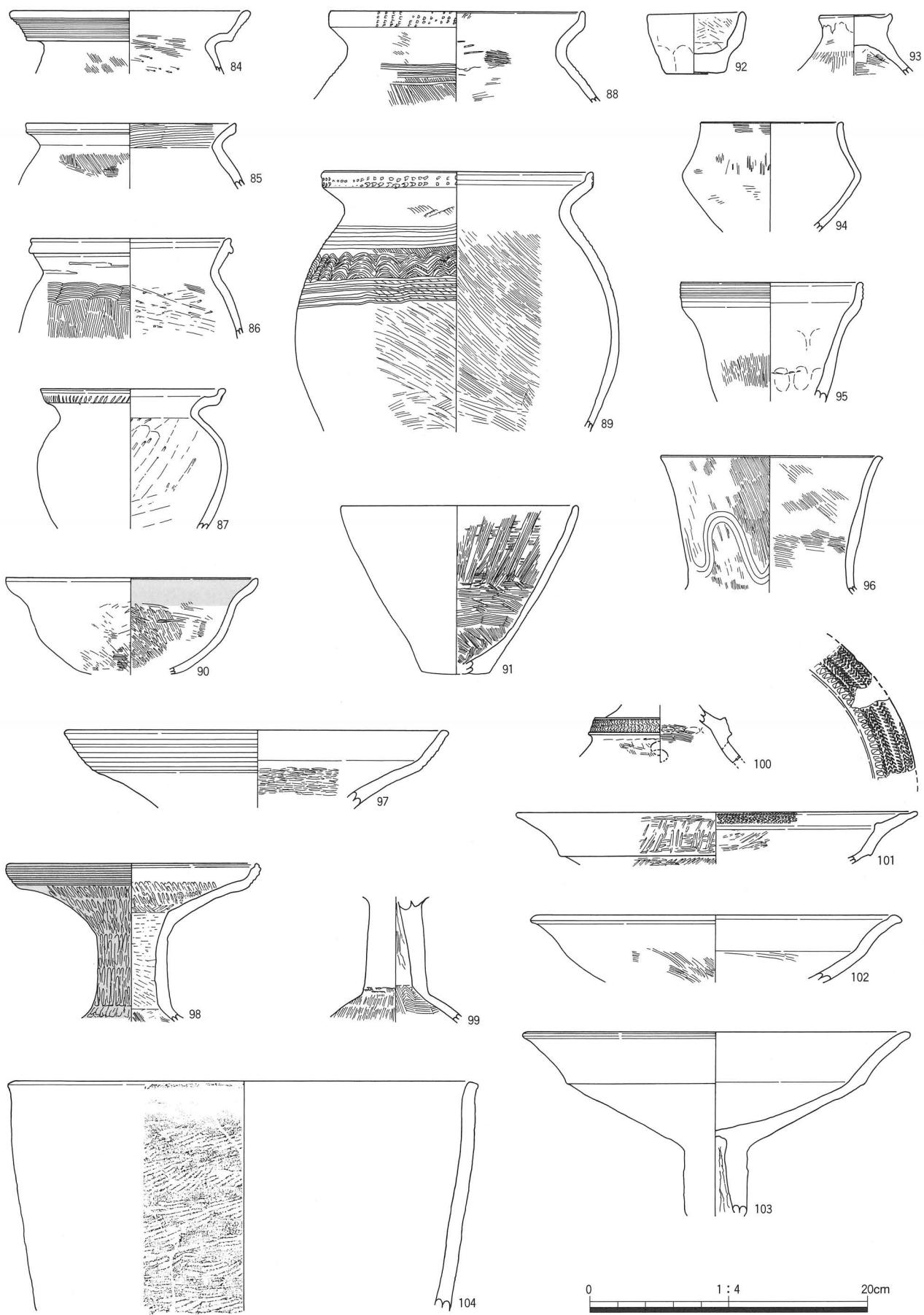
第42図 遺物実測図 [串田地区試掘調査(3)] (1/4)

44~51: 串田西前田遺跡 52~59: 遺跡範囲外



第43図 遺物実測図 [串田西前田遺跡工事立会調査(1)] (1/4, 83:1/6)

60~67: 1区 68~83: 2区



第44図 遺物実測図 [串田西前田遺跡工事立会調査(2)] (1/4)

84~104: 3区

第22表 出土遺物観察表

図版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存量
第40図	1	17トレンチ	越中瀬戸	皿	10.7	2.0	4.7		口 1/6
	2	17トレンチ	珠洲	甕(壺)					破片
	3	10トレンチ	珠洲	甕(壺)					破片
	4	16トレンチ	珠洲	甕(壺)					破片
	5	21トレンチ	珠洲	片口鉢					破片
	6	10トレンチ	珠洲	片口鉢					破片
	7	14トレンチ	打製石斧						刃部 完存
	8	21トレンチ	砥石						2/3
	9	102トレンチ	白磁	小壺		4.3			底 1/3
	10	44トレンチ	中世土師器	皿	9.6			口縁部内面煤付着	口 1/8
	11	116トレンチ	中世土師器	皿	13.0	2.6	5.2	口縁部内外面煤付着	口1/5 底 1/3
	12	38トレンチ	中世土師器	皿	13.4	3.0	5.6	内外面煤付着	口3/8 底 3/4
	13	102トレンチ	珠洲	壺					破片
	14	119トレンチ	珠洲	壺					破片
	15	102トレンチ	珠洲	壺					破片
	16	46トレンチ	珠洲	片口鉢		10.8			底 1/4
	17	106トレンチ	珠洲	片口鉢		11.8			底 1/4
	18	119トレンチ	石鉢		36.8			内面煤付着	口 1/11
	19	106トレンチ	石臼	下臼		30.8			1/3
	20	160トレンチ	唐津	甕	17.7				口 1/8
第41図	21	52トレンチ	弥生土器	甕				肩部刺突文	破片
	22	52トレンチ	弥生土器	甕				肩部刺突文 外面煤付着	破片
	23	52トレンチ	弥生土器	甕					底 完存
	24	52トレンチ	弥生土器	器台				外面赤彩 裾部擬凹線文	
	25	52トレンチ	弥生土器	高坏					裾 1/8
	26	57トレンチ	弥生土器	甕	18.2			口縁部擬凹線文 外面煤付着	口 7/10 体 1/2
	27	57トレンチ	弥生土器	甕	15.6			肩部簾状文	口 7/8
	28	57トレンチ	弥生土器	甕	18.9			口縁部刺突文	口 1/6
	29	57トレンチ	弥生土器	壺	24.1			口縁部擬凹線文	口 1/8
	30	57トレンチ	弥生土器	壺	13.5			外面赤彩	口 1/6
	31	57トレンチ	弥生土器	壺	13.7			口縁部擬凹線文	口 1/8
	32	57トレンチ	弥生土器	甕			4.4		底 完存
	33	59トレンチ	弥生土器	甕	16.4			外面煤付着	口 1/16
	34	59トレンチ	弥生土器	甕	16.8			口縁部擬凹線文	口 1/16
	35	59トレンチ	弥生土器	鉢	19.4				1/8
	36	59トレンチ	弥生土器	器台	23.7			口縁部擬凹線文	口 1/16
	37	59トレンチ	弥生土器	甕			2.8	口縁部擬凹線文	体 1/2 底 完存
	38	59トレンチ	弥生土器	高坏				外面煤付着	脚 完存
	39	59トレンチ	弥生土器	器台				外面赤彩	脚 1/2
	40	59トレンチ	弥生土器	高坏					脚 1/2
	41	59トレンチ	弥生土器	高坏					裾 1/8
	42	59トレンチ	弥生土器	高坏				裾部刺突文 外面赤彩痕	裾 1/14
	43	59トレンチ	弥生土器	高坏				裾径18.1 内外面煤付着 穿孔4箇所	裾 1/3
第42図	44	60トレンチ	弥生土器	甕	15.2			口縁部擬凹線文	口 1/8
	45	73トレンチ	弥生土器	甕	13.4			口縁部擬凹線文	口 1/8
	46	73トレンチ	弥生土器	甕	21.7			口縁部擬凹線文	口 1/12
	47	73トレンチ	弥生土器	甕	23.6			口縁部擬凹線文	口 1/12
	48	73トレンチ	弥生土器	甕	13.4	25.6	3.8	口縁部擬凹線文	口1/4体1/2底 完存
	49	73トレンチ	弥生土器	甕	17.8	24.3	4.6	外面煤付着	口5/8体3/4底 完存
	50	92トレンチ	弥生土器	甕	17.1			内外面煤付着	口 7/8
	51	92トレンチ	弥生土器	壺	10.3			外面煤付着	
	52	100トレンチ	越中瀬戸	皿	10.2				口 1/8

口：口縁部 底：底部 体：体部 坏：坏部 脚：脚部 裾：裾部

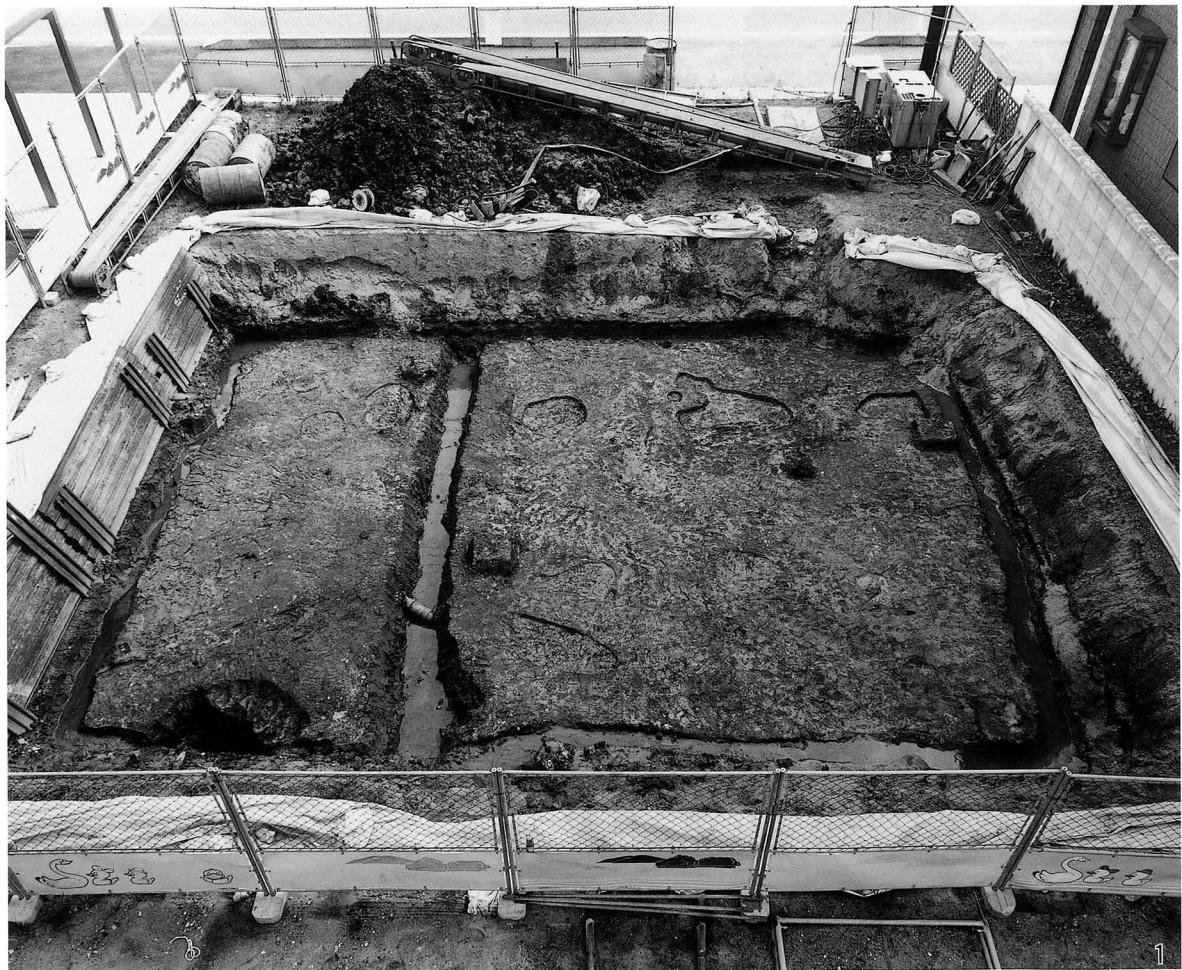
第23表 出土遺物観察表

図版	No.	遺構・出土地区	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	残存量				
第42図	53	22トレンチ	須恵器	甕	26.2	9.4	4.4	頸部凹線 垂線	破片				
	54	124トレンチ	弥生土器	高坏?				口縁部外面煤付着	口 1/16				
	55	37トレンチ	中世土師器	皿				口縁端部炭化物付着	口3/4 底 3/4				
	56	30トレンチ	青磁	碗		2.0	5.3		底 1/6				
	57	148トレンチ	珠洲	壺					口 1/8				
	58	148トレンチ	珠洲	壺		18.0			破片				
	59	159トレンチ	珠洲	甕					破片				
第43図	60	工事立会1区	弥生土器	甕	14.8	16.8	5.2	裾径8.5	口 1/16 口 1/12 底 完存 裾 裾 1/2 脚 完存 脚 完存 裾 1/5 裾 1/10 口 1/4 口 3/16 口 1/4				
	61	工事立会1区	弥生土器	甕	16.8								
	62	工事立会1区	弥生土器	甕	12.7								
	63	工事立会1区	弥生土器	高坏									
	64	工事立会1区	弥生土器	高坏									
	65	工事立会1区	弥生土器	高坏	18.4	4.3	裾径15.2	穿孔 4箇所?					
	66	工事立会1区	弥生土器	高坏				脚 完存					
	67	工事立会1区	弥生土器	高坏	14.0	4.2	裾径19.6	外面煤付着					
	68	工事立会2区	弥生土器	甕				内面煤付着					
	69	工事立会2区	弥生土器	甕	18.4	6.2	4.2	12.7	口縁部外面煤付着				
	70	工事立会2区	弥生土器	壺	14.0				頸部凸带貼付				
	71	工事立会2区	弥生土器	高坏?	24.2				外面赤彩				
	72	工事立会2区	弥生土器	ミニチュア					完存				
	73	工事立会2区	弥生土器	器台					口縁部擬凹線文				
	74	工事立会2区	弥生土器	蓋	6.0				キザミ				
	75	工事立会2区	弥生土器	高坏	28.1				内外面赤彩				
	76	工事立会2区	弥生土器	高坏	12.0				口 1/8				
	77	工事立会2区	弥生土器	高坏	12.1				口 5/16				
	78	工事立会2区	弥生土器	高坏	18.0	21.0	8.6	27.1	口縁部外面煤付着				
	79	工事立会2区	弥生土器	高坏					外面赤彩痕 穿孔 4箇所?				
	80	工事立会2区	弥生土器	高坏					脚 1/2				
	81	工事立会2区	弥生土器	高坏					脚 1/2				
	82	工事立会2区	弥生土器	高坏					裾 1/8				
	83	工事立会2区	弥生土器	壺					裾 3/8 脚 完存				
									口縁部擬凹線文 頸部凸帶刺突文 外面赤彩痕				
									口 1/10				
第44図	84	工事立会3区	弥生土器	甕	16.5	14.2	4.8	12.3	口縁部擬凹線文				
	85	工事立会3区	弥生土器	甕	14.9				口 1/12				
	86	工事立会3区	弥生土器	甕	14.2				口 1/4				
	87	工事立会3区	弥生土器	甕	13.1				口縁部キザミ				
	88	工事立会3区	弥生土器	甕	18.2				口縁部刺突文 肩部直線文				
	89	工事立会3区	弥生土器	甕	19.1				口縁部刺突文 肩部直線文・波状文				
	90	工事立会3区	弥生土器	鉢	18.1				口縁部内外面赤彩 内外面煤付着				
	91	工事立会3区	弥生土器	鉢	16.8				口 1/8 体 3/16				
	92	工事立会3区	弥生土器	ミニチュア	6.7				体 1/4 底 3/4				
	93	工事立会3区	弥生土器	蓋	5.1				完存				
	94	工事立会3区	弥生土器	台付無頸壺?	10.8	13.0	4.4	4.2	外面赤彩痕				
	95	工事立会3区	弥生土器	壺	13.0				口縁部擬凹線文				
	96	工事立会3区	弥生土器	壺	15.5				口縁部波状文 外面赤彩痕				
	97	工事立会3区	弥生土器	器台	27.0				口縁部擬凹線文				
	98	工事立会3区	弥生土器	器台	17.8				口縁部擬凹線文 外面赤彩痕 口縁部内外面煤・炭化物付着				
	99	工事立会3区	弥生土器	高坏	28.5				口3/5 脚 完存				
	100	工事立会3区	弥生土器	高坏					脚 1/2				
	101	工事立会3区	弥生土器	高坏					外面赤彩痕 穿孔 4箇所?				
	102	工事立会3区	弥生土器	高坏					口縁部刺突文 外面赤彩痕				
	103	工事立会3区	弥生土器	高坏					口 1/8				
	104	工事立会3区	繩文土器	深鉢	27.2				口 5/16				
					32.8				口 1/2 脚 1/2				
									口 1/7				

口：口縁部 底：底部 体：体部 壺：壺部 脚：脚部 裾：裾部

赤田 I 遺跡 [14地区] 図版 1

1. 遺構全景(北から)



2. 土坑SK02(南から)



2

3. 土坑SK05(東から)



3

4. 土坑SK06(南から)



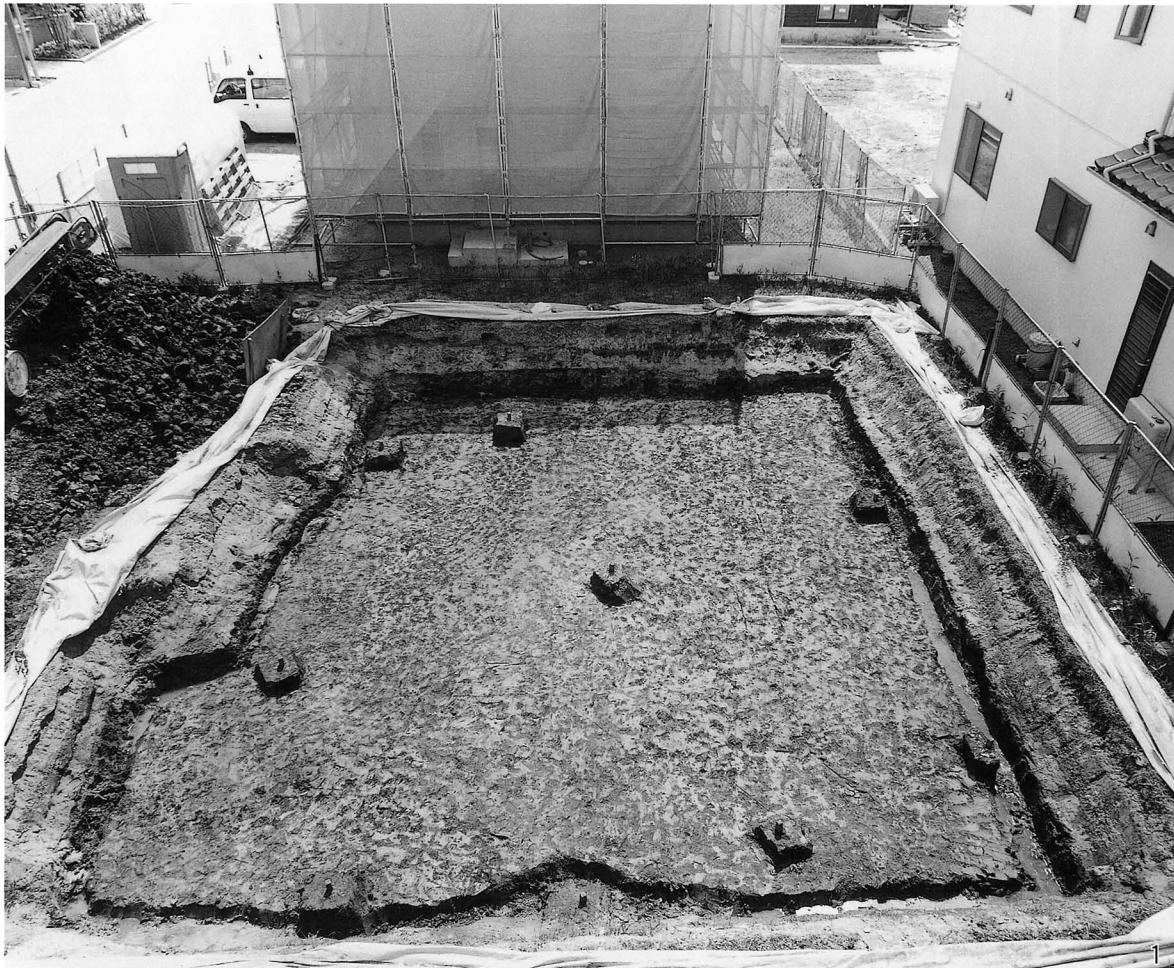
4

5. 土坑SK06(東から)  
遺物出土状況



5

図版2 赤田I遺跡〔15・16地区〕



1. 遺構全景(西から)  
〔15地区〕



2. 遺構全景(東から)  
〔16地区〕



2

赤田 I 遺跡 [17地区] 図版 3

1. 遺構全景(東から)



2. 溝SD01(北から)



3. 溝SD01A-A'  
(南から)



4. 溝SD02C-C'  
(西から)



5. 溝SD03D-D'  
(南から)



図版4 赤田I遺跡〔18地区〕

1. 遺構全景(北から)



2. 遺構全景(南から)



赤田 I 遺跡 [18地区] 図版 5

1. 溝SD01A-A'  
(北から)



3. 溝SD07H-H'  
(西から)



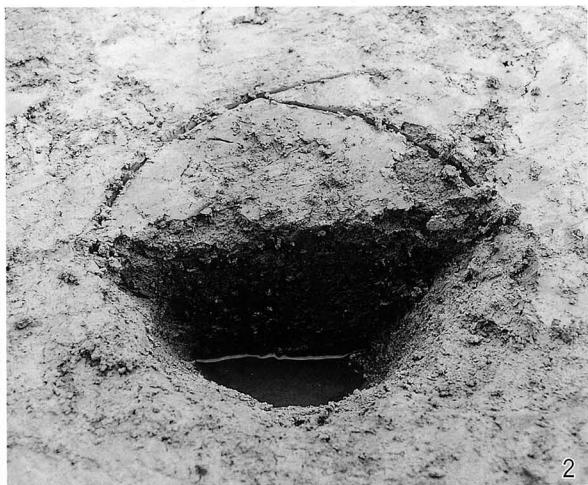
4. 溝SD10E-E'  
(南から)



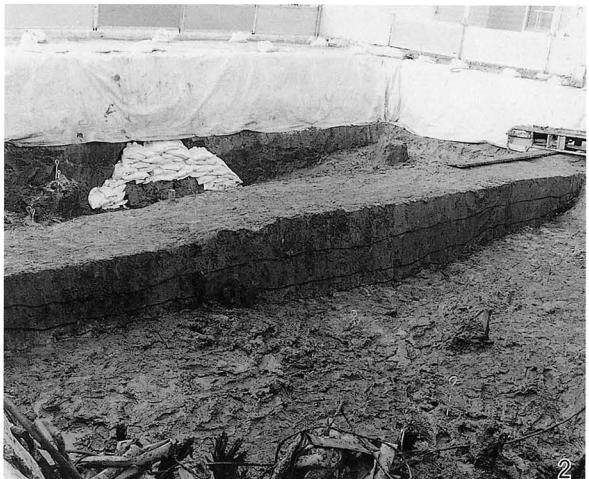
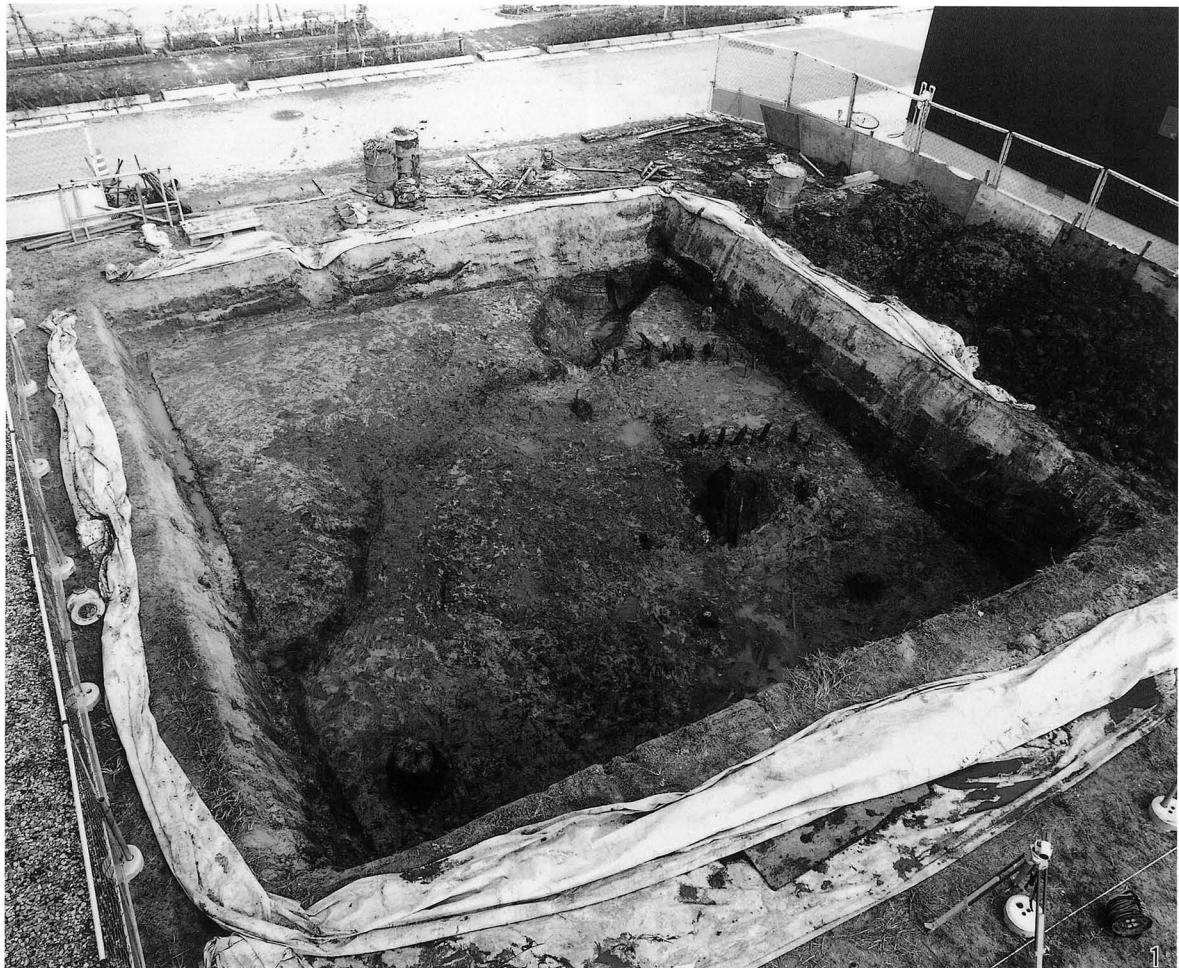
5. 溝SD01(東から)  
遺物出土状況



7. 溝SD01(東から)  
遺物出土状況



図版6 赤田I遺跡〔19地区〕



2. 溝SD01B-B'  
(北から)



3. 溝SD01(北から)  
遺物出土状況



4. 溝SD01(北から)  
遺物出土状況



5. 溝SD01(南から)  
木杭列出土状況

赤田 I 遺跡 [20地区] 図版 7

1. 遺構全景(北から)



2. 溝SD01B-B'  
(南から)



3. 溝SD01A-A'  
(南から)



4. 溝SD01(西から)  
遺物出土状況



5. 溝SD01(西から)  
遺物出土状況



図版8 赤田I遺跡 [21・22地区]



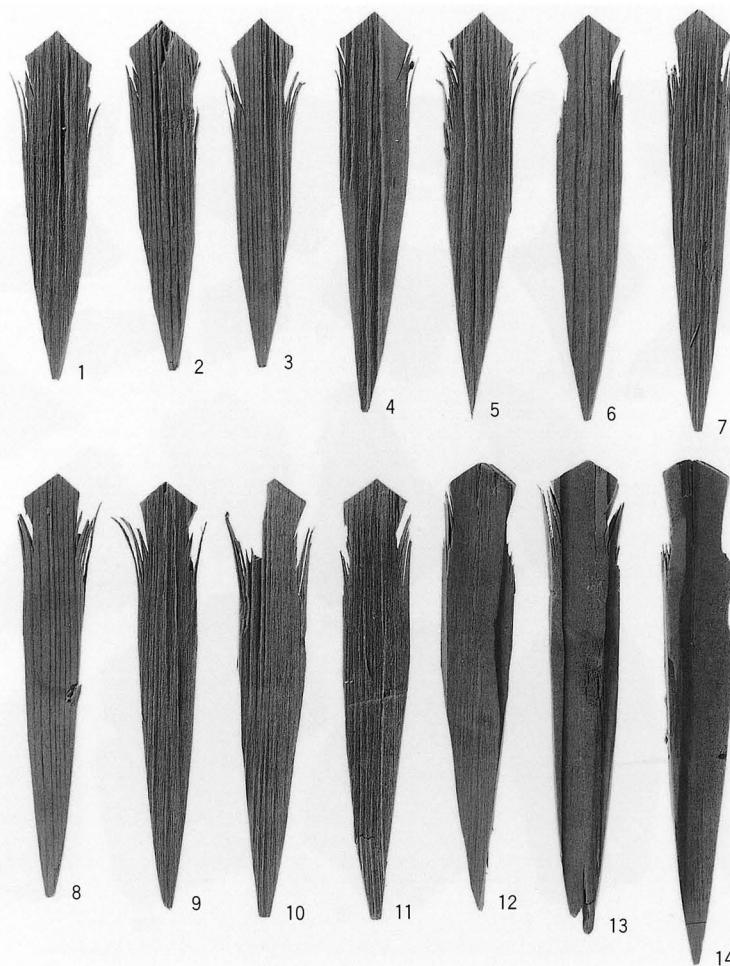
1. 遺構全景(北から)  
[21地区]



2. 遺構全景(北から)  
[22地区]

赤田 I 遺跡 [14・15・17地区] 図版9

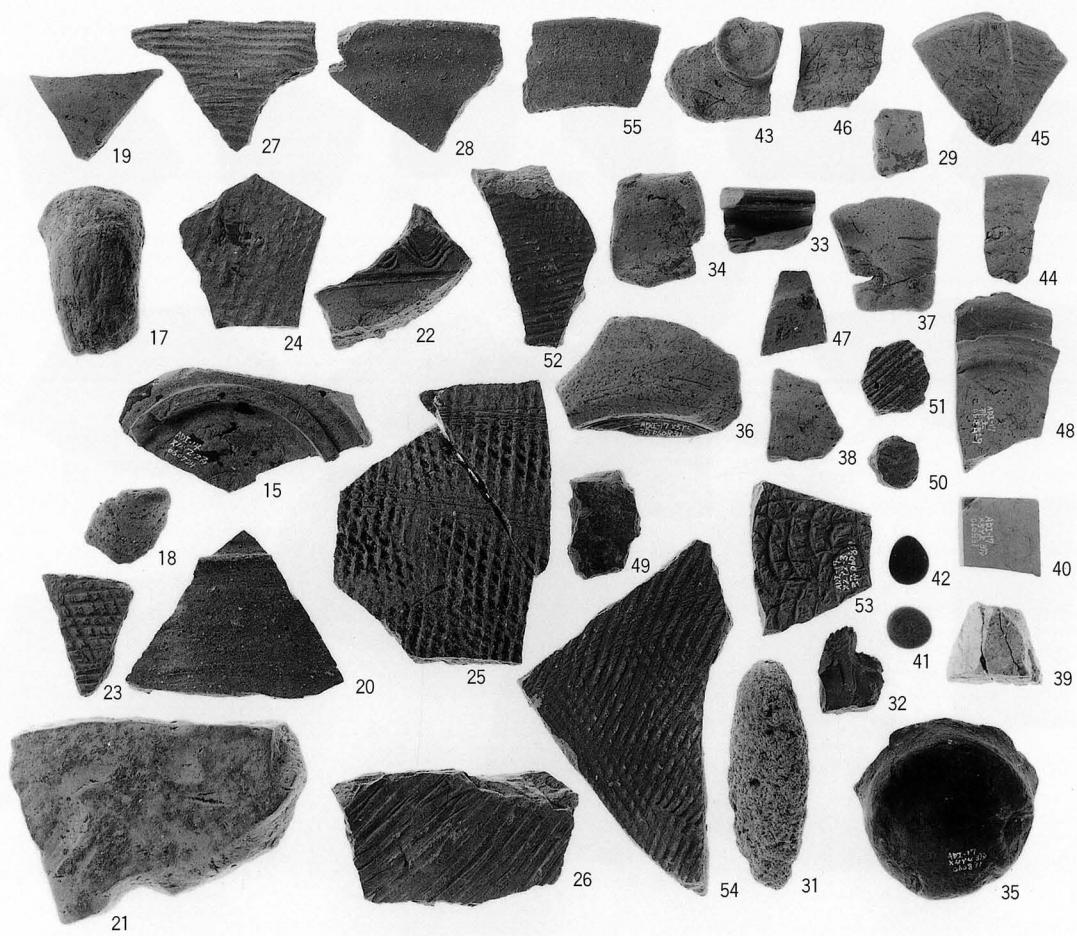
出土遺物  
木製品(14地区)  
土坑SK06



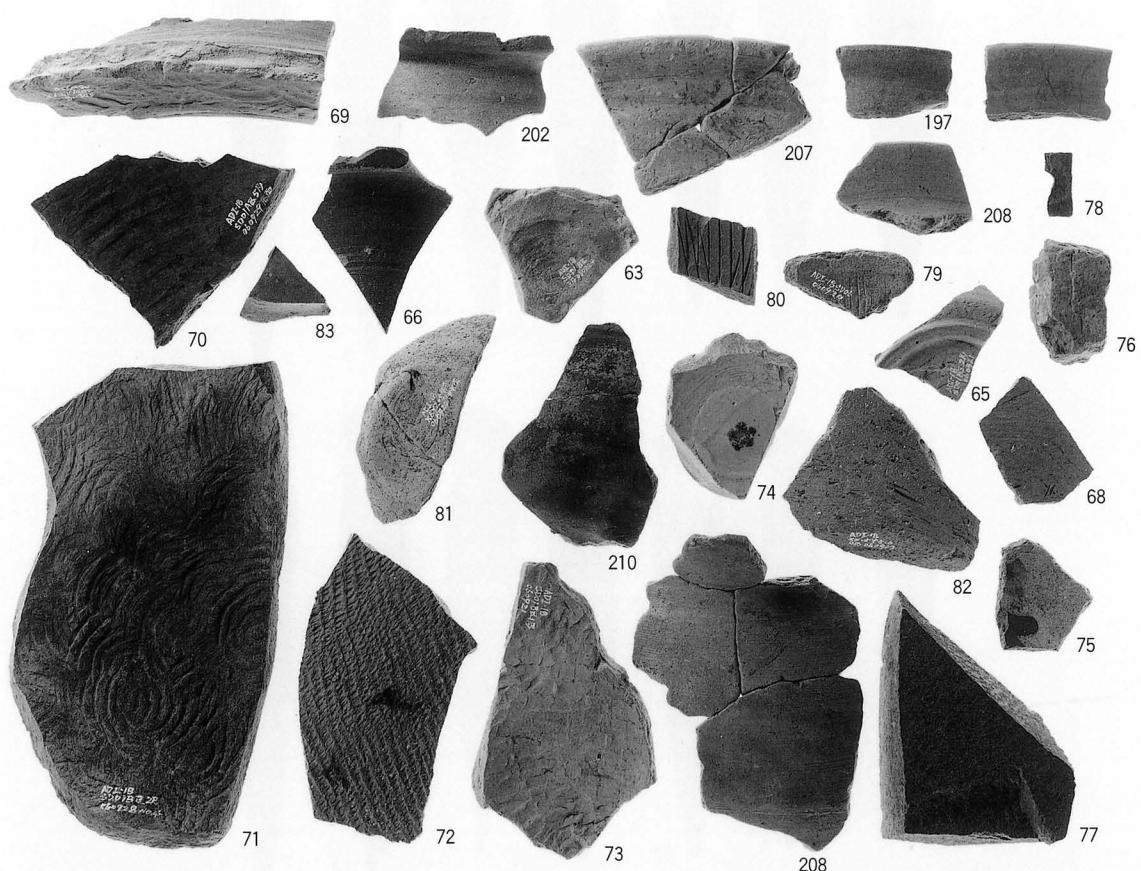
土器(14地区)  
包含層(15)

土器(15地区)  
包含層(17~29)

土器・石製品  
包含層(17地区)  
(31~55)

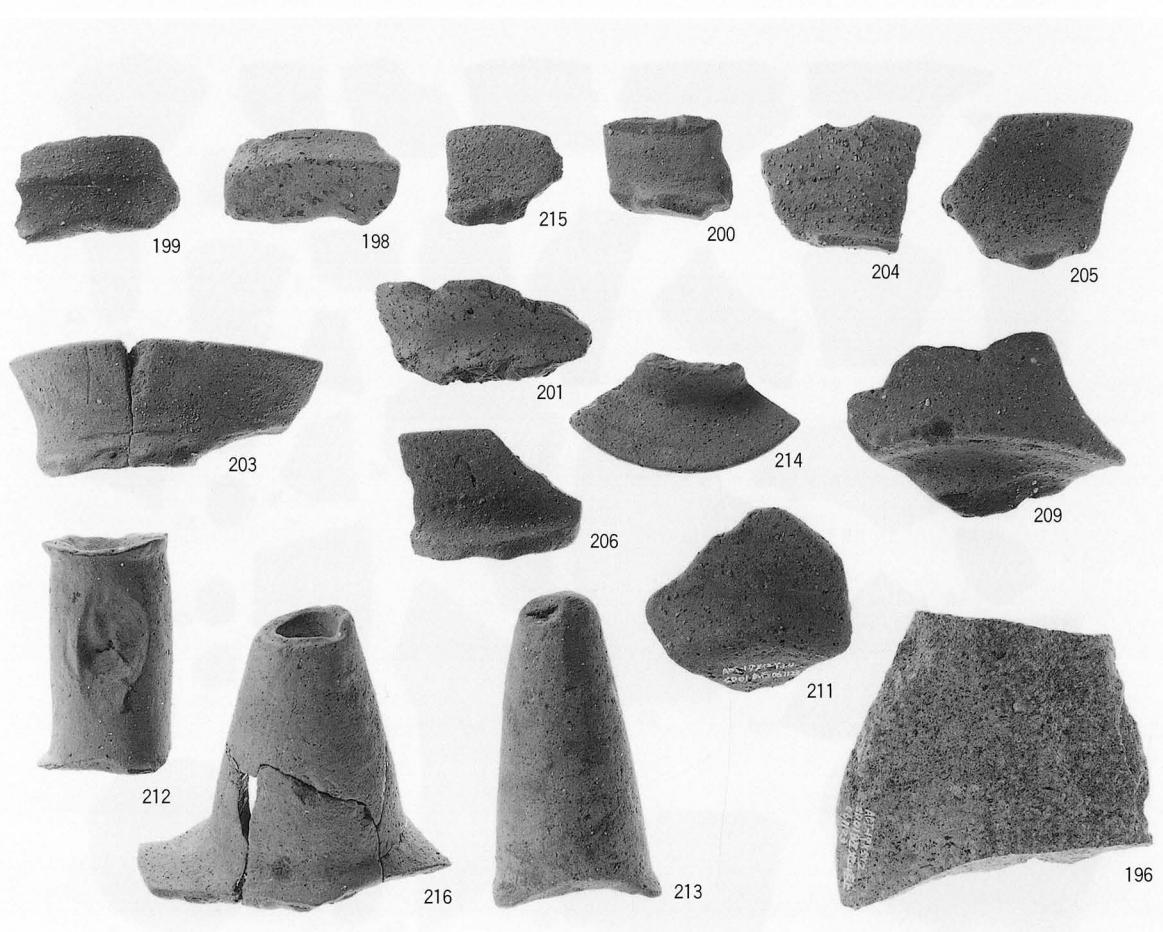


図版10 赤田I遺跡 [18・19地区]



出土遺物  
土器・石製品(18地区)  
溝SD01(63~78)  
溝SD06(79)  
土坑SK11(80)  
包含層(81~83)

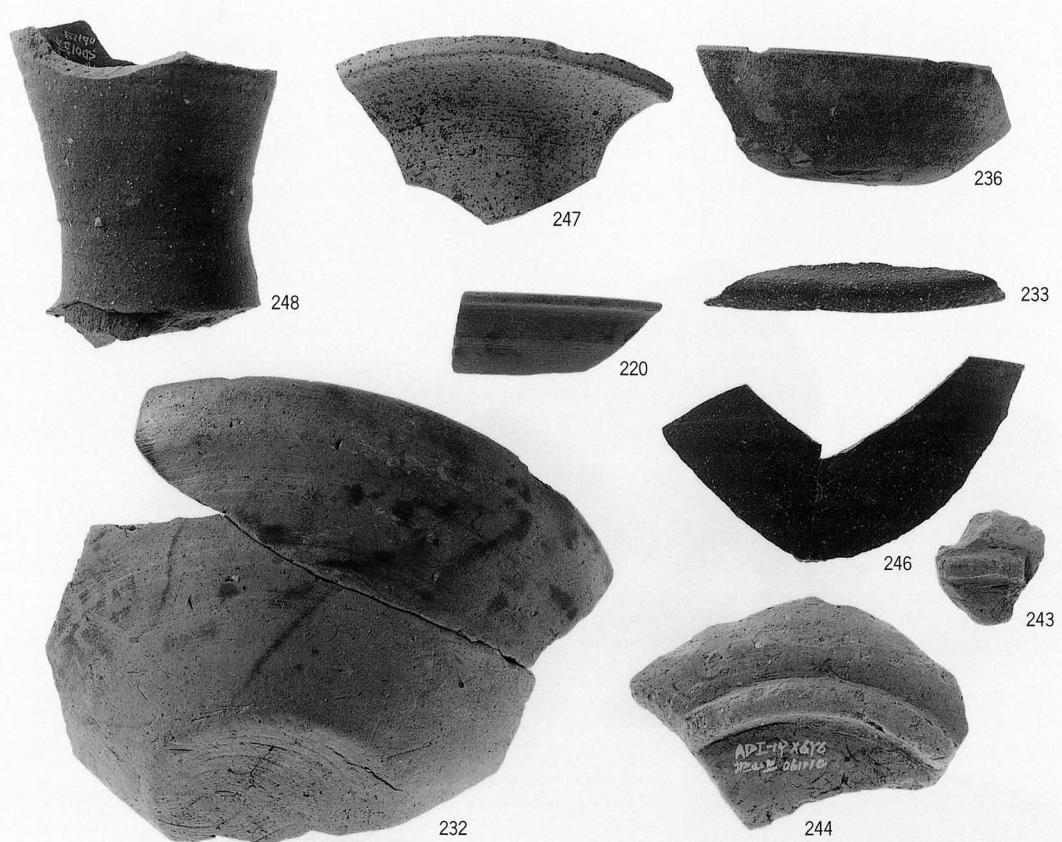
土器(19地区)  
溝SD01(197~208)



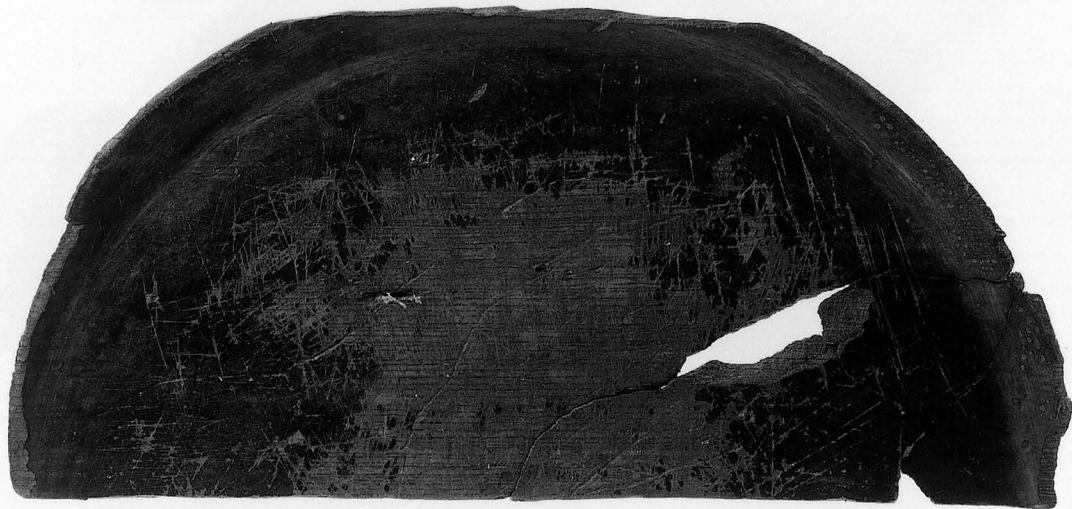
土器・石製品(19地区)  
溝SD01

赤田 I 遺跡 [18・19地区] 図版11

出土遺物  
土器(19地区)  
溝SD01

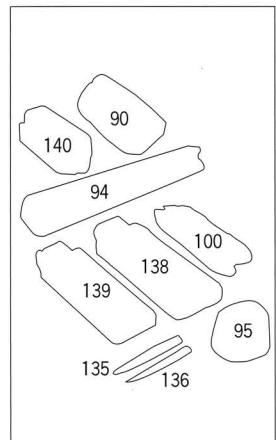


木製品(18地区)  
溝SD01



図版12 赤田I遺跡〔18地区〕

出土遺物  
木製品(18地区)  
溝SD01



赤田 I 遺跡〔18・19地区〕 図版13

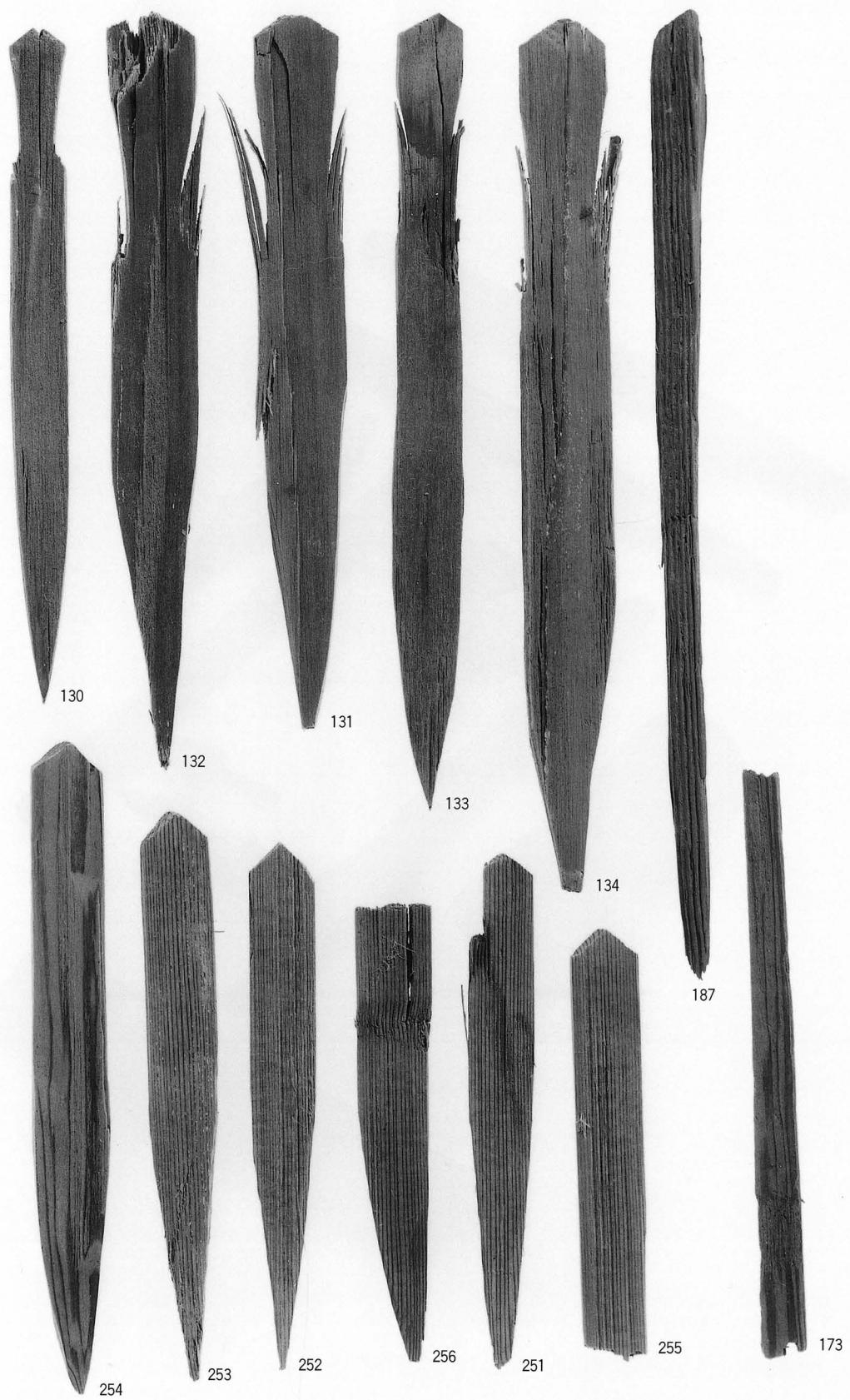
出土遺物

木製品(18地区)

溝SD01(130~187)

木製品(19地区)

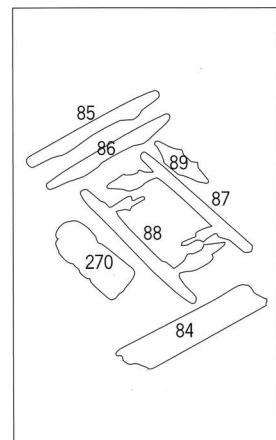
溝SD01(251~256)



図版14 赤田I遺跡〔18・19地区〕

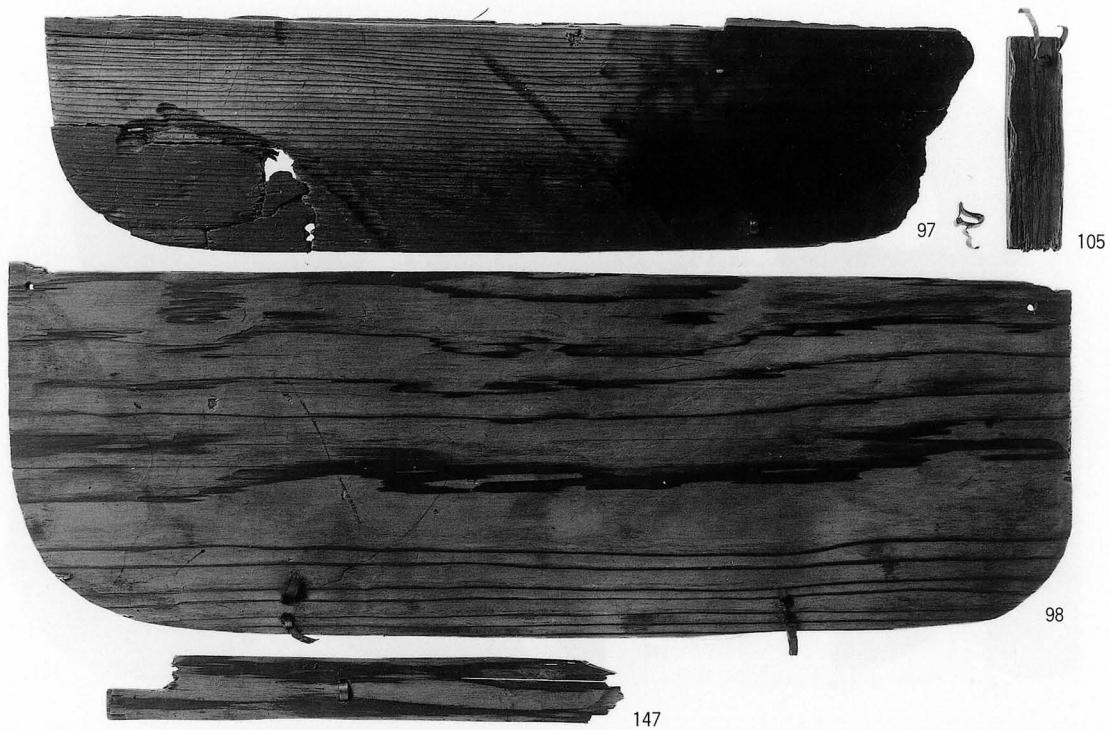
出土遺物  
木製品(18地区)  
溝SD01(84~89)

木製品(19地区)  
溝SD01(270)



赤田 I 遺跡 [18・19地区] 図版15

出土遺物  
木製品(18地区)  
溝SD01

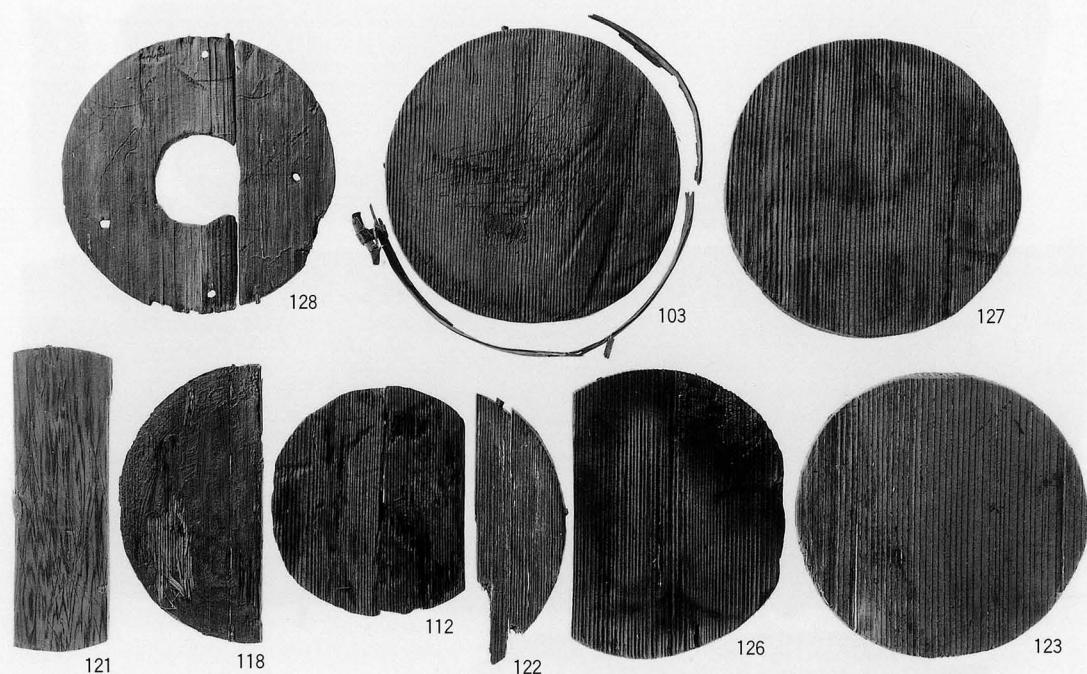


木製品(19地区)  
溝SD01



図版16 赤田I遺跡〔18地区〕

出土遺物  
木製品(18地区)  
溝SD01



木製品(18地区)  
溝SD01



184

143

出土遺物  
木製品(18地区)  
溝SD01



91



92



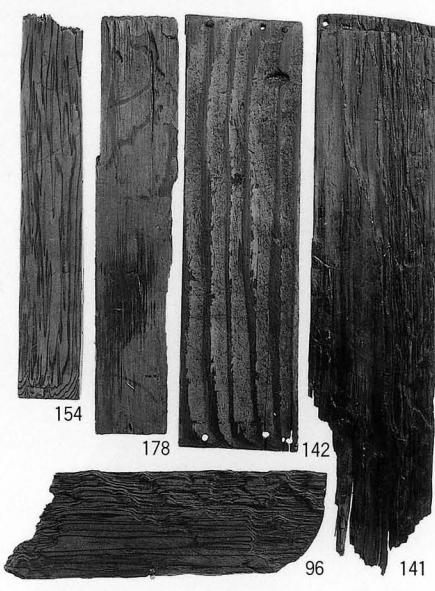
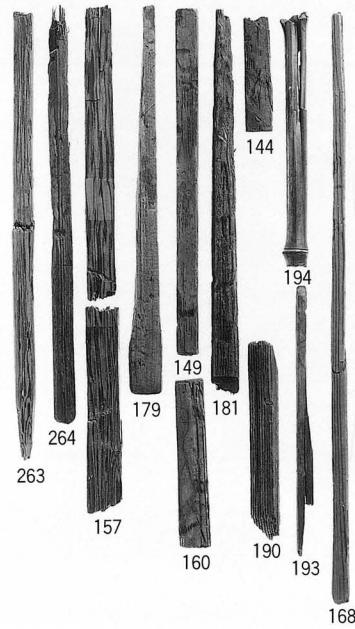
99



261

左 木製品(18地区)  
溝SD01(144～194)  
木製品(19地区)  
溝SD01(263・264)

右：木製品(18地区)  
溝SD01



図版18 赤田Ⅰ遺跡〔20地区〕

出土遺物  
土器(20地区)  
須恵器  
溝SD01



土器(20地区)  
土師器  
溝SD01



343  
352  
300  
317  
330  
288  
323  
319  
329  
277  
302  
355  
298  
354  
353  
341  
330  
323  
319  
329  
355

1. 遺跡遠景  
(北東から)



1

2. 16トレンチ  
遺物出土状況  
(西から)



2

3. 21トレンチ遺構  
(東から)



3

図版20 串田東前田遺跡



1. 遺跡遠景  
(南東から)



2. 38トレンチ遺構  
(東から)



3. 46トレンチ遺構  
(南西から)

1. 46トレンチ遺構  
(東から)



2. 112トレンチ遺構  
(南西から)



3. 121トレンチ遺構  
(南から)



図版22 串田村中遺跡



1. 遺構遠景  
(北から)



2. 154トレンチ遺構  
(南から)



3. 160トレンチ遺構  
(東から)

1. 遺跡遠景  
(南西から)



1

2. 57トレンチ  
遺物出土状況  
(北から)



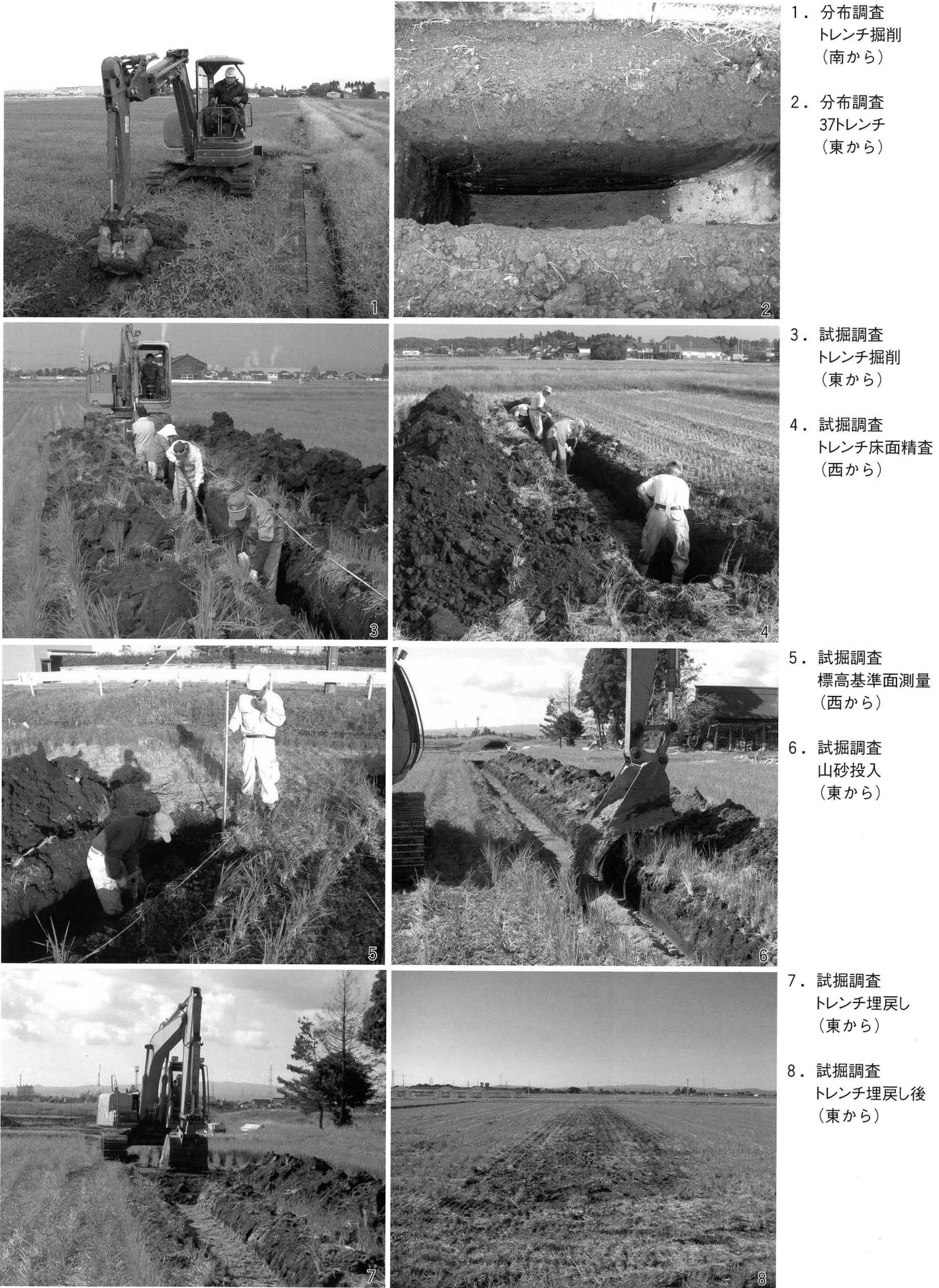
2

3. 59トレンチ  
遺物出土状況  
(東から)



3

## 図版24 作業風景等



1. 1区予備調査  
調査風景



1

2. 1区予備調査  
掘削深度確認



2

3. 1区  
調査風景  
(北から)



3

4. 1区礫層  
(西から)



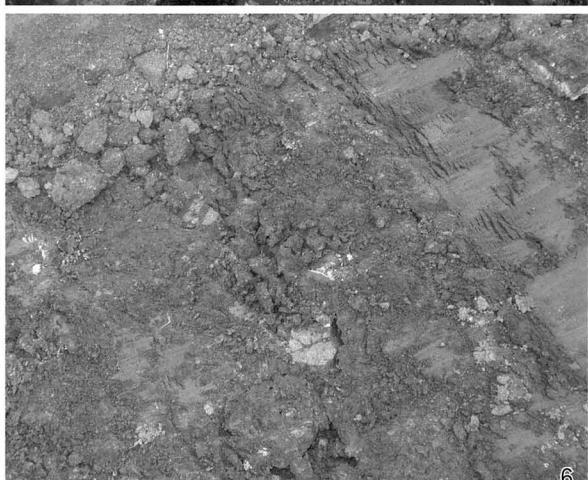
4

5. 2区  
調査風景  
(南から)



5

6. 2区  
遺物出土状況  
(南から)



6

7. 3区  
調査風景  
(東から)



7

8. 3区  
遺物出土状況  
(南から)



8

図版26 試掘・工事立会調査出土遺物(1)



48



49



26



83

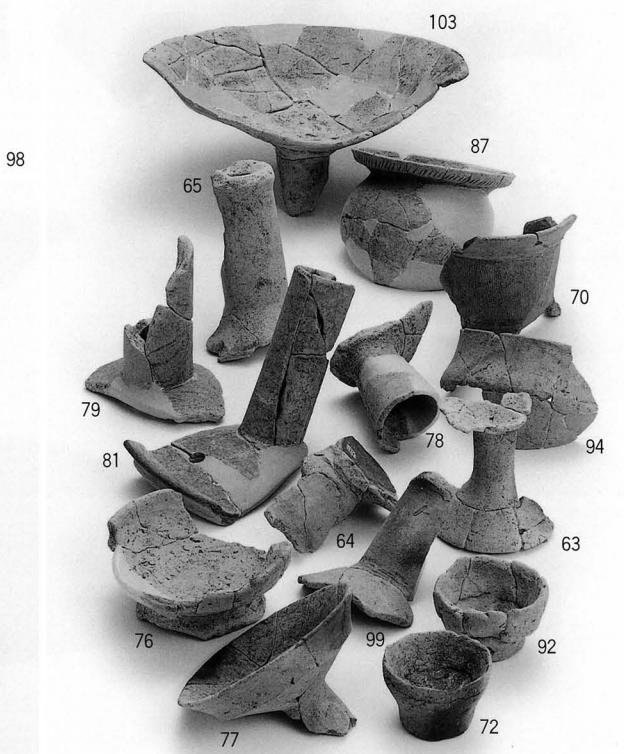


27

89



12



103

87

70

65

79

81

78

94

63

76

99

92

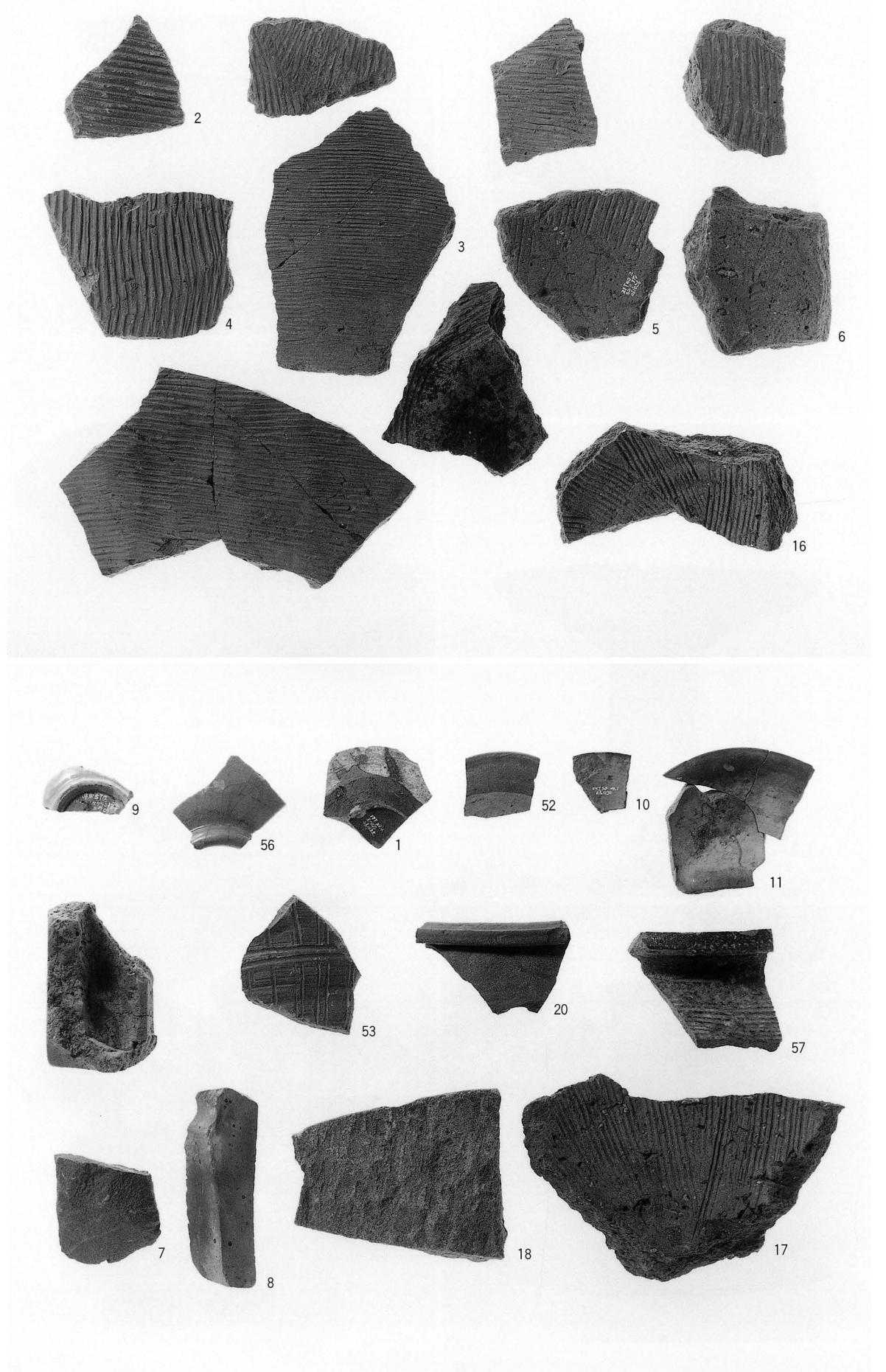
77

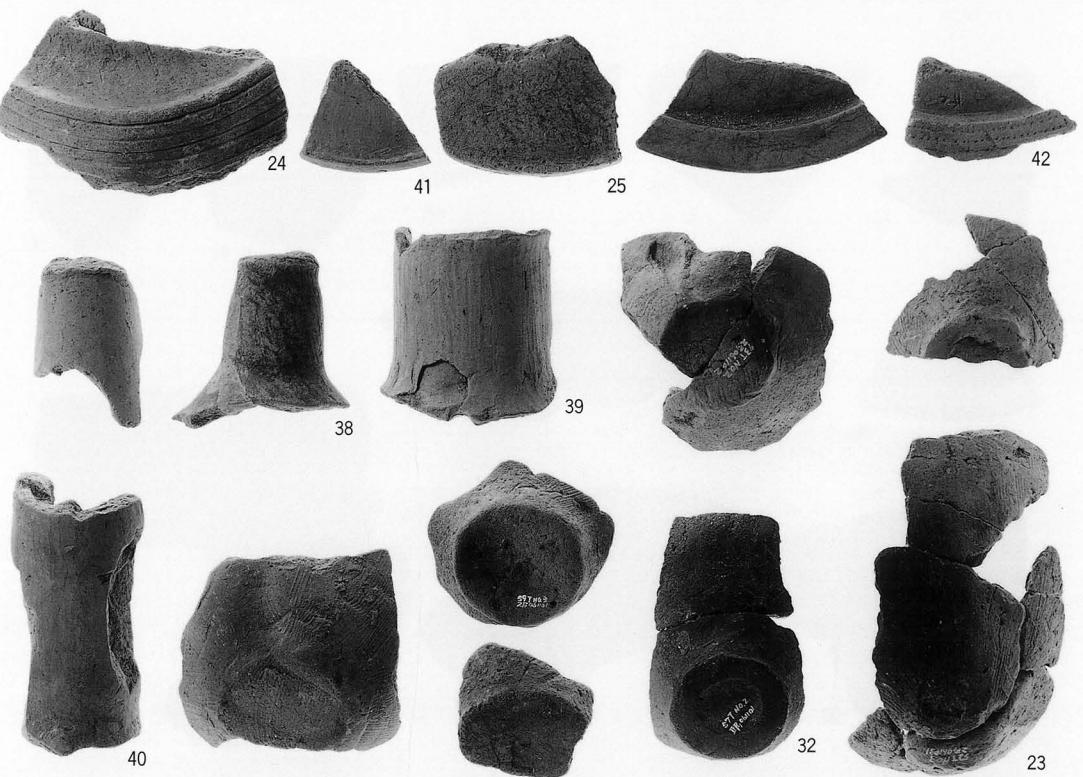
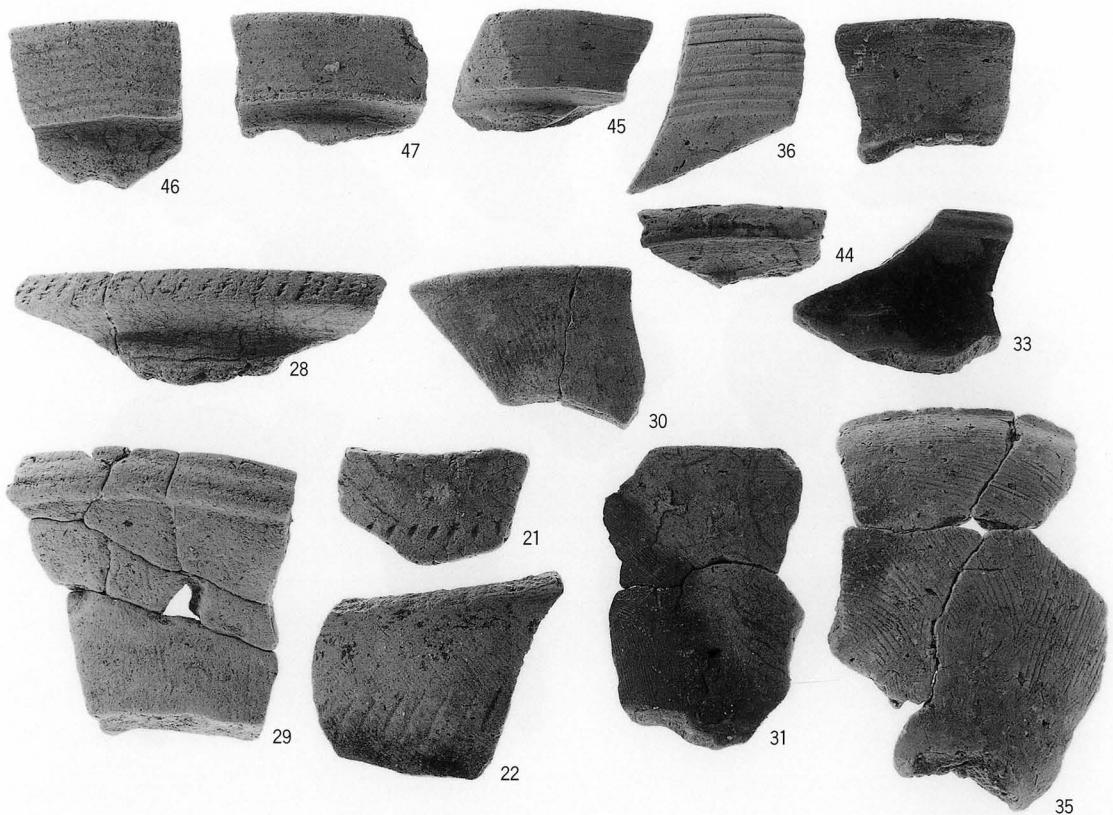
72



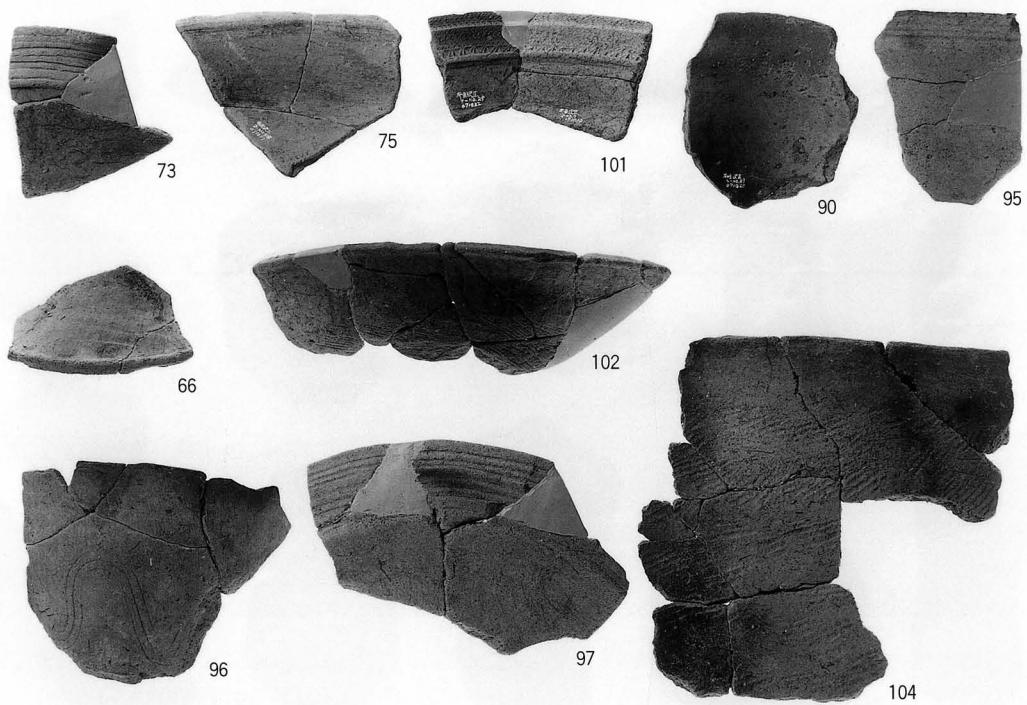
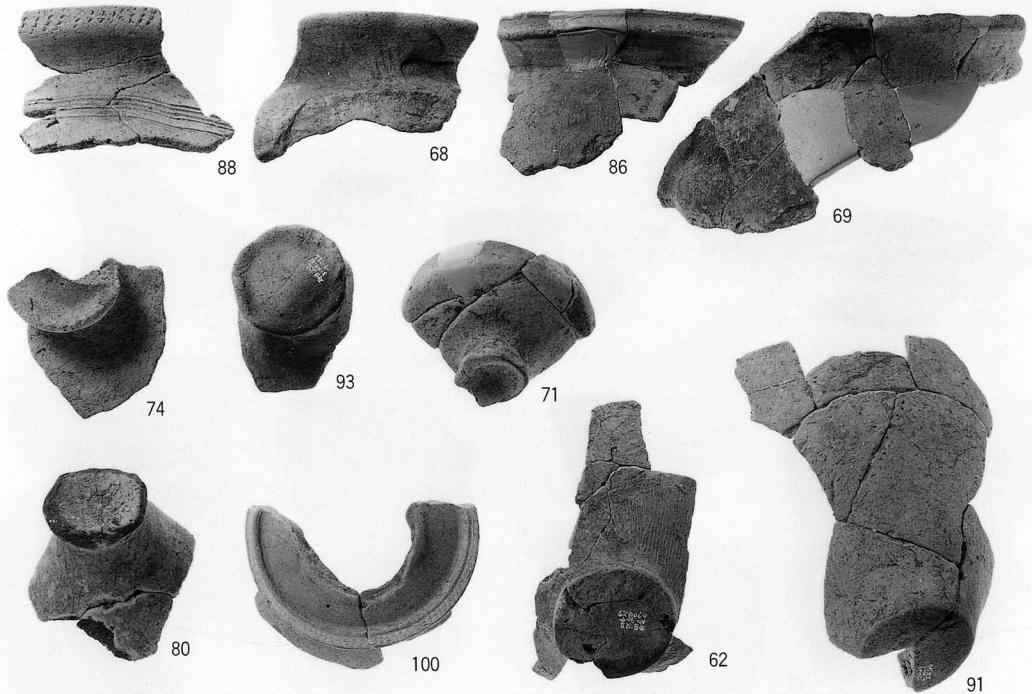
82

図版28 試掘調査出土遺物(1)





図版30 工事立会調査出土遺物



# 報告書抄録

ふりがな	いみずしないいせきはっくつちょうさほうこくいち							
書名	射水市内遺跡発掘調査報告Ⅰ							
副書名	赤田Ⅰ遺跡本発掘調査・串田地区試掘調査							
編著者名	田中 明 金三津 英則							
編集機関	射水市教育委員会							
所在地	〒933-0292 富山県射水市加茂中部893番地 TEL0766-59-8092							
発行年月日	西暦2008年 3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あかんだいち いせき 赤田Ⅰ遺跡	とやまけん いみずし 富山県射水市 いちじょう 一条	16211 (16381)	361 (301)	36° 42' 35"	137° 05' 25"	平成18年度 20060704～ 20061207	686m <sup>2</sup>	個人専用 住宅建築
ぬのめ ざわに いせき 布目沢Ⅱ遺跡	とやまけん いみずし 富山県射水市 くした 串田	16211 (16382)	420 (074)	36° 41' 51"	137° 02' 38"	平成17年度 20051116～ 20051208	241m <sup>2</sup> (分布調査)	
くしたひがしまえだ いせき 串田東前田遺跡		16211 (16382)	417 (071)	36° 41' 42"	137° 62' 33"	平成18年度 20061023～ 20061108	3,045m <sup>2</sup> (試掘調査)	県営ほ場 整備事業
くしたむらなかいせき 串田村中遺跡		16211 (16382)	460 (078)	36° 41' 42"	137° 02' 24"	平成19年度 20070417～ 20071009	1,420m <sup>2</sup> (試掘調査)	
くしたにしまえだ いせき 串田西前田遺跡		16211 (16382)	461 (079)	36° 41' 40"	137° 02' 12"	20070806～ 20071022	3,248m <sup>2</sup> (工事立会)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
赤田Ⅰ遺跡	集落 祭祀	古墳（前期） 奈良・平安	溝 土坑	古墳土師器・須恵器 土師器・黒色土器 綠釉陶器・珠洲 近世陶磁器・木製品				
要約	奈良時代後半から平安時代初頭にかけての祭祀を行った溝を検出した。木製祭祀具や和歌の断片を墨書きした土師器などが出土し、律令体制の年中行事である祭祀（大祓・上巳の祓い・曲水の宴など）が具体的に判明した。律令国家祭祀が都城から地方の村落に至るまで確実に伝播していたものと考えられる。							
布目沢Ⅱ遺跡	集落	中世	溝・土坑	中世土師器・珠洲				
串田東前田遺跡	集落	中世	溝・土坑・井戸	中世土師器・珠洲				
串田村中遺跡	集落	中世・近世	溝・柱穴・井戸	中世土師器・唐津				
串田西前田遺跡	散布地	弥生（後期）		縄文土器・弥生土器				
要約	県営ほ場整備事業に係る一連の調査により、布目沢Ⅱ・串田東前田・串田村中・串田西前田の4遺跡の広がりを確認した。布目沢Ⅱ・串田東前田遺跡は、共に河川間に位置する集落遺跡であり、存続期間も重複する。16世紀中葉頃まで同地に存在した「澤村」の故地と考えられる。串田村中遺跡は、中世末～近世本村集落の一角と考えられる。串田西前田遺跡では、遺物包含層中から弥生土器がまとまって出土したが、当該期の遺構は確認できなかった。							

\*コード欄の( )内の数字は合併前の富山県埋蔵文化財包蔵地図の遺跡番号を示す。

# 射水市内遺跡発掘調査報告Ⅰ

－赤田Ⅰ遺跡本発掘調査・串田地区試掘調査－

---

2008(平成20)年3月21日 発行

編集・発行 射水市教育委員会

〒933-0292

富山県射水市加茂中部893番地

TEL0766-59-8092

印 刷 富山スガキ株式会社

---

本書はFMスクリーンで印刷されたものです。

